

死地に咲く花 第一部

琴乃つむぎ / WordsWeaver

第一章 老雄

純白の大地に鮮血が散る。

その度^{たび}に、激しい血^{たぎ}の滾りを感じる。

眉にも霜附く寒さにあって、身内は熱く火^ほ照り、
革鎧から溢^{あふ}れた熱気が凍れる空気を溶かさんばかり
であった。

眩暈^{めまい}にも似た昂奮に包まれて、知らず、刀柄^{とうのつか}に手
を掛けた。

「逸^{はや}るなよ、アルカイオス」

祖父が静かに言った。

諭^{さと}すでもなし、宥^{なだ}めるでもなし、無論叱る風でも
なし——だが、胸の奥に滲^しみるような声だった。

じわじわと体温が下がっていく。冷えた汗と気^き不^ま
味^ずさが、気持ち悪く纏^{まと}わりつく。

それを紛^{まぎ}らすように、森特有の清澄な空気を深く
吸い込むと、先まで気にならなかった臭いがつんと
鼻から脳へと突き抜けた。鼻腔の奥で凍^{ひな}が凍り、嗅
覚などないに等しいはずだった。にも関わらず、強
烈な臭いである。いかに馴染んだ臭いといえども、
汗をたっぷり吸った革鎧の臭いほど酷^{ひど}いものはない。
気分はますます悪くなった。

「汝^{なんじ}は援護^{えんご}じゃ。しっかりと弓矢を構えておれ」

祖父ステファノスは多くは語らない。「教え諭

す」というようなことはしない。

たまに口を開けば、

「一点ばかりを観るでない。観るともなく全体を観よ」

と、難しいことを言う。

後は随ついて来いとばかりに広い背中を見せるだけである。

解わからぬままに随ついて行くことがほとんどであるが、この戦いに於おいて、援護に回された意味が解らぬほど愚かではない。

人の上に立つ者の高貴さと力強さを持った顔付き。そこに精悍せいかんさを加味する、日に焼けた肌と錆附いたような銀の髪。そして、己が信義かたくを頑かたくなに貫き通さんとする青い瞳。

そういった風貌は、彼の性情をそのまま表していた。敵と見ると闇雲やみくもに突っ込んでいってしまうのである。

人並み以上の上背うわぜいに、靱しなやささと力強さを併あわせ持った、無駄の無い筋肉——そういった、戦士として恵まれた肉体を持つゆえか、それを持って余しているようなところがあるのやも知れぬ。

猪突猛進は血気盛んな若者なればこそ、と断じることもできようが、領主の継嗣けいしとあらば、そうも言とってられないとし齡としになった。もう十八である。

——甘えがある。

祖父への甘えが。

背後に、戦神イスターリスと見紛^{みまが}うばかりの祖父が居る。

炯炯^{けいけい}たる眼光、猛^{たけだけ}猛しい眉、眉間の皺^{しわ}の深さは、ひとかたならぬ人生を窺^{しの}わせる。頭髪、髭^し眉^びは白くとも、ぴんと伸びた背筋に老いなど微塵^{みじん}もない。

鉄鎖を縫い込んだ鞣^{なめ}し革の鎧に青の戦衣、常に風を孕^{はら}み、靡^{なび}かぬことの無き青のマントを纏^{まと}い、巍然^{ぎぜんき}屹立^{つりつ}として己が背後に在る。

そう想えばこそ、血の滾りに身を委^{まか}せることができるのである。

アルカイオスは踝^{くるぶし}に至らぬほどの雪を踏み締め、弓矢を構え直した。

その先には、手負いの獣一頭と、それを退治んとする槍兵三人がいる。

狙うはイゴール——暗雲垂れ込める北東の彼方^{かなた}より来し魔獣。人間や家畜を好んで襲う、悪の種族に連^{つら}なる獣である。

背筋に沿って二本の黒い糸^{すじ}が入り、茶褐色の毛で被^{おお}われたその体は細長い。イタチによく似ているが、立ち上がれば人間の背丈を超える。

その高さから血の如く赤い三つ眼で睨まれると、どんな漢^{おとこ}でも怖^{おそけ}気を禁じ得ない。しかし、そんなも

のを感じている間もなく鋭い爪が襲ってくる。くらえば肉ごとごっそり持って行かれる。

^{ながえ}長柄や飛び道具で攻撃するのが常道だが、多少距離をとったからといって油断はできない。^か咬みつきがある。

咬みつきは最も注意を要する攻撃である。正面から^{すさま}凄じい速さでぐんと伸びてくる。常人に反応できる速度ではない。牙には遅効性の毒があるが、^{くび}頸に咬みつかれたらひとたまりもない。

この獣に刀剣で立ち向かうのは愚かというより外無い。ましてや一人で立ち向かえるものでもない。

とはいえ、たった一人で勝利した勇者がおらぬわけでもなかった。アルカイオスの祖父ステファノスがその一人である。

幼い時分にはその時の話をよくせがんだものだが、その度にステファノスは苦笑するような微妙な顔つきをして、

「若気の至りじゃ。たまたま^{おんちょう}イスターリスの恩寵を^{たま}賜わった——それだけのことよ」

と言うだけだった。

そんな祖父に^{なら}倣うべく無謀な行動に走るわけではないが、憧れはある。誘惑もある。

——死にたいわけではない。

それでは何なのか？

——^{わか}判らぬ。

判らぬから戦うのかも知れない。

木々と槍兵の合間を見定め、矢を放つ。左眼に命中。叫ぶべく^{あら}露わになった喉に^す隙かさず槍が入る。それが^{とど}止めとなった。

残るは一頭。

一行の前に現れたイゴールは二頭である。

アルカイオス、ステファノス他、^{ずいじん}隨身五名と獵師二名は、狩獵のため、凍える山中を^{さまよ}彷徨っていた。

「狩獵にでも行かぬか？」

と、ステファノスが、新年の挨拶にやってきた孫に声をかけたのである。

久久に顔を見せた孫と一緒に狩りを^{たの}娛しもうと思ったのか、それとも、何か予感があったのかも知れぬ。

それは彼の祖父が出逢ったという、不思議な男——^{つば}鍔の広い柔らかなフェルト帽と、長い幅広の青いマントを身に附けた男に、己も出逢えるかも知れぬという期待だったのかも知れぬ。

果たして^{であ}出遭ったのはイゴールであった。憎むべき獣どもは、近隣から^{りやくだつ}掠奪したと思しき家畜を^{くら}啖っている最中であつた。

常に悪の種族の脅威に^{さら}曝されているこの地——デルギリアでは、それほど珍しい光景ではないが、こ

の地方を統べる領主一味としては、このまま見過ごすことはできない。領民の生命と財産を護るのが領主たる務め、貴族たる使命だ。

二対九。

いや、猟犬を入れれば二対十二である。

——悪くはない。抗し得る。

絶対的優位にあるとは言えぬが、ステファノスはそう判断した。

万が一を考えて応援の手配もする。これで二対十一になるが、毒をくらった場合、ここから最も近い集落までの距離を考えるとその方が無難に思える。また、^{うって}討手は多いに越したことはない。

アルカイオスらには^{ひる}怯むべき理由など何一つなかった。名にし負うイゴール殺し、ステファノスが居るといっただけで^{いや}否が^{おう}応にも士気は上がる。

こうして、イゴール退治に当たることとなったのである。

深く突き刺さったのであろう。槍の引き抜きに難儀している兵を^{しりめ}後目に、アルカイオスはもう一頭の方へ目を走らせた。

氷雪造りの^{さいくもの}細工物の如く^{そび}聳える針葉樹林、その向こう五十歩ほど先では、二頭の猟犬がイゴールの耳や脇腹に咬みつき、そこへ二人の槍兵が狙い定めた攻撃を加えている。少し離れたところでは一頭の猟

犬が血の中に斃^{たお}れ、さらに離れたところでは覚束無^{おぼつか}い様子の獵師が弓矢を構えている。

援護に行くまでもなく、すぐさま片^{かた}は附いた。

アルカイオスが合図を送ると、あちらからも合図が返ってくる。

一同の間に安堵の空気が流れた。

その時である。

風が吹いた。

突風だった。

ふわりと世界を被^{おお}っていた雪が、凄^{すさま}じい呻^{うな}りをあげて天に復^{かえ}った。

髪は逆立ち、マントも音を立てて舞い上がった。

ともすれば、幾重^{いくえ}にも革を重ね、鉄鎖を縫い込んだコート型の鎧——リオプの裾^{すそ}も翻^{ひるがえ}りそうであった。

氷雪の礫^{つぶて}を浴びて、アルカイオスは堪^{たま}らず顔を覆った。

どれほどそうしていたのだろう。

不意に、風が熄^やんだ。

恐る恐る顔を上げると、辺りは真っ白だった。

上下左右すべてが白い。白くないのは己だけである。

——「白い闇」……？

麗^{うるわ}しき大地母神メーサが眠りに就くと、氷雪の精霊たちが目を覚ます。女神の御手^{みて}失われし世界で、

彼らは自由^{じゅうきまま}気儘、縦横^{じゅうおうむじん}無尽に踊り狂う。

その狂乱^{ただなか}の直中は、白一色の世界であるという。

それは「白い闇」と呼ばれている。

白、白、白……

何も見えない。

何も聞こえない。

すぐ近くに仲間が居るはずなのに、まったく確信が持てない。先まで居た世界から切り離された感じがする。

——お祖父^{じいさま}様！

声が出ない。

口を開けると、白が飛び込んできて喉^{ふさ}を塞ぐ。

白が、アルカイオスを圧迫していた。

もしや、己は雪の中に埋まっているのではないか？

そう思えて慄然^{りつぜん}とした時、

「ぎゃあ！」

その声で、凍っていた時間が動き出した。

堰^{せき}を切ったように、風の呻りが耳に押し寄せ、氷雪が顔を打つ。肺腑^{はいふ}に冷たい空気が流れ込んでくる。血が一気に身内^{めぐ}を循環する。——どうやら息も止まっていたらしい。

あの声は？ 襲われた？ 敵？ イゴール？

何が何やら判らない。疑問と恐怖が^な縋^まい交ぜになる。

未だ視界は白く^{おお}蔽^おわれている。取り除かんと刀を抜いて振り回す。が、効果はない。^{いらだ}苛立ちと^{あせ}焦りだけが^{つの}募る。

どくどくどく……

動悸が早い。うるさい。耳につく。

「ぎゃうん！」

「ひい！」

また悲鳴。

一同に動揺が^{はし}趨^おる。恐怖と混乱に支配される。

アルカイオスも例外ではなかった。抑えつけている声が漏れそうになる。

「喝！ 落ち着けえい！」

ステファノスの^{だいおんじょう}大音声が、恐怖と混乱を、そして、氷雪の精霊たちをも^な薙^おぎ払った。

視界がさっと開ける。

一同は息を呑んだ。

白い大地、灰色の木々、^{ねずいろ}鼠色の空——無彩色の背景から赤が浮き上がって見える。血と、イゴールの三つ眼が。

針葉樹林の向こうに、一頭のイゴールが^{たたず}佇^たんでいた。

赤く濡れた口は槍兵と思しき人間の喉輪を^{くわ}啞えて
いる。槍兵は絶叫をあげかけたままの顔でぴくりと
も動かず、ただ、己の血で白い地面を赤く染めてい
た。その周囲には、獵師一人と獵犬一頭が^ふ臥す。い
ずれも^{おびただ}夥しい血にまみれ、絶命の様子であった。

残された槍兵一人と獵犬一頭は、逃げるに逃げら
れぬといった^{てい}体であった。

槍兵は^{おたけ}雄叫びとも悲鳴ともつかぬ声をあげて、闇
雲に槍を^{ふる}揮った。しかし、^{ことごと}悉くイゴールには中たら
ぬ。イゴールが啞える槍兵——仲間である槍兵に中
たった。その度に槍兵は、泣き叫ぶような声をあげ
た。

^{かんち}奸智に^た長けたイゴールは、啞えた槍兵を盾にして
いるのである。それはまた、向かい来る槍兵を軽く
^{あしら}応対い、^{もてあそ}玩んでいるようでもあった。

一方獵犬はといえば、槍兵の援護をするでもな
く、後ろ足の間に尻尾を垂らし、ぎよろりと眼を^む剥
き、がちがちと鳴らしている牙の間から、^{おびただ}夥しい^{よだれ}涎
と弱弱しい声を漏らしているだけだった。

「しばし^{こら}堪えよ！ 参る！」

孤軍奮闘する槍兵を激励しつつ、アルカイオスは
駆けた。

ステファノスはその後を追い、

「弓を持って！ 援護へ！」

と、こちら側にいる隨身たちに指示を出しかけたが、

「大殿！ こちらにも！」

反対側から、一匹のイゴールが雪面を滑るようにやってくる。

ステファノスから知らず舌打ちが漏れた。

「そちらは任せた！ イスターリスの加護のあらんことを！」

「イスターリスの加護のあらんことを！」

ステファノスと隨身たちが戦神に祈願し合っている間に、アルカイオスはイゴールの間近に迫っていた。

アルカイオスが近寄ると、イゴールは遊びはこれまでとばかりに啜っていた槍兵を放し、目の前の槍兵に飛びかかる体勢をとった。

——間に合わぬ！

イゴールまであと十歩はある。

考えている余裕などなかった。

「我が父祖の守り手、^{ふんぬ}忿怒せるイスターリスよ！
我に力を！」

気がつけば、握り締めていた刀を槍投げの如く
^{ほう}抛っていた。

イゴールの横腹に突き刺さる——かに見えたが、
不意にイゴールが消えた。

——外した!?

「ぎゃっ！」

刀が虚しく地に突き刺さると同時に、槍兵の頸から血と蒸気が噴き出していた。

イゴールの動きは速かった。

槍兵の頸に咬みついたかと思えば、^{けち}散らした粉雪と共に、^は撥ね返るようにこちらに飛びかかってきていた。

手持ちの武器は弓矢と短刀のみ。

アルカイオスは腰の短刀を抜こうとした。

しかし、それよりもずっと速くイゴールの赤い三つ眼が迫ってくる。

イゴールの動きはよく観えていた。

半ば凍りついた^{めやに}目脂、^{いや}厭らしく^{ほとぼし}迸る^{よだれ}涎、^{しらちゃ}白茶けた牙にこびり付いた血と肉片、硬そうな茶褐色の毛の一本一本、その中に^{まぎ}紛れている^{しらみ}虱まで見えた。

頭では、意識では、己がどう動けばよいかは判っていた。

しかし、

——体が、動かぬ。

意識に肉体が^っ随いて来ない。

なんというもどかしさか。

イゴールが迫る。

背中が^{あわ}粟立つ。

イゴールの眼を見据えて^{おたけ}雄叫びをあげた。

それが唯一できる抵抗だった。

^{いな}否、単なる悲鳴なのかも知れぬ。

——そんなはずはない。

己が悲鳴などあげるものか。

——動け！ 動け！

頸に、腐肉臭のする息を吹き掛けられた——と感じた時、風切り音を聞いた。

頸のすぐ横で、矢が止まっていた。

イゴールの右眼を貫いて。

残る二つの眼が、ぎろりとアルカイオスを^{にら}睥んでいた。

憎しみと口惜しさを籠めて。

その眼をまともに見つめて、アルカイオスは打たれたようになった。

赤い眼に呑み込まれる。

視界が赤一色に染まる。

「気を抜くな、アルカイオス！」

その声で我に返ると、雪上に立ち尽くす己が姿があった。

すぐ横で、雪にまみれ、右眼に矢を突き立てたイゴールが、のそのそと立ち上がるのが見える。

そこへまた矢が飛来し、イゴールの肩に刺さった。イゴールは一声^{うめ}呻いてよろめいた。ぽたぽたと

右眼から血が滴り、ぽつぽつと白雪に赤が滲んだ。

その有り様を、どこか遠くの出来事のように呆然と見ていた。

「走れ！ 槍まで走れ！」

はっとして導かれるままに走り出した。

^{たお}斃れた槍兵の槍を拾え、ということだろう。それ
くらいの判断力は残っていた。

たった十歩、走ればよい。

しかし、体が思うように動かない。

がくがくと体が^{ふる}震える。

ふわふわと雲の上を走っている感じがする。

——あ！

と思った時には、雪面に突っ伏していた。

足が^{もつ}縛れたのだ。

すぐさま立ち上がろうとしたが、またしても己の意思に肉体が反する。大地に縛りつけられたように動かぬばかりか、大地に心地良さすら感じている体に愕然とする。ふんわりと積もった雪は、身を切るような凍てつく大気よりも、優しく温かかった。

ギイイイ———!!

背後からの獣の叫びに、びくりと体が跳ねた。

「イゴールよ！ 混沌より出でし獣よ！ ^{なんじ} 汝の相手

は儂じゃ！」

喘^{あえ}ぐようにして振り返ると、三十歩ばかり向こうに、青のマントを翻して弓矢を構えたステファノスが立っていた。

アルカイオスのすぐ傍^{そば}では、右眼と肩と背中に矢を立てたイゴールが、低い呻きをあげて身動^{みじろ}いでいる。背後からアルカイオスに飛びかからんとしたところを、ステファノスに射^うたれたのだろう。

「汝を射たのは儂ぞ！ 穢^{けが}らわしき悪の獣といえども、汝も雄ならば、やられたままでおることがあるうか！ ——来よ！」

と、ステファノスが言い放つや、轟^{ごう}と大気を切り裂いて矢が飛来する。

イゴールは手負いとは思えぬ動きでそれを避け、ステファノスの許^{もと}へと駆けた。

アルカイオスは己の許から離れていくイゴールに少なからぬ衝撃を受けた。

——弱き者になど用は無い。

黒い糸^{すじ}が二本入った茶褐色の背中は、そんな風に見えるように見えた。

武器も持たず無様に倒れている己など、もはやイゴールの敵ではないのだ。従容^{しょうよう}と啖^{くら}われるべき、た

だの獲物でしかないのだ。

体がふる震えた。

怒りと屈辱に、体が震えた。

なんという不ふ甲がい斐無さか。

意気込んで、先駆けて、この醜態とは……。

冷えていた血がふつつつとたぎ滾ってくる。

重かった体が嘘のように動いた。

跳ねるように立ち上がると、槍でイゴールに対するステファノスが見えた。

ステファノスの方が押されている。いや、どうだろう。余力が観える。虎視眈眈こしたんたんと一撃必殺を狙っているように観える。

アルカイオスは矢をつが番えた。

このまま祖父にまか委せて退き下がるわけにはゆかぬ。いや、祖父に斃させるわけにはゆかぬ。

——あれは、私の獲物だ。

ゆず譲れぬ。

イゴールの動きを見定めていると、目の端に影が過ぎよった。イゴールだ。ステファノスの右斜め後方より駆けてくる。その反対側、左斜め後方では、未だ隨身たちとイゴールが戦っている。となれば、新手であるらしい。

「お祖父様！」

ステファノスを振り仰ぐ。

せつな
刹那、青い瞳と合う。

——恐ろしい方だ。

と思った。

背後であるにも拘らず、^{かかわ}目前のイゴールに集中しているにも拘らず、新手の接近に気づいていた。

青い瞳は語っていた。

——背後のイゴールを射て。

と。

無茶だと思った。

木が邪魔だ。

イゴールは木々を縫ってやってくる。しかも木々という障^{しょうがい}礙など無いかの如き、速さと滑らかさである。

動き回る標的に中てるのは、ただでさえ難しい。

しかし、

——中ててやろう。

目前のイゴールに後ろ髪引かれるが、この際、新手のイゴールでも構わない。

己が力を証明する。

アルカイオスは白の中に見え隠れする茶褐色の動物を見据え、矢先を向けた。

イゴールの動きに沿って矢先が揺れる。

なかなか定まらない。

イゴールが迫る。

ステファノスに迫る。

五十歩、四十歩、三十歩……。

革手袋の中が汗でべとつく。

読め。

感じ取れ。

イゴールの動きを。

大気の流れを。

森の^{たたず}佇まいを。

己が力を。

「ウッドラ殺しの大いなる神よ、我に力を……」

射手の加護神にして、狩猟神たるダルフォースに
祈りを^{ささ}奉げる。

不意に、拡散していたものがあるべきところ正し
きところへすっと収まり、ひとつに^{つな}繋がったような
気がした。

イゴールに到る道筋が^{きら}燦めく線となって視えた。

——中たる！

自信でも^{うぬぼ}自惚れでもない。己が力を超えた、必然
とも理とも^{ことわり}いうべきものだった。

「ウッドラ殺しの大いなる神よ、願わくば、我が狙
い、外させ^{たも}給うな！」

祈りというより感謝を籠めて、そう唱えた。

^{つるおと}弦音が静かに響き渡った。

その音に乗って、矢は緩やかに弧を描き、吸い込

まれるようにイゴールの^{もも}腿に中たった。

イゴールは突^つんのめった。粉雪を捲^まき散らしてごろごろと雪面を転がった。

アルカイオスは呆然とその^{さま}様を見ていた。神の御手に触れたような気がして、畏敬に打たれていたのである。

しかし、それも刹那、雪にまみれたイゴールがもぞもぞと動くのを見て取るや、我に返った。

素速いイゴールの足が止まった絶好の機会を逃してはならない。最前の如き神の力を借りた矢は、そうそう射てるものではないし、それを無意にするのは神への^{ぼうとく}冒瀆というものである。すぐさま次の矢を放って、このまま足留めするのだ。

——いや、射殺してしまえ。

アルカイオスは背負った^{やぶつ}矢筒に手を伸ばした。

^{つか}掴む、掴む、掴む………どうということか、そこにあるべき矢を^{ことごとく}掴まず、^{くう}悉く空を掴んだ。

^{いぶか}訝しんで、^{うしろで}後手に矢筒を振ってみた。果たして何の手応えもない。^{から}空である。

——馬鹿な！

矢は二束——二十六^{せき}隻持って来ている。使ったのは、初めのイゴールに三隻、今のイゴールに一隻、計四隻で、残りは二十二隻あるはずである。それは間違えようがない。

戦士たる者、すべからく己が身を護る武具を把握しているべきである。

初めて武器を手にした時、まずそのことを身体に叩き込まれた。一隻でも矢数を間違えようものなら、馬用の鞭で引っ叩かれたものである。

己が放った矢は何隻か、残りの矢は何隻かなど、頭で考えるまでもなかった。身体が覚えているのである。

アルカイオスははたと思い当たった。

——転んだ時だ。

慌てて振り返る。案の定、そこにあった。

一歩、二歩目で、落ちている矢を真上に蹴り上げ、引っ掴む。

そして振り返ると——

祖父の頸に、イゴールの牙が食い込んでいた。

アルカイオスは目を見開いた。

その光景が何を意味するのか、判らなかつた。

直立不動の祖父は、かっと双眸を開き、ぐっと歯を食い縛り、頸から流れる血で青の装束を黒く染めていた。

その光景が何を意味するのか、判らなかつた。

——射たなくては。

と、真っ白な頭の中にふっと浮かんだ。

ああ、そうだ。イゴールを射たなくては。あのイゴールは己が狙っていたイゴールだ。

幸い、イゴールの動きは止まっている。祖父の頸に咬みついて止まっている。外すべくもない。

射たなくては。

殺さなくては。

極限まで引き絞った弓が、きしきしと悲鳴をあげる。

——殺す！

大気が鳴った。

矢はイゴールの頸に突き刺さった。

そうしてイゴールの咬みつきが弱まった瞬間、^{そそ}塑像^うの如き様子であったステファノスの体が動いた。

もう一匹のイゴール——先までステファノスと対峙していた、死して間もないイゴールから槍が引き抜かれ、その^{いしづき}石突が頸に咬みついているイゴールの腹に見舞われた。

「……動いた」

ステファノスが動く様を見て、アルカイオスの手から弓が落ちた。安堵で力が抜けた。

頭の片隅にありながら目を背けていた、「死」という言葉を抹消する。

——死ぬわけがない。

あのお祖父様が、死ぬわけがない。

デルギリアの東では野蛮な騎馬民族トゥライが跳ちようりょうし、北東では悪の種族が跋扈ばっこする。彼らは、たびたび、デルギリア、すなわち、ローゼンディア王国への侵入を繰り返す。ゆえに、王国最北東に位置するデルギリアは、常に王国の鉄壁たることを課せられてきた。

その激闘の歴史、輝ける数多あまたの勇士たちの中にあっても、ステファノスの武勇は埋もれぬであろう。それほどの人である。

それほどのも豪傑ステファノスが、死ぬわけがない。

——死ぬわけが……

ぱっ、と、大気に鮮血が散った。

ステファノスの頸から、イゴールの顎あごとが離れた瞬間のことであった。

血が勢いよく噴き出した。

冬の大気の中、熱い血は湯気さえ上げながら、見る間にステファノスの広い肩おおを被い、流れてゆく。足許の雪が、忽ち赤い色たちまに染まってゆく。

——死ぬわけが……

直立の姿勢のまま、ステファノスの体がぐらりと傾かしいだ。そして、そのまま、血を噴き上げながら真後ろへと倒れていった。

——死ぬわけが！

「おじいさまあ——!!」

アルカイオスの叫びが森に響き渡った。

^{こずえ}梢に潜んでいた鳥が、^{きちが}気狂いじみた声をあげて騒がしく飛び立つ。

「大殿!?!」

「大殿が！」

交戦中の隨身たちが動揺で崩れ始める。形勢が逆転する。

アルカイオスはステファノスの許へ駆け寄った。

純白の雪の中に、真っ赤な血と真っ青な装束が、色鮮やかに広がっていた。

ステファノスは生気の無い顔で、その中に埋れていた。口から漏れる息は弱弱しく、頸から流れる血は^{おびただ}夥しかった。

その青い瞳は大きく見開かれ、虚空を見つめていた。いや、ここではないどこかを視ているようだった。

アルカイオスは恐れに^{ふる}顫えつつ、しかし^{いやおう}否応もなく引き寄せられるように、祖父の目を覗き込んでいた。

瞳に何かが映っている。

瞳の向こうから何かがやってくる。

この世すべての^{そうじょう}騒擾を呑み込む、馬蹄の音が聞こ

えてくる。

善き死者の魂が集う冥界、その王ネストスの忠実なる僕、七の数を持つ死の御使い、オルディヌスがやってくる。

「……！」

アルカイオスは声にならぬ叫びをあげ、ステファノスの頸に手を当てた。そうして、溢れ落ちていく血を、生命を、止めようとした。

「お祖父様……申し訳ありません……」

私の過失です——そう、顫える声で言いかけた時、ステファノスの眼光が今一度輝き、アルカイオスを射竦めた。

「愚か者め!!」

アルカイオスの全身がびくりと顫えた。

血とも唾ともつかぬものが、アルカイオスの顔に飛び散っていた。

いったいどこにそんな力が残っていたのか、激しい叱責の声だった。こんな祖父は初めてだった。

ステファノスは息も絶え絶えに言葉を紡いだ。

「何を、しておる……なんという声を、あげる……あれでは……隨身らが、動揺する……儂のことなど、構うな……汝の所為で、儂が死ぬなぞ……」

ステファノスは、苦痛に顔を歪めながら晒った。

「……戯けた、ことは……申すでない……天命じゃ

……我が、命運は……ここに尽きる、が……我らが、為すべきことは……尽きぬ……^ゆ行けい!!」

我らが為すべきこと——騎士たる身、貴族たる身には、言われるまでもなく解りきったことである。

ステファノスに致命傷を与えたイゴールはすでに去った。追わなくてはならぬ。討たなくてはならぬ。

イゴール退治は騎士の使命であることは元より、デルギリアの^{ほま}誉れたるステファノスを斃したイゴールを逃したとあっては、領主たる父に、家の者たちに、領民たちに、顔向けできぬ。

こんな血止めなど、している場合でもなければ無駄なことでもあった。祖父が助かるわけでもなし、己が過失が^{ゆる}赦されるわけでもなし。

なんと無様な真似をしているのか。

そうこうしているうちに、^か彼のイゴールに逃げ切られてしまうやも知れぬというのに。

血が滲むほど唇を噛んだ。

そうしなければ、激情に体が^{ふる}顫え、涙が^{あふ}溢れそうになる。

泣く資格は、己には無い。

アルカイオスは喉に引っ掛かっている^{おえつ}嗚咽をぐつと呑み込み、祖父としっかり目を合わせた。

「お祖父様……」

声に顫えはない。

「お祖父様は、我らデルギリア、ひいてはローゼンディアの誉れです。……永遠とわに」

そして止血の手を放した。再び血が流れ出した。

ステファノスは穏やかに微笑み、静かに目を閉じた。

それを確める間もなく、アルカイオスは立ち上がった。

——かたき仇を討つ！

それが己が過失つぐなの償いになるなどとは、一毫いちごうたりとも思っていない。しかし、己が遣るべきことである。

か彼のイゴールの、雪上に残った足跡は東へ向かっている。まだそう遠くへ行っていない。まだ間に合う。

アルカイオスは馬を繋ぎ止めているところまで走りながら、及び腰の隨身しったらを叱咤した。

「ひる怯むな！ ステファノス・セウエルスのとむら吊い合戦である！ 負けることは赦さぬ！ ——私は仇討ちに参る！」

「御意！」

アルカイオスはあしげ葦毛の愛馬にまた跨がり、イゴールの跡を追った。

森がざわ騒めいた。

雪が降り始めた。

第二章 少女の見る夢

水が滴る音がする。

遠く……近く……遠く……近く……

高く……低く……高く……低く……

ぽたん……ぴちよん……ぽたん……ぴちよん……

心地好い響きに耳くすぐ擦られながら、少女は夢と現の

あわい まどろ
間で微睡んでいた。

歌う。

踊る。

蒼天と緑野の狭間で。

はて
涯しなき草原の草花に囲まれ。

いずこより、花の香ぞする、吹く風の

そよぐはちぐさ千草、野辺に萌ゆ

赤、白、黄色、とりどりに

あお
蒼に映えたる花咲けり

女神のみて御手なるこの大地

崇めん、讃えん、おお、メーサ

我らが母なるおんめがみ御女神

不意に、正面から背後へ、草原の上を影が走り抜けた。

振り返って仰ぎ見る。雲ひとつない青空をわし鷺が飛

んでいく。

鷺を見送って視線を下げると、陽光を背にした騎馬の影がそこに在った。

美しい影だった。

地から生えるが如くどっしりと佇^{たたず}み、それでいて鈍重さなど感じさせぬ精悍な馬の上に、均整のとれた逞^{たくま}しい男の体軀^{たいく}がある。

いや、「馬の上に男が」というのは、どうもしっくりこない。男と馬はそれでひとつの生き物のようであった。

少女は男に話しかけようとした——その瞬間、ひんやりとしたものが頬を打った。

——雨？

訝^{いぶか}しんで、雲ひとつない空を見上げる。

すると、空が落ちてきた。

いや、浮いている感覚がある。己自身が動いている。空に吸い込まれる。

怖くなって目を閉じ、再び開くと、机に突っ伏している己が在った。

ぽたん……ぴちよん……ぽたん……ぴちよん……

水の滴る音が明確に聞こえる。

涯しない草原も、騎馬の影も、すべて夢だったの

だと告げている。

頬に落ちた滴を拭い、身を起こせば、そこに在るのは石造りの小さな部屋だった。最低限の生活必需品と書物しかない、殺風景な部屋だった。花の色も香りもない、^{かび}黴臭い、無彩色の部屋だった。

そこに装飾を加えてくれるのは、窓から見える空と山と森、窓から投げかけられる日月の光、そして、雨の日・冬の季節に馴染みの雨漏り・結露——その滴は、石壁に黒い涙を^{ぼうだ}滂沱と描き、また、天井に張り^{めぐ}繞らされた^{くも}蜘蛛の糸に絡みついては、わずかな光にもきらきらと輝いて、^{おぐら}小暗い部屋に星空を現出せしめるのだった。

それが、少女の世界のすべてだった。

特に不満はない。

不満など持ちようがなかった。

この世界しか知らない。

書物にある外の世界、^{ひとづて}人伝に聞く外の世界は、空に浮かぶ雲、あるいは夜空に輝く星の如きもので、見えこそすれ触れることのできぬものであった。

この世界から出るなど思ってもみないことだし、そんなことが可能だとも思われなかった。

ここが己の生きる場所であり、死ぬ場所であった。

その場所に、今は赤い光が射し込んでいる。

異様なほど美しい陽の光であった。ここでは滅多に見られるものではない。背後に山脈を控えている所^{せい}為か、いつもどんよりと雲が立ち込めて、^{くすぶ}燻ったような天気が多いのである。

少女は立ち上がり、窓辺に寄った。

窓というにも癡^{おこ}がましい、奥行きのある吹き抜けの四角い穴には、朱金の後光も^{まぼ}眩ゆく、三体の雪像^{たたず}が佇んでいる。

一体は、鳥の翼を持つ両性具有の若者——ヴァリア教の主神ヴァリアである。

一体は、王冠を被り、マントを付け、蛇が絡みついた杖を持つ貴婦人——ヴァリア教の大地母神メーサである。

一体は、赤い木の実の眼を持つ雪兎——ヴァリア教とは関係ない。

いずれも窓に積もった雪で作った。冬の楽しみである。

少女は雪像を脇^のに退けて、身を乗り出した。

天も地も、何もかもが赤く染まっていた。四階から眼下に広がる森の原は、さながら^ひ緋の絨毯であった。白く冷たいはずの雪が、何やら暖かな気さえしてくる。

しかし、そんな心とは裏腹に、体はぶるりと^{ふる}顫えた。暖炉を見ると、火が消えかけている。目覚めた

時点で気づいていたが、^{まき}薪を取りに行くのが^{おっくう}億劫で、先延ばしにしていたのだ。

冬は極力部屋から出たくない。

とはいえ、さすがにこのまま寝たら凍死してしまう。

凍死など、ここではさほど珍しくもない。よほど注意していても、二、三年に一度は誰彼が死んでいる。

己はよく生きているものだと思う。物心つく前からここに居て、もう十回以上の冬を越しただろうか。

少女はカップに残っていた香草入り果実酒をぐっと飲み干した。これで少しは体が温まる。

そうして覚悟を決めて扉を開けた。

途端、^{ごう}轟と寒風が^{さかま}逆捲き、少女の金の^{すいはつ}垂髪を乱した。顫えあがりながら、すぐさま扉を閉じた。

足下には、闇の底に続いているかの如き^{らせん}螺旋階段がある。

人ひとりがやっと通れるほど狭く、^{てすり}欄なしでは危険なほど傾斜がきつい。というのに、そんなものはないどころか、ところどころ^{ひび}罅割れ、崩れてさえもいた。その上、十段ごとに小さな採光窓はあっても足許を照らすまでには至らず、ほとんど闇の中を歩くようなものであった。

しかし、少女にはなんの問題もない。

幾千幾万幾度となく通っている道である。目を
つむ瞑ってさえ、後ろ向きでさえ、難^{なん}なく歩ける。

とはいえ、冬になると生起する問題があり、それはまた別問題であった。

冬はただでさえ危険な階段が凍る。滑り止めに砂を撒^まいてはいるが、それでも滑らないということはなく、冷や冷やさせられることも屢々^{しばしば}であった。

少女は何枚も重ね着している毛織^{うわぎ}の上衣を掻き合わせ、身を縮こませつつ、

「さあさあ、通りますよ」

と、声と足音を反響させながら下りていく。

すると、そこここで、かさこそ、ずるぺたと、何か^{うごめ}が蠢く音がする。

それらは少女にとって隣人ともいうべきモノたちであった。冬、それも、風^{しの}凌ぎにしかならぬ粗末な塔とはいえ、闇の中で活動しているモノたちが居るのである。

それらの脇を通って一階まで下りると、その空間の大半は薪によって埋め尽くされている。

そこから両手で掴める分だけ取り上げる。

あまり多く持って行くわけにはいかない。

虫が湧く。

薪の中に潜んでいる愛すべき隣人たち——^か蚊、

のみ あり そうむし かみきりむし
蚤、蟻、象虫、髪切虫……などといったモノが、暖かさに釣られて出てくるのだ。

少女の部屋にはすでに居候^{いそうろう}が居る。石畳に敷いている湿った藁^{わら}を寝床にし、居候の分際で家主を食料とする不届きモノたちである。

天井の主にして、ローゼンディア王国建国王の名を授けられた蜘蛛^{くも}ベルディッカス、寝台下の主にして、ローゼンディア王国勇者王の名を授けられた蜘蛛プルビアコスが、名付け主にして家主である少女の身辺警護に当たっているが、戦力的に観て、これ以上居候は増やさぬ方がよいと思われる。

と、いつもの如く、凍えながら薪を取りに来なければならぬ面倒臭さを断ち切った後、夕食がまだであったことを思い出した。

ついでに持って行こうと、御膳が置かれるいつもの小卓を見ると……何もない。

——忘れたのかしら？

ないことではない。稀^{まれ}にそんなこともある。

今日から新年祭が始まっている。皆、祭りを楽しんでるのだろう。

そう思うと、少女の心に激しい感情が湧き上がった。感情のままに呼び鈴紐^{ひも}に手を掛け、勢いよく限界まで引っ張った。しかし、暫^{しば}しの逡巡^{しゅんじゆん}の後、静かに戻した。鈴は鳴らない。鳴らさないように戻した

のだ。

そのまま踵^{きびす}を返した。

——今日は、早く寝よう。

先程居眠りしたばかりだが、寝台に横になれば
きつと眠れる。そして暁^{あかつき}の女神アウラネが訪れて目
が覚めたら、また一日中祈っていよう。

教師たる神官は言う。

「ひたすら祈りなさい」

その先に希望がある、と。

もう祈ることしか残されていない。

しかし、何を祈ればよいのか判らない。

とまれ、祭りはまだ続く。

昨日まで——昨年末の二十四日から大晦日^{おおみそか}まで
は、太陽の復活祭であった。そして、今日から七日
まで新年祭が行われる。この一連の祭りは、エネン
ゲーサと呼ばれている。

祭りの間は、ひとり静かに祈りを^{ささ}奉げて過ごすの
がよい。祭りの騒擾^{そうじょう}を遠くに聞きながらそうするの
は、いつものことだった。

少女の足がはたと止まった。

——何かが^{お か}奇^か妙^{めう}しい。

何かが引っ掛かる。

すぐさま一階に戻り、呼び鈴紐を引く。母屋おもやに通じる扉の向こうで、軽やかな鈴の音が響いた。しかし、それだけだった。待てど鳴らせど誰もやってくる気配がない。

というか、

——静か過ぎる。

祭りだというのに歌声や人声などが聞こえない。

扉に耳を押しつけても、何も聞こえてこない。

こんなことは初めてである。

アクション太陽神の車が天を駆けているうちは、いつも誰かしらが活動している。そういう音が聞こえてくる。

それが、今は、何も、聞こえない。

どくん

と、少女の胸が高鳴った。

恐る恐る扉を開けてみる。薄暗がりに、真っ直ぐ延びた廊下が浮かび上がっている。突き当たりには母屋の扉がある。

少女は母屋の扉まで静かに歩いていき、先程と同じように扉に耳を押しつけた。

「……」

やはり、何も聞こえてこない。

少女はごくりと唾を呑み込んだ。

これはいったい、どういうことなのか？

皆すでに床に就いてしまったのか。

それとも……

少女は向こう側を透かし視るように扉を視た。

この扉の先にはほとんど足を踏み入れたことがない。別段禁じられているわけではないが、自重しているのだ。ここより先は己が居てよい場所ではない。

しかし……

少女は躊躇いがちに扉枠と開閉部の境に目を当てた。そして、隙間から覗き見るべく、わずかに扉を開けた——途端、赤い光が少女の目を射し貫いた。闇に馴れた目には強過ぎる光だった。

暫くして光に馴れてくると、赤い光の中にふわふわと浮いている羽毛や綿毛の影が見えてきた。左右に目を動かすと、機織途中の四機の機械が長い影を落としているのが見える。

人影は、無い。

少女は扉を大きく開き、部屋の内に踏み入った。少女の挙動につられて、羽毛や綿毛がくるくると舞う。

埃と糸屑を踏み締めて反対側の扉に辿り着くと、今度もまた先の如く、扉の向こうの様子を窺った。左右に延びた暗い廊下には、やはり人影は無かつ

た。

しかし、いずれも予想通りのことである。祭りならば、皆広間に集まっているに違いないのだ。

漂ってくる香ばしい匂いを^{たど}辿るようにして、少女は音も無く広間に向かい、その扉に耳を押しつけた。

ぱちり

と、薪が爆^はぜるような音がした。

途端、少女の胸は^と飛び^は跳ね、体は扉から^と跳^のび退いていた。

少女はけたたましい己の胸の鼓動を聞きながら、扉をじっと見つめた。いや、驚きのあまり足が動かず、そうしているより外無かったのである。我ながら小心だと思う。

扉が開かれる様子は無かった。ほっとして、再び扉に耳を押しつけた。先程と同じく、ぱちぱちと薪が爆ぜるような音がする。しかし、それ以外の音は聞こえない。

わずかに扉を開いて、^{なか}内を^{のぞ}覗き見る。

人影は……在った。

広間は、窓から射し込む光と暖炉の火に赤く照らし出されていた。

暖炉の前には香ばしい匂いの^{おおもと}大元と思しき青銅の巨大な鍋があり、十四人掛けの卓上には饗宴の名残りがあった。

十三人の男女が、ある者は卓上に突っ伏し、ある者は椅子に^{もた}凭れ、またある者は^{わら}藁敷きの石畳に転がっていた。

皆、眠っているようだった。

しかし、どこか異様な眠りだった。

^{いびき}鼾をかく者も居なければ、^{みじろ}身動きをする者も居なかった。かといって息がないわけではなかった。十三人の静かな静かな寝息が溶け合い混じり合い、あたかもこの場に初めから存在していた空気であるかの如く広間に満ちていた。

少女はどこか別の世界に足を踏み入れているような気がしてきた。

しかし、^{アクション}太陽神の車はいまだ天を駆けている。^{ちみ}魑^{もうりょう}魅魍魎が目覚めるにはまだ早い。

とはいえ今この時、昼と夜——二つの世界が交差しようとしていることは確かだった。

どくん

と、少女の胸が高鳴った。

物音を立てぬようにしながら扉の前から離れた。

——今なら、外に出られるかも知れない。

考えた途端、肌が粟立^{あわ}つような興奮を覚えた。

強烈な衝動が体を走り抜け、それに引き摺^ずられるようにして少女は走り出した。

突然に突きつけられた、大きな誘惑だった。

今なら、外に出られるかも知れない。

普段ならばそんなことは考えもしないだろう。いや、そもそもそれは考えてはいけないことなのだ。

望むまい、考えるまい、そう自らに言い聞かせ、心の底に封じ込めてきた望みだった。

外に出たいという想い——ただそれだけのものに、物心ついてから後^{のち}、少女は蓋^{ふた}をしてきた。

嚴重に鍵をかけ、そして、ただ、神に祈り続けた。

毎日。毎日。毎日——。

しかし、神の答えは常に沈黙^{もっ}を以て為されるだけだった。

今もまた、神は何も語ってはくれはしなかったが、そんなことはもう、少女の頭をかすめもしない。

少女は駆けた。

高らかに足音を響かせて、暗い廊下を駆けた。

その先に在るのが、この世なのか、あの世なのか、そんなことはどうでもよかった。

言い知れぬ何かに衝き動かされるままに、駆けていた。

そして扉を開けば、血の如く赤い光と青黒い闇が、溶け合い纏れ合い、あるいは鬩ぎ合いながら、氷雪細工の世界を蹂躪していた。

美しいような恐ろしいような光景だった。

少女はその中に身も心も呑み込まれ、息をすることも忘れて魅入っていた。

そして、赤と黒の間に不思議な燦めきを見つけた。

東の空には星々が瞬き始めている。そのいずれかが粉々に碎け散ったのであろうか。星の破片と思しきものが、粉雪の如く舞い降りている。

じっと見つめていると、燦めきに合わせて歌が聞こえてきた。

踊れ、踊れ、踊れや、踊れ

きらりん、ひらりん、舞い踊れ

凍れ、凍れ、世界よ、凍れ

凍れる世界の美しさ

白く、白く、世界を、白く

真白き世界の美しさ

踊れ、踊れ、踊れや、踊れ

きらりん、ひらりん、舞い踊れ

「あれは『^{きせき}輝跡』ですよ」

氷雪の精霊たちが^{こぼ}溢す足跡なんです——と、幼い頃、今は亡き老神官に教えてもらったことがある。なんとなしに思い出した。

少女は^{せつなためら}刹那躊躇い、しかし意を決して、氷雪に^{おお}被われた大地に一步踏み出した。

さしたる感触も無く^{すね}脛の中程までが雪に埋まり、凍れる針を無数に含んだ空気が全身を包んだ。剥き出しになっている肌がぴりぴりする。

しかし、そんなことはまったく気にならなかった。氷雪の精霊たちの歌がこの身を護ってくれる——そんな気がしていた。

少女は歩き始めた。

歌に合わせて。

踊るように。

^ま真^{さら}っ新な大地に、小さな足跡をつけていく。

外に出るのは何年ぶりだろう。

少女は記憶の糸を^{たぐ}手繰り寄せた。

サイス、ルキティア、ガイアス、オクタリウス、イーダ、ヘルディス、ラグオン、ユニ、フィルネー、ドルコス、ダヌオーン……

様々な顔が浮かんでは消えていく。

入れ替わり立ち替わりここにやってくる人々——それが、少女にとっての「時の流れ」であった。

半分ほど手繰り寄せたところで少女は苦笑し、手繰り寄せた糸をぐちゃぐちゃに丸めて^{ほう}抛り投げた。

——馬鹿馬鹿しい。

こんなことをして何の意味があるというのだろう。

最後に外に出た日は、遥か昔であったかも知れぬし、つい昨日であったかも知れぬ。

その日以来、少女は外に出ることをやめた。諦めた。

誰かに抱き上げられて外に出ることが苦痛だった。堪^たえられなくなった。

少女を抱き上げている腕から体温と共に伝わってくるあの恐怖。

少女はそれを忘れることができない。

抱き上げられることなく外に出る方法がないわけではないが、そういう問題ではなかった。諦めたのだ。

しかし、今再び、少女は外に出た。

予感があった。

今日ならば、今ならば、ここではないどこかへ行けそうな気がしていた。

少女は次第に歩を速め、^{つい}遂には駆けた。

木々の^{こくえい}黒影とその狭間の^{しゃっこう}赤光が、互い違いに競い合うように少女を染め上げる。

^{きせき}輝跡はすぐそこに在った。

——届く！

と手を伸ばした瞬間、何かに^{つまず}蹙いた。息を呑んだ時には、^ま真^{さら}っ新な雪の大地が目前にあった。ふわふわの雪だから、それほど痛くないかも——と^{のんき}暢気に思いつつ、^{ゆきしぶき}雪飛沫を上げながら顔面から突っ込んだ。受け身をとるなどという考えも身体能力もなかった。全身を強打していた。

駆けたことによる激しい動悸と、痛みと痺れが^な絢い交ぜになった奇妙な感覚を押さえながら、少女は^ま漸漸首だけを動かした。すると、視界の片隅、隅の隅に、^{きら}燦めきを捕らえることができた。

少女は手を伸ばそうとした。脱力しているような、^{こわば}硬張っているような体を、なんとか動かそうとした。しかし、少女の意に反して体は動かず、燦めきは^{とおざか}遠離っていく。そして、触れることも叶わぬまま、跡形も無く消え去った。

後には、雪に埋まった少女だけが残された。

^{しばら}暫くして少女の激しい^{どうき}動悸が収まると、辺りは耳が痛くなるほどの静寂に包まれた。

風の音も木々の^{ざわ}騒めきもなければ、今日に限っ

て、イゴールの^{おたけ}雄叫びすら聞こえてこない。

そして、氷雪の精霊たちの歌も。

——寒い。

外はこんなに寒かったのか……と、少女は今更の如く思った。

転倒による痛みと痺れが去ると共に、それに取って代わるが如く、^{かんき}寒気がじわじわと少女の心と体を侵蝕していた。少女はされるがままに、ただ身を任せていた。抵抗しなかった。それだけの力が無かった。^{きら}燦めきが消えると同時に、少女を動かしていた何かも消えていた。

睡魔が少女の^{まぶた}瞼に優しく手を触れる。

——このまま目を閉じたら……

夢を見られるだろうか。

涯しない草原の夢を。

目覚めることもなく、ずっと。

そんなはずはないことは百も承知である。

このまま目を閉じたら、死の御使いオルディヌスがやってきて、少女の魂を^{ユノー}冥界へと連れ去るだろう。あるいは、悪霊に捕らえられ、^{ヌーガ}地獄界へと連れ去られるやも知れぬ。オルディヌスが連れ去るのは善なる魂だけだ。

しかし、そうと解ってはいても、夢想せずにはいられなかった。

少女は睡魔の手を払い退^のげ、寒さで感覚の無くなりつつある体を大儀^{たいぎ}そうに起こし、雪上に^{しる}印された己の足跡を目で辿^{たど}った。

行き着いた先は巨大な城門塔である。

かつて、それは城塞の一部を為していたものであったが、今や、城塞そのものは見る影も無く、またその用も為していなかった。五角形を形作っていた五点、その内の三点の塔はほぼ全壊、五点を繋いでいた分厚い胸壁もほぼ全壊、そして、その内に^{まも}衛るべき建物もほぼ全壊していた。

巨人の手により破壊されたが如き城塞であったが、城門塔を含む二つの塔のみがその難を逃れたわけではなかった。ほとんど建て直すようにして修復されたのである。しかし、それはあまりにも^{ずさん}杜撰な修復であったと一見にして判る、粗末なものであった。暖炉の煙が立ち上っていないければ、こんなところに人が住んでいるとは誰も思うまい。

そういった有様でありながらも、城塞たる面目をどうにか保とうとしているのか、城門塔の巨大な門扉だけはやけに立派であった。開けっ放しであろうと大して変わりもなかりょうに、几帳面にも固く閉ざされている。

城門塔の右手からは、一階分の高さしかない胸壁兼渡り廊下が延び、四階建ての細長い塔に続いている。その最上階が少女の部屋であった。

少女は己の部屋を見上げた。暖炉の煙が細く立ち上っているのが見える。

途端に、冷え込みがさらにきつくなったような気がした。

外はあまりにも寒かった。

寒いだけだった。

萌える草花も、小鳥の囀りさえずも、ここにはない。生きとし生けるものが、あるいは眠り、あるいは死んでいる。目覚めているのは、ただひとり、少女だけである。

少女はかじかんだ素手で雪を握り締めた。拳こぶしの内
で、冷たいような熱いような塊が徐々に小さくなり、それと共に指の間から水滴が漏れ出ていく。暫くして手を開くと、握り締めていたはずのものは無くなっていた。

少女は濡れた掌てのひらを見つめ、力無く声も無く晒わらった。

——こんな偽りの「大地」でしか駆けることができない。

触れただけで消えてしまう、こんな「大地」でしか。

大地母神メーサが目覚めたら消えてしまう、こんな「大地」でしか。

しかし、そんなことは解り切ったことだった。今更、何を期待したのだろうか。所詮は、夢を見ることしか許されぬ身だというのに。

ならば、やはり、己の居場所はあの部屋しかないのだろうか。

少なくともあの部屋は、ここよりは暖かかった。
微睡まどろむことができた。涯しない草原を駆ける夢を見る
ことができた。

少女は白い溜息をひとつこぼ溢した。

——戻ろう。

夢を見るために。

少女は立ち上がり、体に附いた雪を払い落としながら、やってきた道に戻り始めた。

が、一歩踏み出したところで、その足が止まった。

何かが雪の中から出ている。

途端に、思い当たった。きっと、あれつまずに蹠いて転んだのだ。

いったいなんに蹠いたのかと近寄ってみると……

手だった。

革手袋をした左手である。

——行き倒れ……？

珍しい……というか、なんとも理解しがたいことである。このような時期に、このような^{へんぴ}辺鄙なところへ、訪れる者がいようとは。

とはいえ、少女はこの行き倒れに、怖いもの見たさともいべきものを感じていた。

^{かが}屈み込んで、雪の中から突き出ている手を観察する。大きい。己の手よりも遥かに大きい。恐らく、男の手である。

少女は恐る恐るその親指を摘まみ、幾度か軽く引っ張ってみた。重い感触がある。手首から雪に埋れた先には、まだ続きがあるらしい。手だけが落ちているわけではないようである。

少し力を入れて引っ張り上げてみると、ずるりと、^{いもづる}芋蔓の如く、衣服に包まれた腕が出てきた。芋を掘ったことなどないが、塔の上から農作業の様子を見ている限りでは、こんな感じだったと思う。

しかし、芋ではなく人間であるらしいから、何やら墓を^{あば}暴いてでもいるような気がしてきた。

……いや、「ような」ではなく、まったくその通りなのではないか？ 少なくとも、死者の眠りを妨げようとしているのは確かであった。

そう思い至ると、羞恥と畏怖が一度に噴き上がった。

なんと不謹慎なことをしているのだろう！

「神よ、お赦^{ゆる}しを！」

すぐさま雪の中に埋め戻して、鎮魂の祈りを奉^{ささ}げなければ！

と、慌てて腕を埋め直そうとしたその時――

腕が、動いた。

少女は息を止めた。

気の所^{せい}為^いではないかと腕をじっと見つめる。何の反応も無い。しかし、その沈黙と静止に相反して、少女の胸の鼓動は徐々に高く速くなっていく。

まさか、生きているわけがない。

今さっき行き倒れたのならまだしも、これはどう見てもそうではないだろう。周囲にあるべき足跡はすでに雪に埋もれているようだし、手が出ていなければ間違いなく見過ごしていたであろうほどに、本体は雪の大地にすっかり溶け込んでいる。これほどの雪が積もる間、これほどの酷寒に放置されていて、生きているとは思えない。

これで生きているのなら……

――人間ではないのかも知れない。

少女は唾を呑み込もうとした。しかし、口の中は

からからに乾いていた。

このような時、どうすればよいか？

神話や伝承は教えている。

即刻立ち去るべきである、と。

この世に在らざるものには、安易に近寄るべきではないのだ。神異・怪異に惑わされ、引き寄せられて、何処^{いずこ}とも知れぬ世界に連れ去られてしまった人間の話は、よくあるものだった。

しかしそれは、少女にとって望むところであった。まさしく、それを求めて外に出たのではなかったか？ 外の寒さを思い知るために出たわけではないはずだった。

ともかく確認してみよう。

気の所為であるかも知れぬし、そうでないかも知れぬ。

どちらであろうと畏れ多いことではあったが、今更何を畏れるというのだろう。

神から見放された、この身であるというのに。

少女は腕の位置から押し量り、頭があると思しき辺りの雪を掘り始めた。ふんわりと積もった雪を掘るのは容易^{たやす}かった。すぐさま指先が明らかに雪とは違うモノに触れ、顔が現れた。

どきりとした。

ぎょろりと大きく見開かれた両目、だらりと頤^{あご}ま

で伸びた黒い舌、驚いているような呆とぼけているような、どこか滑稽さのある男の顔がこちらを見ていた。

人間ではなかった。

そのような顔が刻まれた石碑である。

見覚えのある絵柄だった。なんだったろう？ とても古いもののような気がした。

ともかく、掘るところを間違えたことは確かなようである。

少女は目星を付け直し、再び雪を掘り始めた。今度は誤あやまたず、生身の人間の顔が現れた。

勇いさましく頑かたく々な顔付きの男が、眠っている。悪夢に魘うなされながら。——そんな風に見えた。

存外に整った顔であった。すぐ横にある石碑の如き異相でもなければ、神こうごう神まがまがしさや禍まがまが禍まがまがしさを放っているわけでもない。しかし、人の上に立つ者の高貴さと力強さを備えている。

赤い陽の光の所為か、あたかも生きているかの如く血色がよく、凍りついた髪は明あかがねるい銅色に見えた。本来は、金髪か銀髪かの、どちらかであろう。

男の顔には、この近辺の人間であるらしい特徴があった。しかし、少女が見知っているそれとは——いや、「男」とは、少し違っていた。

この男からは、瑞みずみず瑞みずみずしさと危あやうさを感じる。

つまりは、「若い」のだ。

少女は「若い男」というものを見たことがなかった。ここには、若い男はいないし、やってきたこともない。ここに来る前には見たことがあったかも知れぬが、物心つく前のことで憶えていない。どのみち、これからも見ることはないのだろうと思っていた。

しかし、そのようなことによる感慨を持つ間はなかった。男の罅^{ひび}割れた唇から、うっすらと白い息が漏れたのである。気の所為などではなかった。目を凝らさねば判らぬほど弱弱しくはあったが、白い息は断続的に漏れ続けている。

「……も、もし？」

恐る恐る話しかけ、恐る恐る頬^{はた}を叩いてみた。しかし、何の反応も無い。

考えるよりも先に、少女は男の全身を掘り出しにかかっていた。雪の下から露わになっていくのは、武装した戦士の肉体であった。それが少女に閃^{ひらめ}きを与えた。

「イスターリス！」

戦士の加護神といえば、戦神イスターリスである。

思い出した。男の横にある石碑に刻まれているのは、イスターリスだった。今となってはほとんど見

られなくなった絵柄だが、イスターリスを崇拝する古い儀礼の中では、このような絵柄が用いられることがあったという。

——この男^{ひと}には、イスターリスの加護がある。

そうに違いない。それで納得がいく。

この男はイスターリスの加護を受けている人間なのだ。

第三章 かいこう 邂逅

いったい、どれほど駆けたのか。

かたき 仇のイゴールをただひたすら追い駆けた。

ふくしゅう 復讐と悔恨に埋め尽くされた心には、馬に対する気遣いも残っておらず、馬が泡を吹いて倒れるまで、拍車を掛け、鞭を揮い、そして馬が潰れたことすら気づかずに、自らの足で駆け続けた。

急がねばならなかった。ちらほらと浮遊ふゆうしていた雪は、いつの間にか猛吹雪に変わり、視界を白く閉ざしていた。このままでは仇の足跡すら見失ってしまう。

どこをどう走っているかなど、まったく判らなかった。ただひたすら駆け続けた。

そして気がつけば、闇の底へと落ちていく己が在った。いや、そんな感じがするだけで、実際には落ちているわけではないのかも知れぬ。

とにかく、身体が重かった。動かなかった。もどかしかった。仇を追わねばならぬというのに。

この状況に対する答えとして、いやおう 否応もなく頭に浮かんでくるものがあった。しかし、そんなものはあり得ぬことだった。祖父の仇を討たぬまま死んでしまうなど、そんなことはあってはならぬ。

全身に渾身の力を籠めようとした。しかし、力は

止め処なく流れ落ちていくばかりで、押し止めることも掬い上げることもできぬ。それどころか、遂には意識までもが流れ落ち始め、復讐も悔恨も「死」という言葉すらも闇へと落ちていった……

……闇の懐で、どれほど揺蕩っていたのか。不意に、花のような甘い香りが鼻を突き、意識が呼び覚まされた。

——ニゼリカ？

冥界に咲き誇るという花の名が、ふっと頭に浮かんだ。

その意味を深く考える前に、何かが体に絡みついていることに気づいた。何だろう？ あたたかくて、やわらかくて、なめらかで……と、考えていくうちに、目を閉じているから暗いのだと気づいた。

目を開いた瞬間、跳び上がりそうになった。息が掛かりそうなほどの眼前に、眠れる乙女の顔があったのである。

ほのかに光を放つ白い肌と金の髪が、薄闇の中にその美しい顔を浮かび上がらせていた。

ここが冥界ならば、この少女は死の乙女に違いない。しかし、なぜかそんな気がしなかった。

この少女からは春の匂いがする。ニゼリカかと思っていた香りは、彼女から発せられているものら

しい。

——^{ひと}人間に非ざる者やも知れぬ。

ふとそんな考えが頭を^よ過ぎったが、それにしては眼前の相手はあまりにも無防備に過ぎた。疲れ果てて眠る子供の如き顔を見せているのである。

しかし、取り敢えずの問題は、彼女の正体よりもこの状況の方であるやも知れぬ。その少女が、見ず知らずの男であるはずの己に抱きついていて、共にひとつの毛布に^{くる}包まって横になっているようなのである。

「……」

頭の中は真っ白だった。

何がどうしてこうなっているのか、どこに何が触れているのかなど、考えられないし、考えたくもなかった。

少女から逃れようにも、少女に触れるのも話し掛けるのも^{ためら}躊躇われ、それどころか、眼前にあるこの美しい顔に息を吹き掛けるのもまずい気がして、ただひたすら息を止めて硬直しているより外無かった。

そうして息を止めているのも^{つら}辛くなってきたその時、少女の^{まぶた}瞼がわずかに^{けいれん}痙攣した。

どきりとした。

この目が開いたら、いったいどうなるのか？ 不

安と期待が^{せめ}鬩ぎ合いを始めた。

しかし、そんなものなどお構いなしに、少女の目は花の^{つぼみ}蕾が開くように開いていった。

そこに在ったのは、朝露を^{たた}湛えた新緑の如き緑の瞳であった。

アルカイオスは大きく目を見開いて、その瞳を見つめていた。いや、すっかり吞まれて金縛りになっていたというのが正しいのかも知れぬ。

そうして見つめ合っていると、不意に少女が、

「気がつかれたのですね」

という、^{すがすが}清^{りん}しい空気に凜と響き渡る鈴の音の如き声を出して、にこりと笑った。春の柔らかな陽光を想わせる、満面の笑みであった。

「……っ！」

アルカイオスは遂に^{こら}堪えきれなくなった。

寝起きとは思えぬ素速さで、絡みつく手足と毛布を引き^{ちぎ}千切るようにして地面を転がった。勢い余った体が何かにぶつかって止まった時、体は^{ちょうど}丁度一回転したところであつたらしく、距離を置いて再び少女と顔を合わせる事になった。

今まで少女によって温められていた体が寒気に^{さら}曝され、アルカイオスはそのあまりの寒さに驚き凍えた。その一方で、激しい後悔と罪悪感に^{さいな}苛まれた。少女の顔からあの光が完全に失せ、^{ぼうばく}茫漠たる絶望の

ようなものがそれにとって替わっていたのである。
反射的な行動であったとはいえ、なぜ少女の手から
逃れるようなことをしたのか、己でも訳が判らな
かった。

しかし、そのことを考える間も、少女に^{べんかい}辯解する
なり謝罪するなりする間もなかった。頭上から何か
が落ちてきそうな気配を感じたのである。

アルカイオスは反射的に跳び起き、少女の上に^{おお}覆
い^{かぶ}被さった。直後、乾いた木材がぶつかり合う響き
と共に、頭に背中に鈍い衝撃が幾つも走った。

埃と共に目の前に転がってきたそれを見ると、薪
である。どうやら、薪を積んだ山にぶつかり、山を
崩してしまったということらしい。

アルカイオスは下になっている少女に目を向け、
口を開いたが、
「だ……」

いじょうぶですか？ ——と続くはずの言葉は、
のど^{のど}の奥で消えた。

少女がこちらを見ていたのである。^{つぶ}円らな目をわ
ずかに見開き、透明感のある白い肌をほんのりと朱
に染めて。

——^{かんべん}勘辨して欲しい。

と思った。

そんな顔をされたら、こちらまで恥ずかしくなっ

てしまうではないか。

しかもこの体勢……その上、なぜか己は腰巻ひとつの素裸で……

——いや、いかん！

それ以上考えるのは、まずい、やばい。何も考えるな。まずは心を落ち着ける。

とはいえ、この美しい少女を目の前にして落ち着くのは至難であった。迂闊にも目を合わせてしまい、目を逸らすこともできぬとあってはもうどうにもならぬ。

そんなアルカイオスの心など知らぬげに、少女は口を開いた。

「ありがとうございます」

それが、落ちてきた薪から庇ったことに対する礼であると呑み込むのに、暫しの間を要した。

「は、あ、いえ……私が原因でのことですし」

我ながら、なんて声を出しているのだろうと思った。上擦っているではないか。

「あの……お願いがあるのですが……」

少女は依然として顔を赧めつつも、どこか不安そうに言った。

——お願い？

アルカイオスは、少女に気づかれぬよう、秘かに唾を呑み込んだ。

神話や伝承を思い起こしてみれば、人間に非ざる者の「お願い」などというものは、碌ろくでもないものばかりであった気がする。

だが、取り敢えずは、その内容を聴くだけでも聴く必要はあるようだった。少女が懇願するようにこちらを見ている。

「……なんでしょう？」

「失礼ですが……わたくしを運んでいただけませんか？」

「は？」

「体が、動かないのです」

「それは……」

「いえ、今ではありません」

少女はアルカイオスの言わんとするところをすぐさま察して、落ちてきた薪で怪我をしたわけではないのだと示した。

「申し訳ございませんが、今その理由を話している暇はありません。そろそろ人が来る時間なのです。とにかく、わたくしの言う通りにしていただけませんか？」

何やら緊急を要するらしい。ここは従った方がよいのかも知れぬ。

「御意。――ですが、その前に……」

と、アルカイオスは少女から離れ、散らばってい

る薪を脇に退けながら、己が撒き散らした毛布を掻き集めた。どれもこれも、擦り切れ薄汚れた^{ぼろ}襦袢である。少女の美しさに目を奪われていて気づかなかったが、少女の衣服も似たようなものであった。

「これをお貸し願えませんか？ 軟弱なこととゆえ恥ずかしながら、裸で居るには^{いささ}些か寒さが厳し過ぎるようです」

少女は羞恥と申し訳なさが入り混じったような顔をした。

「……申し訳ありません。ここにはそのような粗末なものしかないのです。それでよろしければ、お使い下さい」

「あ、いえ……お気になさらないで下さい。有り難く使わせていただきます」

掻き集めた毛布を腰に巻きつけ、肩に羽織り終わると、アルカイオスは少女の指示を仰いだ。

少女はわずかに目を伏せて、^{ためら}躊躇いがちに口を開いた。

「あの……わたくしを、抱き上げて下さい」

……だから、そういうことは顔を^{あから}赧めながら云わないで欲しい——と、アルカイオスは切実に思った。^{ざわ}騒めき乱れる心が^{いまいま}忌々しい。

「……では、失礼」

少女の顔を極力見ないようにしながら、少女の背

中と膝裏の辺りに手を差し入れ、そのまま抱き上げた。

途端、

「あっ……ん……」

少女から甘く悩ましげな声が漏れた。

アルカイオスは危うく少女を落としそうになった。

「も、申し訳ありません！ ……少し動くだけでも体が痛むのです」

少女自身も妙な声を出してしまったと思ったのか、緑の瞳を潤ませ、朱の染料樽に顔を突っ込んだが如く赤面して、慌てて^{べんかい}辯解した。

「……」

——拷問だ。

と、アルカイオスは思った。

ともすれば互いの白い息が混じり合う至近距離で、悩ましい声を聞かされ、可愛らしい赤面を見せられ、意識が^{とおの}遠退くような甘い匂いを^か嗅がされるのは……

——これは、試練なんだろうか？

武骨一辺倒で生きてきたアルカイオスの手には余り過ぎるものだった。イゴールと一対一で戦う方がまだましである。

ともかく心中の動揺を必死に抑え込んで、そんな

妙な声など聞いていない、気にしていないといった風を装いながら、

「それで、どちらへ参ればよろしいのでしょうか？」

「あちらへ」

と、少女が目で示す方へ進んだ。

少女とアルカイオスが横になっていたのは、天井高くまで山と積んだ薪の陰であった。そこから抜け出ると、その場所が石造りの小さな円形部屋であると判る。そこにはふたつの扉と上へ続く螺旋階段があったが、少女が示す通りに、アルカイオスは螺旋階段へ向かった。

「足元に気をつけて下さい。暗いですし、滑りますし、崩れているところもありますので」

「はい」

淀みのある暗さに満ちた螺旋階段には、凍てついた風が流れていた。毛布を纏^{まと}っただけのアルカイオスには、あまりにも苛酷^{かこく}な風である。がたがたと全身が顫^{ふる}えた。しかし、今はそれが有り難い。少女から気を逸^そらせる。

辿り着いたのは四階、そこに在ったのは、黴^{かび}と埃^{ほこり}の臭いのする奇妙な部屋であった。

天井には蜘蛛の糸が張り巡らされ、壁には湿気が滂沱^{ぼうた}の跡の如く黒黒と染み込み、床には取り替え時

をとくに過ぎた藁^{わら}が敷かれている。しかし、採光窓からの微弱な光に浮かび上がるそれらは、何故か不潔な印象を与えなかった。むしろ、そのように在るのが自然なように思えた。

そういった統一のとれた雑然ともいうべきものの内に、必要最低限の生活必需品と書物が整然と並ぶ殺風景な部屋ではあったが、不思議と生活感があった。それはあたかも、人知れぬ森の奥深く、打ち捨てられ忘れ去られた小屋に、何かが棲^すみついている、といったようなものであった。

火が消えかけている暖炉の前には、机の上に拵^{しら}られ、椅子の背に掛けられた、鎖帷子^{リオブ}や衣服があった。一目見て、己のものであるとアルカイオスには判った。雪に濡れたそれらを干してくれているのだろう。己が裸になっているのも納得がいった。

アルカイオスは、凍りついた藁を踏みしだいて寝台に行き、少女をそっと降ろした。それでも痛みが走ったのか、一瞬、少女の柳眉がわずかに顰^{ひそ}められた。しかし、すぐさま含羞^{はにか}みに取って替わった。

「ありがとうございます。大変でしたでしょうか？」

「いえ、そのようなことはありません」

少女は軽かった。己が見知っている女性たちと比べて、やや小柄で痩^やせ過ぎているようではあったが、女性というものはこんなにも軽いものなのかと

思った。かといって、羽根の如くふわふわしているわけではなく、しっかりとした重みがあり、柔らかく、温かいのである。

「火を熾おこしましょう」

少女の感触を思い出してしまい、照れ隠しを兼ねて暖炉へ向かった。

火を熾し終え、干されている己の衣服に手を触れてみると、まだ湿っていた。このまま着込んだら、風邪を引くに違いない。今暫し毛布を被っているより外ないようであった。

となれば、後は少女から話を聴くばかりである。

アルカイオスは少女に向き直り、威儀を正して跪ひざまづいた。

「申し遅れましたが、私は……」

「待って！」

少女の鋭い声に、アルカイオスは驚いて口を閉ざした。

少女ははっとして、思わず出てしまった声を恥じるように、気不味きまづい表情かおを浮かべて、しどろもどろに言葉を紡いだ。

「……あ、あの……申し訳ありません。……わたくし、名告なのることのできぬ身なのです。ですから、どうか、お名告りにならないで下さい」

それがあまりにも切実に見えたので、アルカイオ

スは少少困惑したが、人間の世とは異なる法があるのやも知れぬと思い直した。

「御意。――では、妖精の御方……いえ、ひよっとすると女神であられるのか」

少女の目がわずかに見開かれた。

「女神？」

「恥ずかしながら定命の身たる私には、貴女様がいずれの理に身を置く御方であるのか、見定めることができませぬ。我が不明は元よりとして、非礼を重ねるのは甚だ申し訳なきことと存じまするが、どうか我が身をお連れになったこの地の名をお教え下さりませ。ここは何処でございましょう？」

「……」

少女は幾度か目を瞬かせた後、漸くアルカイオスの言を理解したように戸惑い顔になった。

「そのようなことはおっしゃらないで下さい。仮令世辞であっても、あまりにも畏れ多い言葉です。わたくしは不死なる女神ではありませんし、ここは冥界でも巨人界でも地獄界でもありません。わたくしは死すべき人間の身で、ここは人間界なのです」

おそらくは――と、少女は最後に付け加えた。

「それでは……」

アルカイオスはごくりと唾を呑み込んだ。

「私はまだ、生きていますのでしょうか？」

「はい。——わたくしが生きているのならば」

アルカイオスは啞然とした。

——私が、生きている……？

信じ難いことであった。あり得ぬことであった。

「あなたはここを、^{ユノー}冥界だと思われたのでしょうか？ それとも^{ヌーガ}地獄界だと思われたのでしょうか？ いずれにしろ、そう思われるのも無理からぬことです。あなたは雪の中に埋まっていたのです。わたくしがあなたを発見した時、失礼ながら、魂はすでに死の御使いに連れ去られた後なのだろうと思っておりました。しかし、あなたは生きていらした。恐らくは、^{イスターリス}戦神の御加護がおありになったのでしょうか」

「イスターリスが……？」

「あなたが倒れていらしたところに、^{いにしえ}往古のイスターリスの石碑がありました」

「……」

少女の言葉が滴となってアルカイオスの胸に落ち、^{ちょうめい}澄明さと痺れを含んだ波紋を全身に拡げた。

戦神イスターリスの加護が己にあった。

それはなんの不思議もないことであった。アルカイオスは、イスターリスを遠祖とするセウエルス氏

族の継嗣、イスターリスの末裔なのだから。

しかし、この身を循る血がイスターリスから連綿と続く流れの中にあり、まさしくその恩恵を受けているという事実を目の当たりにしたら、畏敬に打ちふる顫えずにはいられなかった。

アルカイオスは頭を垂れ、イスターリスへ感謝の祝辞を奉げた。

それから、思い出したように少女を見上げた。

「……では、倒れていた私をここまで運んできて下さったのは……貴女、なのですか？」

少女はアルカイオスの真っ直ぐな眼差しから目を外らすようにわずかに目を伏せ、ほんのりと頬を染めてこくりと頷いた。

途端、

「……っ！」

少女の美しい顔が苦痛に歪んだ。

「失礼！」

アルカイオスは、はっとして少女の手を離した。感動のあまり、思わず手を取り、握り締めていたのである。

しかし、何かしらの違和感を感じて、再び少女の手にそっと触れようとした。

少女はそれに気づいて、己の手を隠そうとしたが、痛みで儘ならぬらしく、

「触らないで！」

と、鋭い声で制そうとした。

アルカイオスはそれを無視して、少女の手を取った。

少女の手は、見るも無惨な有様であった。

薄く滑らかな皮膚は見る影もなく破れ裂け、その下にある赤い肉を見せていた。ゼレーア海で獲れる小さな貝殻の如き爪は、あるいは割れ、あるいは剥がれている。消毒するくらいの応急処置はしたのか、一度は汚れを落とした跡が見えるが、腫れ上がった赤い肉からは、新たに血と膿^{うみ}が滲み出ているようであった。両手とも、である。

「これはいったい……」

と、口走ってから、なんて間抜けな物言いだろうとアルカイオスは自己嫌悪した。

——この手で私を運んだ……？

いや、運んでこのような有様になってしまった、と考えるのが妥当なのかも知れぬ。

考えてみれば……

いかにも非力そうなこの少女が、どうやって己を運んだのか。

という疑問がある。

この、板金の如き筋肉を纏^{まと}った体は、少女の倍——いや、それ以上の重さがあるだろう。その上リオ

プまで着込んでいたのである。

「そろそろ人が来る」と言っていたから、ここには少女以外の人間が他にも居るようではあるが、その人間の手を借りたということは考えにくかった。その人間から逃れるように四階のこの部屋までやってきたのだし、少女のこの怪我を知っていて放置しておくとも思えぬ。

己が倒れていたところからこの建物までは馬で牽ひくとしても、建物の中にまでは馬は入って来れない。あの薪の陰まで、そのか細い身ひとつで、手をぼろぼろにしながら、この体を引き摺ったのだろうか。少女の体が動かないのは、過剰な運動をした後にやってくる、あの筋肉の痛みと怠たるさの所為なのかも知れぬ。

アルカイオスは居たたまれない気持ちになった。

藝術の女神ディオメの手なる、非の打ち所の無い少女の体に瑕きず疵を附けたのは、己なのか……。

「……申し訳ございません。どう詫わびればよいのか……」

「お気になさらないで下さい。わたくしの身よりも、あなたの身の方が大切です」

「そんなことはないでしょう」

さぞ、名のある家の出とお見受け致しますが？
——と、言い掛けて、アルカイオスはやめた。名告

るわけにはゆかぬということだった。

出自はともかく、少女が貴族であることは間違いないだろう。神とも見紛う美しさは、その身を流れる血に、神の血が混じっていることを明らかに示している。

とはいえ、そのような^{とうと}貴い血を持つ者が、^{みすぼ}見窄らしい恰好をしているのは^げ解せぬ。よもや、このような牢獄の如き塔に住んでいるとは思いたくないが、おそらくは住んでいるのだろう。少女はこの部屋にえらく馴染んでいる。

なんとも奇妙ではあったが、名告れぬというのは、そのことと関係しているのかも知れぬ。

「この身はなんの役にも立たぬ身なのです」

少女はぼそりと呟いた。

その目は、アルカイオスを見ているようで見ていない。恐ろしいほどの透徹だけが在った。深緑の森を映す、湖面のような。

——まずい。

と、アルカイオスは思った。

何がまずいのやらよく判らぬが、この目を見続けているのは危険であると、本能が告げている。それなのに目が離せない。ますますもってまずい。

——やはり、^{ひと}人間ではなく……もしや、^{フィリス}死の乙女……？

年若く美しい乙女、フィリスたちは、彼女らの主人にして、冥界^{ユノー}の王たるネストスから、一年にひとり、人間^{ひと}の生命^{いのち}を奪うことを許されている。

彼女らに出逢ったら、必ずしも生命を奪われるわけではないが、若い男は特に注意する必要があるだろう。なんとなれば、フィリスは「乙女」だからである。

もしその年に、不運にも最初の相手としてフィリスに出逢ったならば、確実に魂を奪われると思った方がよい。

ローゼンディアの若者は、
「人気無^{ひとけ}き水^{みな}辺^べには近^{なか}寄^よる勿^なれ」

と教えられる。

フィリスに誘われやすい場所だからである。

とはいえ、わざわざ近^{やから}づく輩^{やから}も居^ゐることは居^ゐる。

ある者は興味本位で、ある者は恋に破れて。中には、フィリスを求めて、この世すべての水^{みづ}辺^べを流^{なが}離^らわんとする男も居るといふ。

まったく以^{もつ}て馬鹿馬鹿しい限りではあるが、アルカイオスは彼らを馬鹿にしようとは思わぬ。その気持ち^{だき}が解^とらぬでもないからである。しかし、唾^つ棄^つすべき行為^{うつつ}であるとは思ふ。この世ならぬものに現^まを抜^ぬかして己^{おの}が使命^{しめい}を放棄^{ほうき}するなど、ヴァリア教の教^{おし}えに背^{そむ}いている。

ともあれ、ここは水辺ではない。ならば、この少女は、死の乙女^{フィリス}ではないはずだ。おそらく。きっと。たぶん。

そのように思い込もうとしていると、

ぽた

どきりとした。

何か冷たいものが頬に当たった。

知らず息を呑みつつ、恐る恐る頬に指を触れ、その指を見て見ると……

水が、附いていた。

「！」

……いや、何を動揺しているのだろう。たまたま落ちてきた、単なる滴だ。たまたま……

ぽた、ぽた、ぽた……

冷たいものが幾つか、頭に顔に^{はじ}爆けた。

真上を仰ぎ見ると、^{きら}燦めく滴が雨の如く降ってくる。

「!!」

アルカイオスは思わず目を^{つぶ}瞑った。

「申し訳ありません」

その言葉と落ちてきた滴の冷たさで、現実を引き戻された——ような気がした。

少女を見ると、先程の如き妖しい様子はない。あの世ではなくこの世をきちんと見ている。

「ここは雨漏りがひどいのです。部屋が暖まると特に……どうされました？」

少女は、呆けた様子のアルカイオスに^{けげん}怪訝な顔をした。

アルカイオスははっとして我に返った。

「あ、いえ……なんでもありません。——と、ともかく、お手をこのままにしておけば、大変なことになりますゆえ、何か薬……」

があれば、このような状態であるわけがない。

アルカイオスは立ち上がり、干している己の衣服を取り寄せて、その中からふたつの革袋を取り出した。

「暫し堪えて下さい」

革袋のひとつに口をつけ、あおると、灼熱の液体が口中に拡がる。それを少女の手に吹きつけた。

「うっ……!!」

少女の顔が歪む。

アルカイオスはもうひとつの革袋から乾燥した薬草を取り出した。それを口に含んでよく噛み、吐き出して、少女の手に塗りつけた。

「医術の心得がおありなのですか？」

少女は痛みを堪えつつ聞いた。

「いえ、そのような上等なものではありません。戦場いくさばに立つ者として、必要に迫られる程度のものです。尤も、治すよりも殺す方が得意ですし多いのですが」

「……」

「失礼。女性に話すようなことではないですね。——ひとまず、これでよいでしょう。このまま動かさないようにして下さい」

と、アルカイオスは治療を終えた。

「ありがとうございます」

少女は微笑んだ。

その微笑みが、アルカイオスには痛い。

あと痕が残るやも知れぬ。

指先が変形するやも知れぬ。

優美な手であったに違いないのに。

アルカイオスは再び威儀を正した。

「改めて御礼申し上げます。私をお救い下され、誠に有り難く存じます。就きましては御礼の御印おしるしに、

はばか ^{なが} 御身のご全快まで、お尽くし致したく存
じます」

「……そのお気持ちだけ、ありがたく頂戴ちょうだい致しま
す」

「いえ、そういうわけには参りませぬ」

「あなたはわたくしの手を治療して下さいました。
それでもう充分です」

「治療というほどの治療ではございませぬ。賜わっ
た御恩に比ぶれば、微微びびたるものでございます」

「その御礼は、イスターリスにこそ奉げられるべき
ものです。わたくしはただ、イスターリスのお導き
に従っただけに過ぎません。……もしかしたら、あ
なたをこうしてお救い申し上げることが、神がわた
くしにお与えになった使命だったのかも知れませ
ね。なんの役にも立たぬこの身は、あなたのためだ
けにこの世に生を享うけたのかも知れませぬ。そう考
えれば、すべてに納得がいく気が致します。あなた
をお救いできてよかった」

と、少女は微笑んだ。

アルカイオスにはそれがひどく哀しく見えた。

——私のためだけに、この美しい少女が生まれて
きた……？

——こんな牢獄のような場所で、ただひたすら私
を待ち続けていた……？

腹の底から沸^{ふつ}沸^{ふつ}と怒りが湧き上がってくるのを、
アルカイオスは感じた。

——そんな馬鹿なことがあってよいものか！

「あなたは重大な使命を背負っていらっしゃるに違いありませんわ。……どうか、わたくしのことはお捨て措き下さい。そうしなければ、善^よからぬ運命があなたに降り掛かるでしょう」

「……」

アルカイオスは、強い意志が籠もった熱い眼差しで少女を見つめた。

「確かに、私には使命があります。しかしだからといって、恩義ある貴女を捨て措いてよい道理はありませんませぬ」

アルカイオスの眼差しがあまりにも強い所為か、少女は怯^{おび}えるような顔をした。しかし、そんな少女にお構いなしに、アルカイオスは少女に迫った。

「貴女をここから連れ去ってでも御恩に報いる」

「わたくしをここから……？」

アルカイオスの言葉に少女は目を見開き、暫し呆然とした。そして崩れるように、泣き笑うが如き表^か情^おとなった。

「わたくしは、ここでしか生きられぬ身なのです」

——ここを、どこだと思いですか？

第四章 帰還

——若の言う通りにするのではなかった。

本来、落ち着いた色合いの灰色の瞳である。そこに今、^{いらだ}苛立ちの^{ほむら}炎が揺れている。それを押し隠すように、キュロスはわずかに目を伏せていた。

上品で端正な顔立ちをした男である。妙齡の女心を^{くすぐ}撥る、油断ならぬ甘さを持っている。くどい甘さではない。漆黒の髪と、綺麗に整えられた^{くちひげ}口髭によって、絶妙に引き締められた甘さである。青年というには分別があり過ぎ、中年というほど脂切ってはいない——そんな年頃の、すらりとした長身の騎士であった。

^{かんきおうせい}悍気旺盛なアルカイオスの手綱たるべく^も守り役を任せられ、アルカイオスの行くところ、陰の如く^{したが}付き随うのが常であったが、この時ばかりは事情が異なっていた。

「父上^{りょうかい}の諒解は得ている。たまには祭りを大いに楽しめ。……そう案ずるな。お祖父様に顔を見せに行くだけだ。縦^よしんば、何かがあったとしても、あのお祖父様がいらっしゃるのだぞ？」

という、守り役に対する^{ねぎら}労いよりも厄介払いできる嬉しさが滲んだアルカイオスの言に、祖父と孫との水入らずを邪魔することもなからうと己に言い聞

かせて従ったわけなのである。

しかし、祭りを楽しむ間もなく、ステファノスの隠居所から領主館に急報が入った。

——大殿、戦死。

その上、若殿——アルカイオスは行方知れずだという。

騒然としつつも、すぐさまキュロスを経長とする捜索隊が生まれ、隠居所へと発した。

それがもう三日前のことである。手掛かりは少なく、捜索は難航していた。

ステファノスに呼ばれた応援隊が到着した時には、すでにすべてが終わっていたという。アルカイオスの行方を知っていたであろう者たちはすでにこの世にはなく、唯一の手掛かりである、併走するが如きイゴールと馬の足跡は、風雪により途中で途絶えていた。おそらく若は、イゴールを追ってゆかれたのだろう——それくらいの推測しかできぬ状態であった。

「隊長、雪が……」

キュロスのすぐ横に居る騎士が言い掛けた。が、殺気が籠もった灰色の瞳で睥^{にら}まれて、口を閉ざした。

雪は激しくなりつつあった。そろそろ引きあげねば、こちらの身も危うくなる。

キュロスは^{しぶしぶ}渋渋口を開きかけた——その時、

「隊長！ 何か来ます！」

降り^{しき}頻る雪で判然としない視界の向こうから、木々を縫って何かが滑るようにやってくる。

——イゴールか？

背筋がぞくりとした。歓喜で。

キュロスは怒りをぶつける場所を求めている。この捜索中、イゴールに遭遇することは一度もなかった。苛立ちは募る一方でしかなかった。

「弓構え！」

昂奮を抑えつつ指揮の手を挙げる。

そして……

「待て！ あれは……」

イゴールなどではない。人間、それも見知った人影である。スキーで滑り降りてくる。

「若——っ!!」

キュロスは馬に鞭を当てた。

アルカイオスは人が居ることにほっとしたのか、力が抜けたように崩れ、雪煙を上げながら転がってきた。キュロスは馬から降り、転がり落ちてくるアルカイオスに飛びついた。

「若！ よくぞご無事で！」

^{ぶしょうひげ}無精鬚の浮いたアルカイオスの顔には、疲労の色が濃かったが、五体満足のようにであった。

「キュ、ロス、か……？」

泳いでいた目の焦点がキュロスに合う。安堵が浮かんでいるその顔に、アルカイオスはにやりと笑いかけた。

「女神に逢ったぞ」

＊

^{げいか}
「猊下、お話がございます」

ローゼンディアの国教であるヴァリア教、その教父たる総大主教ジポイテスは、^{さすが}流石に疲労を禁じ得なかった。

王都ガレノスより、王国最北東に位置するここデルギリアまで、十五日もの間馬車に揺られ、到着早早、その到着を待っていたとばかりに、休む間もなくステファノス・セウエルスの葬儀が始まった。七日に^{わた}互る葬儀は今夜で終わるが、その間、^{かん}客とはいえ、ヴァリア教信徒すべての尊崇を集める総大主教、それ相応の応対というものがあつた。

嫌なことではない。デルギリアの現領主クラティス・セウエルスとは親友で、セウエルス家とは浅からぬ親交があるし、ヴァリア教の教えに則り、皆を正しく導くのは誇りある使命である。とはいえ、^{とし}齡は取りたくないと思う。

今夜の宴席でも、総大主教様の有り難いお話を拝聴したいと、ジポイテスの周囲から人が絶えることは無く、息つく暇もなく話し込んでいた。それが偶^{たま}さか、ふっと途切れたのである。顔には一切出さぬが、心秘かに溜息を吐いた。そこを狙うが如く話し掛けられて、ジポイテスはどきりとした。

「おお、アルカイオス殿か。いかがされた？ そのような暗い顔は葬儀の宴席には似合わぬぞ」

葬儀の宴席はできるだけ明るく盛り上げるのが仕^{しき}来^たりである。その中で、故人の人柄や徳を讃え、大いに飲みかつ食らうのである。

「暁^{アウラネ}の女神が目覚めると共にご出立^{しゅったつ}なさると耳にしました。葬儀の宴席で申し上げることはございませぬが、お叱りは覚悟の上、折り入ってお話がございます」

有無を言わせぬ力を秘めた目が、ジポイテスを射抜くが如く見ていた。不^ぶ躑^{しつけ}ともいえる目である。

——若いな。

内心苦笑した。しかし不快ではない。父親であるクラティスも、若い時分はこんな目をしていた。戦神の血が為すものなのかも知れぬ。なんといっても、セウェルス家はイ^イス^スタ^タリ^リヘ^ヘー^ーレイ^{レイ}の宗家、イスターリスの血が最も濃い。

「廊^{そと}下に出ようか」

^{まろ}円やかな雰囲気を持った男である。総大主教としての威厳が無いというのではない。他者を威圧し、萎縮させるようなものが無いのである。優しく包み込むような大らかさに、ともすれば胸の内をすべて^{さら}曝け出してしまいたくなる。

その雰囲気とは裏腹に、内実、邪悪なところがあるのならば、これほど危険な男も居まい。しかし、総大主教ラザラス・ジポイテスは、その名に恥じめ清廉潔白な人物であった。

ヴァリア教の教えを受ける誰もが、尊敬している。無論、アルカイオスとて例外ではない。それがゆえに、芽生えてしまった疑念はアルカイオスの心^{さいな}を苛んでいた。

「何かね？」

^{さむざむ}寒寒とした廊下の突き当たりである。ジポイテスの重厚な声はよく響いた。

「私は祖父の仇を討たぬまま、恥を^{さら}曝して帰って参りました。しかし、恥を曝したままでは毛頭ありませぬ。仇の姿はよく覚えておりますし、どのあたりに居るかも大まかには存じております」

「ほう？」

「仇は雲居山脈の方へ向かっておりました。そこで私は、雲居山脈の麓^{ふもと}を拠点に、仇の搜索をするつもりでおります。無論、仇を討つまで^{いすわ}居坐る所存」

ジポイテスは感心するように頷いた。

「頼もしくなられたな。ステファノス殿も、後顧の憂い無く、あの世での修行に励まれることであろう。汝に神の御加護なんじがあらんことを。遠くながら、仇討ちの叶わんことを祈っておるぞ」

「猥下自らご祈願いただけるとは、汗顔かんばんの至りにございます」

ジポイテスは破顔はがんした。

「そう堅苦しいことは言わんでよい。――して、話はこれだけではあるまい？」

「はい。実は、仇討ちの拠点にザーレ要塞に置きたいと考えているのです」

広大な海原うなばらを想わせるジポイテスの目が、わずかに細められた。

「ザーレ要塞に？」

「ザーレ要塞は猥下の御管掌ごかんしょうであるとの由よし、御許可を願いたく参じました」

「ザーレ要塞がどういう場所か、解っておるのかね？」

「多少は存じ上げております」

「父君から聞いたか？」

「はい。――しかし、人の齒牆はがきは崩れ易きもの。出所でどころは存じませぬが、噂が流れております」

「どのような噂か？」

「^{いわ}曰く、ザーレ要塞は、五悪神がひとり、狂気と疫病の女神エレに魅入られた、と」

「……^け怪しからんな」

ジポイテスは目を伏せた。いつもながらジポイテスの表情は読み難いが、この動作は溜息の如きものやも知れぬとアルカイオスは思った。

「また、ザーレ要塞が廃棄されたのはそれが理由なのではないか、と」

「ザーレ要塞が廃棄されたのは老朽化が原因と聞き及んでいる。そのことは、汝らデルギリアの子の方がよく知っておろうに」

「ええ。……しかし、遙か昔のことです」

「ふむ。……で、汝は真実を知っておるのだな？」

「はい。何ゆえ怪しからぬ噂を放置しておくのかと父に問い^{ただ}質したところ、その方が都合がよいと申すのです。木は森に隠すのがよい、と」

ジポイテスは含み笑いをした。

「奴らしいな」

「……しかし、解せませぬ。本当に、^あザーレ^そ要塞^こしかなかったのですか？ 忌み子とはいえローゼンディア国王の娘、王国で最も高貴な姫が、^よ選りにも選ってあのザーレ要塞に幽閉されているとは嘆かわしいことです」

ザーレ要塞は、王国内で「ヌーガに最も近き場

所」とも云われている。本来「ヌーガ」とは、悪を為した魂が死後に連れて行かれるあの世——地獄界のことであるが、この世にもヌーガと呼ばれている場所がある。悪の種族が跳梁跋扈^{ちょうりょうぼっこ}するその場所は、雲居山脈の北、フェルシナ内海を越えた北東にあった。

フェルシナ内海は王国の北側に存在する大内海であり、王国東部域は、すっぽりとその内部に収められるほどの面積を有している。

雲居山脈の方は、東方から王国に向かって伸びてきている大山脈である。

丁度^{ちょうど}ヌーガとトゥライ高原とを仕切るような形で、大陸を南西から北東に向かって走っている。

デルギリアから見れば領土の東北部に、ぎりぎりまで到達しているような位置にある。

つまり王国の東端、それも東北部に覆^{かぶ}さるかどうかという程度である。

にもかかわらず、この山脈が問題になるのは、悪の種族どもが内部に張りめぐらした^{ずいどう}隧道を使い、人間の領域に攻めてくるからである。

その雲居山脈を越えてやってくる悪の種族を迎え討つ最前線が、かつてのザーレ要塞であったのである。

そういうわけであるから、ここ数百年、大攻勢こ

そないとはいえ、予断のならぬ場所であった。

「声が大きい」

ジポイテスは目だけを動かして、素速く周囲を見回した。

アルカイオスははっとして口に手を当てた。知らず^{こうふん}昂奮していたらしい。

「……申し訳ございません」

ジポイテスは声を^{ひそ}潜めて話し始めた。

「汝はあれを見ておらぬゆえ、そう思うのも無理も無い。その忌わしさゆえに、王領に置くことはできぬし、どの領主も自領に置くことを拒否したのだ」

アルカイオスは顔を^{しか}顰めた。ジポイテスの云いようでは、まるで物扱いである。

その忌わしさとは具体的にどういったものなのか、アルカイオスは知らぬ。かといって、聞くのも^{ためら}躊躇われるし、ジポイテスが語るとも思えなかった。

「即刻、^{ヌーガ}地獄界へ送り返すべきであるという話も拳がっていた」

「っ!!」

アルカイオスは、ひゅっと音を立てて息を吸い込んだ。

^{ヌーガ}地獄界へ送り返す——つまりは、殺すということである。

あの少女——己の生命の恩人である少女——最後まで名告ってくれはしなかったが、「リュフィーナ」という名を持つであろう少女の顔と声が、ふっと浮かんだ。

——この身はなんの役にも立たぬ身なのです。

その瞳はあまりにも空虚だった。

「しかし、陛下にとっては、今は亡き王妃の忘れ形見。その意見は激怒で却けられたが、居場所がなければそうならざるを得ない状況だった。そこで私の^{つて}伝手を使って、聞こえよく云えば友の^{よし}誼みで、クラティスに折れてもらったのだ」

おそらくは、そこになんらかの取り引きがあったのであろうとアルカイオスは推察する。互いに友である前に、クラティスはデルギリアの民を保護する立場にあるし、ジポイテスは王国の繁栄を願う立場にある。

「……差し出たことを申しました」

「よい。私も姫の境遇には同情を禁じ得ぬ」

「……」

——同情？

アルカイオスは、あの少女の生活の^{ありさま}有様を思い出していた。

ジポイテスは清貧を尊ぶことでも知られている。王女という高貴な身分であれ、豪奢な生活はさせぬ

であろう。現王妃の奢侈しゃしに頭を抱えているという話も聞いている。

しかし、あの少女の生活は「清貧」という言葉で括くくれるようなものではなかった。

「私は姫の周囲に波風を立てたくないのだ。せめて心安らかに暮らしていただきたい」

——解るな？

と暗に示すように、ジポイテスはアルカイオスを見つめた。つまりは、アルカイオスの願いは却下されたわけである。

しかし、ここで退き下がるアルカイオスではない。

「憚はばかり乍ながら、私も猊下と気持ちを同じうしております。それゆえザーレ要塞に拠点を置くのです」

「……解せぬな。そもそもザーレ要塞は廃棄要塞、仇を搜索するほどの人員を置ける場所ではなからう」

ザーレ要塞は、姫の幽閉のため必要最低限の修復はされてはいたが、悪の種族や破落戸ごろつきの巢窟そうくつとなって悪用されぬよう、破壊されている。

「いえ、その人員はヘルマディス要塞に置きます」

ヘルマディス要塞は、ザーレ要塞の廃棄に伴って新築された要塞である。

「ザーレ要塞には、現任と入れ替わって、私と私の

兵が詰めるのです。ザーレ要塞とヘルマデイス要塞は、わずか三メディオオンほどしか離れておりませぬ。それこそ起き抜けの朝駆けにもならぬ距離ゆえ、伝令にさしたる問題はないでしょう」

三メディオオンは、徒歩で半刻、駆け馬で八分の一刻ほどの距離である。

「それにはどういう利点があるのかね？」

「ザーレ要塞危急の際、ヘルマデイス要塞との関係が容易となるでしょう。毎日、実地を兼ねた伝令訓練を致しますゆえ」

「……父君はなんと仰おっしゃっておる？」

「猊下のご許可があればそれでよい、と」

「……」

ジポイテスは何かを考えるようにアルカイオスの顔を見つめ、やにわに口を開いた。

「姫の母君トリュファイナ様は、女神の如くお美しい御方であった」

「……？」

唐突な話題の切り換わりに、アルカイオスは訝いぶかしんだ。

「私は乳呑ちのみ児の姫しか知らぬ。姫がどのようにご成長なさったのか知らぬ。トリュファイナ様に似ているのならば、さぞお美しかろう」

「……」

「今まで、姫にお仕えする者には若い男を選んだことがなかった」

ジポイテスは意味ありげにアルカイオスを見た。アルカイオスはどきりとした。しかし、なぜどきりとせねばならぬのか解らなかった。

「恋愛は素晴らしいものだが、恐ろしいものでもある。愛の女神ペネルピアを見よ。彼女は英雄を殺し、怪物を生み、災厄を為した」

「……」

「私は信じておるぞ、クラティスの子よ」

最後に許可を与えると、ジポイテスは長衣の裾をすそひるがえひるがえ翻して廊下の向こうへと消えた。

第五章 ^{おやこ} 母娘

この日を待ち続けていたのかも知れない。

ある日突然、この身が男神のお目^{おがみ}に留まり、神々の住まいます宇宙山^{ラヌスカロン}へと連れ去られるのではないか——そんなことを夢想するほどもう子供ではなかったが、心の奥底では望んでいたのかも知れない。

長く辛い日々だった。

^{うら}怨み続けた日々でもあった。

「すべてはあの化け物の所為^{せい}なのよ」

それが母の口癖のようなものだった。

今在るカトリナは、その言葉によって作り上げられたと言ってもよいかも知れぬ。

カトリナの母タニアは、リュトア領主レクシスの愛人であった。カトリナを孕^{はら}んで、母娘共共捨^{ははことども}てられた。

ヴァリア教に於^おいて、「愛人」というものはなかなか微妙なものがある。一夫一婦があるべき家族の形であるヴァリア教に於いて、不倫は地獄界行き^{ヌーガ}を免れぬ大罪であったが、複数の恋人と付き合うことは許されていた。しかし、それが子を為す虞^{おそ}れのある深い仲、つまりは「愛人」となると、信仰心が

薄い者と見られる風潮があるのである。

愛人を持つことは、不信心な貴族にはままあることではあった。しかし、名誉を重んじてこそ貴族である。表立ってできることではない。

そこで秘かに愛人と付き合うわけだが、厄介なのは妊娠であった。子が宿るかどうかはすべて神の御^{みこ}心次第で、人間の都合でどうにかなるものではなく、やることをやるからには避けがたい問題とも言えたが、子が産まれれば、いろいろと面倒なことになる。場合によっては、結婚しなければならなくなる。結婚してしまえば、愛人を持つことはできなくなる。大概、愛^{あいよく}慾のために愛人と付き合うのだから、大問題であった。

リュトア領主レクシスも例に漏れず、愛人タニアとその子カトリナの処遇に頭を悩ましていた。養子に出すのが普通であるが、足元を見られぬようなこれといった当てはなく、実子としたら家中に騒乱が生じることは間違いなく、かといって殺して隠滅という危ない橋を渡る勇気は無かった。

故に、呪われた王女に仕える人員の供出を押しつけられた時は、迷惑顔をしながらも千載一遇の好機と腹の内^{ほくそ}で北叟笑んだものだった。母娘共共^{ははことども}、送りつけてやろう。場所も場所であるし、王女の呪いが二人を抹殺してくれるやも知れぬ。

そうと決まれば、もうあの母娘^{おやこ}のことなど頭から消え去り、性懲り^{しょうこ}もなく、替わりの新しい愛人を作ることを考えていた。

また平民がよいかも知れぬ。貴族女よりも面倒がないし、貴族に対する憧れ故か、従順でもある。その身に流れる血がどうあれ、どうせ、やることに変わりはない。若い女、抱き具合のよい女ならばなんでもよい。

子ができても王女のところに送ればよいので懸念は無い。これからは心置きなく愛慾^ふに耽けることができるのだ。

まったく以てよい仕事を授かったものだと、レクシスは神に感謝した。

そうしてタニア・カトリナ母娘^{おやこ}は、ザーレ要塞に送り込まれた。

長い旅路の末に辿り着いたその場所に、タニアは愕然とした。

城の遺跡。

……のように見えた。

木々を遠巻きにして、大小の石塊と莽莽^{ぼうぼう}とした雑草が入り混じる開けた場所に、幼子の積み木の如き、今にも崩れそうな城門塔と細長い塔がひとつずつ、ぽつねんと聳^{そび}えていた。

何なのかはよく分らないが、これがレクシスが

云っていた「別荘」とは到底思えなかった。

何かの手違い？ それとも……

タニアはそれ以上考えまいとした。

「お前の子は実子として迎えたいと思っておる。すでに家人の説得を試みておるのだが……一筋縄では行きそうにもなくてな。別れた妻の子がすでにおるし、その別れた妻が、子を介在していろいろ口出ししてきおってな。これがまた情の強い女で、状況によっては何を仕出^しか^ですやら分らぬ故、ひとまずお前たちを別荘に避難させたいと思っておるのだが……どうだ？ 説得が叶えば、すぐに迎えを使わす。……泣いておるのか？ 可愛い女よな。私とてお前と離れるのは哀しいのだぞ、愛しいタニアよ。早急に説得してみせよう。……何を案じておる？ よもや、私を信じておらぬということはあるまいな、愛しいタニアよ。私を誰だと思っておるのだ？ お前はこの地で最も力ある男の情婦^{おんな}なのだぞ。泰然として待っておれ」

と云って、暫しの別れを惜しむように、いつも以上に熱く激しくこの身を抱いてくれたのだ。あれが嘘であるわけがない。

しかし、実際のところ、タニアとカトリナが捨てられたことは誰の目にも明らかだった。

レクシスのせめてもの情けなのか、タニアは、王

女の世話と要塞内のすべてを執り仕切る、要塞内で最も権力のある地位に就かされた。にも関わらず、タニアは周りの者たちが恐ろしくて堪らなかった。

——捨てられたんだねえ、^{かわいそう}可哀相に。

——捨てられるまでは、いい生活してたんだろ？
あたしたちが想像もできないような。

——子供を産んで貴族様の仲間入りをしようなんて^{あつかま}厚顔しい。

——貴族様が、神の血が流れていない者を本気で愛すると思っているのかい？

——貴族様といくら^{まぐわ}媾合ったって、あんたの血に神の血が混じりやしないのに、何を勘違いしてるんだか。

——貴族様の愛人だったのが何だって云うんだ？
あんたは所詮、俺たちと同じ平民なんだよ。お帰り。

こちらの^{ちから}権力が上である所為か、口に出して云いはしないが、そんな心の声が聞こえてくるのだ。

皆の視線が矢となって、

——あんたは捨てられたんだ。

と、タニアの心を、レクシスとの愛の日々を、寸^ず断^た寸^ず断^たにするのだ。

しかし、すんでのところまで完全崩壊を免れていたのは、我が子カトリナの存在故だった。

カトリナはタニアとレクシスの愛の結晶、見える、触^{さわ}れる、感じられる、確かな愛の證^{あかし}であった。自分の体は、確かにこの子を産んだことを感^お覚^ぼえている。信じられるのはカトリナだけだった。

「レクシス様はとても困ってらしたのよ。厄介な仕事を押しつけられた、って。それで、あの美しいお顔を涙で濡らしながら、あたしに頼むの。頼めるのはお前しかいないんだ、って。愛しいレクシス様のお願いだもの、聴いてあげないわけにはいかなかったわ。そうしてあたしはこの仕事を任されたの。——そう、あの化け物さえ居なければ、あたしたちはレクシス様と愉^{たの}しく暮らしていたのよ」

タニアはそのようにカトリナに語って聞かせ、何度も語るうちに、いつしかタニア自身もそれを信じるようになっていった。

すべてはあの化け物の所為。

あの化け物——王女が呪われてさえいなければ、毎日折檻^{せっかん}して鬱憤^{うっぶん}を霽^はらしたに違いない。しかし、

さすがに恐ろしくて手が出せなかった。あの忌わしい力を目の当たりにしたらなおさら。

それに、総大主教ジポイテスの差し金の目もあった。「王女の教師」として、二ヶ月に一度やってきては十日ほど滞在していくのである。

故に、あまり大きなことはできない。精精、総大主教の指示通りに王女に清貧な生活をさせ、毎月王都から送られてくる物資を着服するくらいのものであった。

「これくらいの旨味がなければやってられないもの、こんな仕事」

しかし、着服できるものなど微微たるものだった。

「きっと、あの腐れ坊主が着服しているに違いないわ」

総大主教ジポイテスが王女に関するすべてを執り仕切り、タニアはその指示に従って要塞内を執り仕切るだけだった。

「ほら、新しい服が来たわよ。着て御覧。よく似合っているわ、カトリナ。あんたがお父様似でよかった。それにしても、こんなところじゃ誰にも見せられないのが残念だわ。あの化け物の所為で。でも安心なさい。あんたが年頃になったら、お母さんがこんなところから出してあげるからね。あんたひ

とりだけなら、ここから出て行けるのよ。……お母さんも一緒に？ そう云ってくれるのは嬉しいけれど、それはできないのよ。あの化け物の所為で」

そう云っていたタニアが病の床に^ふ臥した時、カトリナは十二歳、結婚するにしろ、親の手から離れるにはまだ少し早い年頃だった。

「遂に、あの化け物の呪いが、お母さんの体を^{むしば}蝕み始めたんだわ。でも、お母さんは、あんたをここから出すまでは死なないからね」

しかし、タニアは半年経っても床に臥したままだった。

それは風のない、雪の日だった。

厚い雲が、どんよりと空を覆うように広がっていた。音もなく、しんしんと雪が降り続けていた。

「なんか、ぶきみ。わたし、雪はきらいだわ。しずかすぎるんだもの」

開け放たれた窓から、ぼんやりとした陽光と、ひんやりとした空気がひたひたと入り込んでくる。しかし、部屋の中に満ちている闇や淀みを払拭することはできず、ただ部屋の中を冷たく掻き回すだけだった。

「……もういいでしょ、お母さん。これ以上まで開けてると、体によくないよ」

カトリナは窓を閉めるべく立ち上がり、タニアに背を向けた。

その時――

「……カトリナ、話があるの」

ひどく静かな声だった。

音も無く降る、雪よりもなお。

そうひ
窓扉に手を掛けたまま、カトリナは凍りついた。

まだ子供とはいえ、タニアが何を話そうとしているのか、敏感に察していた。

「カトリナ……こちらを向いて」

「いやっ！」

カトリナは、タニアに背を向けたまま首を振った。

「聞きたくないわ。お母さんの話なんて、わかっているもの。聞きあきてるもの。『すべてはあの化け物のせい』――そうでしょ？」

極力明るい声で、冗談めいた口調を出そうと努めたが、声の震えはどうにもならなかった。

「カトリナ……」

カトリナはきつく目を瞑った。

「あの化け物を……いえ、姫様を――」

――姫様を怨んでは駄目よ。

「……」

カトリナは我が耳を疑った。

お母さんは何をいってるのだろう？

姫さまをうらんでは、だめ？

お父さまに会えないのも……会ったこともないのも……お父さまといっしょにくらせないのも……友だちがいないのも……こんな何も無いところにいるのも……せまくてきたない、こんなところでくらすなければならないのも……あのおそろしい力におびえなければならないのも……お母さんが病気になったのも……すべて……すべてあの化け物のせいなのに!?

もしや……

カトリナの体が^{ふる}震え出した。

もしや、あの化け物ののろいがお母さんの頭まで……

切迫して、母を振り返った。母の顔を見て、胸を突かれた。

まだ三十歳のはずだった。元元美人というわけではなかったが、^{つや}艶はあるはずだった。しかし、今やそれはほとんど失われ、目の周りは落ち窪み、^{くま}隈ができ、頬は^こ瘦け、唇は^{ひび}罅割れ、肌はかさつき、金の髪は色褪せて……まるで老婆のようだった。

こちらをじっと見つめる眼光も弱弱しかった。

しかしその目に狂気の色はなかった。

「カトリナ、お母さんはもう長くないわ」

カトリナは俯いた。

「……そんなこと、いわないでよ」

「お母さんは、あんたに幸せになってもらいたいの」

「ふたりでしあわせになろうよ」

「お母さんは、あんたが幸せならそれでいいの」

カトリナは、俯いたまま首を振った。

「そんなのわたしはいや。お母さんといっしょじゃないといや」

タニアの顔が綻ほころんだ。

「前にもそんなこと云ってたわね。でも、それは無理なのよ。あの化け物の所為で」

「そうよ！ あの化け物のせいよ！」

「でも、あんたはあの化け物を怨んでは駄目。忘れるのよ。すべて。お母さんのことも」

「なんでっ!? なんで、そんなこというの!? わたしにはお母さんしかいないのに!!」

漸ようやく上げられたカトリナの顔は、涙と洩はなみずにまみれてぐちゃぐちゃだった。

そんなカトリナをタニアは愛しげに見、枯れ枝の如き手を伸ばして抱き寄せた。カトリナは母の痩せ細った体に、また涙した。

「あんたが幸せになるためよ、愛しいカトリナ。——いいこと？ よく聴いて。春になったら、あんたはセウエルス家に行くの。あんたはそこで奉公するのよ。セウエルス家ってのはこの地の御領主様でね、そこにはあんたより少し年上の男の子がいるらしいの。未来の御領主様になれる若様よ。あんたは若様に近づいて、若様の心を射止めなくてはならないの」

「いとめる……？」

「気に入られて、仲良くなって、妻になるってことよ。あんたは若様の妻になるのよ。愛人は駄目よ。絶対に。お母さんは愛人にしかなれなかったけど、あんたなら妻になれるわ。お母さんが今まで、あんたを磨き上げて仕込んできたのだもの。あんたは貴族になるのよ」

「きぞく……？」

「神の末裔——神の血を持つ御方たちよ」

「わたし、そんなのになりたくない。お母さんといっしょにいたい」

「今のあんたを送り出すのは不安だけど、お母さん、あんたをここに置いたまま死にたくないのよ」

「そんなこといわないでよ！ ……だいじょうぶよ。お母さん、病気ですこし気弱になってるだけよ」

「……」

「ねえ、お母さん、春になったら外に出てみましょうよ。中庭でもいいから。わたし、秋に花の種をまいたのよ」

結局、タニアがその花を見ることはなかった。

カトリナは泣き暮らしながら、セウエルス家からの迎えを待った。しかし、いくら待っても迎えがやってくることはなかった。今となっては、タニアもカトリナも知る由もなかったが、貯め込んだ着服物で、タニアがカトリナのセウエルス家への奉公入りを頼んでいた男が、タニアの死をよいことに約束を反故にしたのである。

母は死に、母の夢も破れ、そして己は母の仕事を引き継ぐことになった。

カトリナは絶望した。

すべてはあの化け物の所為だった。

——姫様を怨んでは駄目よ。

そんなの無理よ、お母さん。

この牢獄で、あの化け物を怨み続けて生きていく。

それが己が運命——と^{さだめ}思っていた。

「この度、ザーレ要塞守備の任に就いた、デルギリ
アのアルカイオス・セウエルスと申す」

銀褐色の髪に青い瞳——イ^イス^スタ^タリ^リヘ^ヘー^ーレ^レイ^イの末裔の特
徴を色濃く備えた、^{たくま}逞しく勇ましげな若い男が、己
の目の前で、そう^な名^の告るまでは。

——お母さん、神はわたしたちを見捨てていませ
んでした。

第六章 予感

「何やら不満そうだな、キュロス」

武具の手入れをしながら、アルカイオスは傍らかたわの男に話し掛けた。見たところ不満げな様子は一切無いが、長年の付き合いによる察しである。

「……いえ、解せぬだけです」

「……」

「……」

武具を手入れする音だけが、かちゃかちゃと狭い部屋に鳴り響く。

「……申してみよ」

こう云わねば、この男が己の心中を明らかにすることは無い。余計なことは云わぬ男なのである。

「では、はばか なが 懼り乍ら。——なにゆえ こ こ 何故ザーレ要塞なのかが解せませぬ。どう考えても、ヘルマディス要塞の方が比べるまでもなく最適と思えます」

仇討ちの拠点のことを云っているのだ。

「そう考えるのが当たり前だな。しかし、私は知ってしまったのだ」

「？」

「お前は、ここがどういう場所であるか知っていたか？」

「噂は聞き及んでおりましたが、よもや呪われた王

女の幽閉先だったとはついぞ存じ上げませぬ」

「どう思う？」

「王女の^{すまい}住居ではありませぬな」

四ヶ月前、あの少女——王女リュフィーナに助けられた時には、アルカイオスはザーレ要塞の全貌を窺い知ることはできなかった。

吹雪で三日ほど足留めされたその間、王女が幽閉されている塔から一歩も出ることはなく、また彼女以外の人間、つまりは彼女に仕えている人間と会うこともなかった。アルカイオスがそうした行動を取ろうとしたところ、止められたのだ。

——わたくしのためとお思いなら、何も為さらないで下さい。

と。

アルカイオスは異邦人、というか招かれざる客であった。そこで、こうして正面から堂堂とやってきたわけである。

改めて判ったことは、王女に仕える人員が十三人しか配されていないこと、その内戦力となる人員はたったの六人であること、そして、王女が彼ら彼女らからも冷遇されているということであった。それは食事の内容からしても明らかであった。王女の部屋で、彼女に与えられた食事を摂ったことのあるアルカイオスには判ってしまった。

こんなことが許されていてよいわけがない。

「うむ。それが故、だ」

キュロスの目が鋭くなった。

「我らは大殿の仇討ちに参ったのではないのですか？」

「無論だ」

キュロスの怒気が滲んだ目を、心外とばかりにアルカイオスが見返す。

「しかし、不正を知って、看過ごすわけにはゆかぬ」

「不正とはなんですか？」

「お前がさっき申したであろう。こんなところは王女の住居ではないと」

「左様^{さよう}ではありますが、我らが関わるべきことではないでしょう。ここは総大主教猊下の御管掌故」

「『総大主教猊下の御管掌』なら、不正が許されてもよいと申すのか？」

「よくはありませぬが、私は事情に蒙^{くら}い故、不正であるかどうかは判りかねますな」

「これのどこが不正でないとおっ!？」

アルカイオスは立ち上がり、平手でじめついた石壁を叩いた。その音とアルカイオスの怒声が、混じり合って大きく反響する。

しかし、キュロスは平然としたものだった。アル

カイオスの激情には馴れている。

「総大主教猊下が不正でないと言ふのなら不正でないのでしょう」

「お前は猊下を信じておるのか？」

「いえ」

「父上に何か云われてきたのか？」

「いつもの如く『アルカイオスを頼む』とだけ」

アルカイオスは溜息を吐いた。張本人の己が思うのもなんだが、キュロスには苦勞をかけていると思う。

クラティスは、アルカイオスには「好きにしろ」としか云わぬ。止めたところで無駄だと思っている節があるようである。実際その通りなのだが、そうになると必然的に守り役のキュロスに皺寄せしわが行く。

「お前は不正を看過ごせと申すのか？」

「というより、余計な義侠心は起こさないで下されたく」

アルカイオスは憤然とした。

「どこが『余計』か！」

「それは若御自身がよくお解りのはず」

「む……」

キュロスの云う通りであった。王女の様子からも、総大主教の話しぶりからも、「今のままですべて丸く収まっている」ということが窺えた。「今の

まま」が最善であるとしたら、そこに異を唱えることは余計なことである。水盤に張られた水鏡を波立たせるだけならまだしも、水盤を引っ繰り返すことにでもなったら^{おおごと}大事である。

王女は、己の立場というものをよく解っているようだった。不遇を受けながらも不平不満を云うことは無く、そうあることは仕方の無いこととしているようだった。

——ここでのことは、どうかお忘れ下さい。

別れ際に、彼女はそう云った。

そして今、その言葉に抗ったアルカイオスを拒むように、その姿を現すことも無い。

アルカイオスには、何もかもが腹立たしかった。王女リュフィーナの運命が。物分りの良さが。総大主教ジポイテスの正義が。祖父ステファノスの死が。世界の在り^{よう}様が。己の無力が。

「私は正義を示すぞ」

「いかなさるおつもりで？」

「……分らぬ」

「分らぬとはなんですか」

キュロスは呆れ顔をした。

「分らぬのなら、ヘルマデイス要塞に移りましょ

う」

アルカイオスは窓辺に寄り、何かを求めるように
はなだ 縹色の天を眺めた。一羽の鷺^{わし}が、我が物顔で春の空
を翔けている。

「……なあ、キュロス。鳥が飛ぶことを罷^やめたら、
鳥でなくなるとは思わぬか？ ……私は貴族であり
たい。そうあることに誇りを持ちたい。正義を示さ
ずして何が貴族か」

「ここは広大な天ではありませぬ」

「解っている。しかし、自由に飛び回れぬからと
いって、そこで諦めてもよいのか？ 翼を授かって
おきながら飛ばぬのは、神に対する冒瀆^{ぼうとく}であるとは
思わぬか？」

アルカイオスは振り返り、キュロスの灰色の瞳を
見つめた。真っ直ぐな眼差しがキュロスに突き刺さ
る。キュロスはアルカイオスのこんな目に弱い。何
かを期待させる目である。

キュロスは小さく溜息を吐いた。

「……御随意に」

＊

——若様の妻になるのよ。

若様——アルカイオスが目の前に現れてからとい

うもの、カトリナの心の中では、今は亡き母の言葉が絶え間なく響き続けていた。

未来の夫は、イスターリスの末裔イスターリスの名に恥じぬ魅力的な男であった。衣服の上からも筋骨隆隆たるが窺える優れた体躯すぐも然ることながら、その精神も肉体に違わず戦士の鑑かがみそのものであった。

「私は祖父の仇討ちに参ったのだ」

と云い、仇が去ったという雲居山脈を睥む眼差しには、山脈の頂きに冠された万年氷雪を融とかささんばかりの、滾たぎるような怒りに満ちていた。

その眼差しが己だけには優しいものであるならば、どんなに素敵だろうとカトリナは思った。

——この方の妻になる。

そう思うと、胸が苦しくなり、体が火照りほて、居ても立っても居られなくなる。

それなのに……

アルカイオスにとって、己はどうしてもよい存在なのだ。呪われた王女に仕える者の一人でしかないのだ。

じじょがしらどの
「侍女頭殿」

と、アルカイオスに呼ばれるたびに、そのことを突きつけられる。初顔合わせで名告ったはずだが、

「カトリナ」という名前など、もう忘れていないに違いない。

とはいえ、それはなんとなく予期していたことではあった。

貴族の血が流れているとはいえ、己は「貴族の家の子」ではない。ヴァリア教の教えに則れば、居るはずのない、けれど現実には居る、「外の子」なのだ。母タニアは断乎^{だんこ}として否定するに違いないが、そんなことが分らぬほどもう子供ではなかった。

しかし、母のその否定を否定する気も、母にそんな事実を突きつける気も、毛頭無い。事実がどうあるかなどどうでもよい。「事実」などというものが、いったい己に何をしてくれただろう。母は弱く愚かであったかも知れぬが、己にはただひたすら優しく、愛情深かった。信じるに足るのは母だけ、それだけが真実なのだ。

本来ならば、領主の令息に領主の令嬢と、これほど似合いのふたりもなかりうはずであった。それを打ち砕いたのは、誰だろう、あの化け物である。

あの化け物の所為で、どこにも属することができなくなった。

中途半端な己が、混じり気の無い純粋な貴族、しかもセウェルス氏族の本宗家、直系のイスターリス^{イ ス タ リ ヘ}の末裔^{ーレイ}という名門中の名門の継嗣から、いきなり恋愛対象として見てもらおうなど癡^{おこ}がましいことなのかも知れぬ。

ただ、一目惚れされるような魅力が己に無かったことが、少し哀しくはあった。神話や伝承にあるようなことをまったく期待していなかったとは、契約^{ヴァ}^アの神に誓^{リア}って言えぬ。

しかし、そういったことを差し引いても、状況はそれ程悪いものではないはずだった。

アルカイオスの守り役であるという騎士にそれとなく聞いてみたところ、アルカイオスには今現在恋人や愛人が居ないどころか、居た例しもないとのことであったし、ザーレ要塞^こに居る女といえば、枯れた婆^{ばばあ}、所帯染みた人妻、軽薄な小娘、そしてあの化け物だけで、凡そ己の敵となり得る女など居なかった。

いつ仇討ちが叶ってここを出て行くやも知れぬという焦りは付き纏^{まと}うものの、ここは檻^{おり}であった。じわじわと絶えず攻め続けていれば、いつかは落ちるだろうと思っていた。

ところが――

「おやめ下さいませ！」

「そのようなことは……！」

アルカイオスらがやってきて、一週間ほど経った時のことである。通りすぎた厨房^{ちゅうぼう}から、そんな声が聞こえてきたのは。

何事だろうと顔を出してみると、慌^{あわ}て忙^{ふた}めく侍女

二人に挟まれて、アルカイオスが居た。

「いかがされました？」

と、カトリナに声を掛けられて振り返ったアルカイオスの手には、王女専用の御膳があった。カトリナの目が丸くなった。

「侍女頭様！　どうか、アルカイオス様をお止め下さいまし。アルカイオス様御自ら、姫様の御膳をお持ちになるとおっしゃるのです」

驚きのあまり、カトリナは啞然とした。

しかし、そんなカトリナのことなどどうでもよさそうに、アルカイオスはカトリナの脇を通り抜けて、厨房を出て行こうとする。

「お、お待ち下さい！」

カトリナはアルカイオスの腕を掴んだ。しかし、制止にならぬどころか、そのまま引き摺られてしまいそうになる。そこで、アルカイオスの前に回り、両手を拡げて立ち塞がった。

感情の籠もらぬ青い瞳が、カトリナに向けられた。カトリナは、知らず、体がふる顫えそうになった。が、奥歯を噛み締めてそれをこら堪えた。

「通してくれぬか？　スープが冷めてしまう故」

「お通しすることはできません。それはわたくしどもの仕事でございます」

アルカイオスの目がわずかに細められた。

「ほう……。では聞くが、そなたらはこの仕事に誇りを持っていると胸を張って言えるか？」

どういう意味だろうと思いつつ、カトリナは即答した。

「ええ、勿論です」

「ならば、何故、^{なにゆえ}姫の食事がそなたらのものより粗末なのか？」

「……っ！」

カトリナは衝撃を受けた。

なんで……。なんでそのことを、この方は御存じなのだろう!?

王女の食事を作る者、運ぶ者しか、知らぬはずのことだった。王女のところに運ばれる時に、たまたま目に入ったのだろうか。

カトリナは動揺を押し隠して口を開いた。

「……そ、それは、総大主教様の御指示なのです。姫様は、神の力を以てしか救われぬ身の上。神に愛されるべく、^{けいけん}敬虔なヴァリア教信徒として、毎朝毎晩神に祈りを^{ささ}奉げ、清貧な生活を送らねばならない、と」

嘘ではない。総大主教の云う「清貧」とは、どのようなものかは知らぬが。

「……」

アルカイオスは何かを考えるような顔つきをし

た。カトリナは固唾かたずを呑んで見守った。

アルカイオスは実に立派な貴族に見えた。不正など絶対に赦ゆるさぬに違いない。不正を知ったら、妻にはしてくれぬだろう。

「ふむ……とはいえ、そなたらは、主あるじよりも贅沢ぜいたくな食事をしてなんとも思わぬのか？」

「あ……」

主が清貧な生活をしているのなら、臣従もそれに合わせるのが道理である。厚顔無恥だきと唾棄だきされても文句は云えぬ。

——軽蔑、された……？

目の前が暗くなっていく。

「す、すみませ……」

と、声を出した瞬間、ぽろりと涙が転がり落ちた。思わず出てしまった涙に、カトリナは衝撃を受けた。

——なんて無様……！

アルカイオスがわずかに眉ひそを顰ひそめている。もしかしたら、不快に思っているのかも知れぬ。その後ろでは、二人の侍女が興味深げにこちらを窺っている。カトリナはあまりの羞恥に俯いた。

そんなカトリナには構わず、アルカイオスはカトリナの脇を通り抜けようとした。

「お待ち下さい！ いけません！」

涙の跡もそのままに、カトリナは再びアルカイオスの前に立ち開帳^{はだ}かった。今度は、苛立ちの籠もった目がカトリナを見た。

「いい加減にしてくれぬか？」

追い打ちをかけられて、さらに涙が溢^{こぼ}れそうになった。

「……申し訳ございません。ですが、アルカイオス様を姫様に近づけるわけにはいかないのです」

アルカイオスは口辺に笑みを浮かべた。

「呪い故、か？ 私はそのようなものなど恐れておらぬ」

どきりとした。

こんな状況だというのに、その言葉に胸が高鳴ってしまった。

しかし、この方はあれを見ていないのだから、そんなことを云えるのだろうとも思った。

「それもありますが、総大主教様の御指示なのです」

これも嘘ではない。アルカイオスらが来る前に、現任兵士とアルカイオスらが入れ替わる旨と共に、王女とアルカイオスの間に絶対に間違いがあってはならぬ旨、ジポイテスから通達があったのである。その「アルカイオス・セウエルス」が、よもや「セウエルス家の若様」その人であるとは、実物を目に

するまで信じられなかったが。

とはいえ、ジポイテスからの指示が無くとも、アルカイオスを王女に会わせる気は毛頭無かった。

いや、会わせたところで、アルカイオスが王女に惚れるなどという、馬鹿げたことがあるとは思っていない。確かに、王女は王女だけに、^アク^クシ^スオー^ンの末裔^レだけに、己よりも少しばかり美しくはあった。しかし、それがなんだというのだろう。母タニアは、美人というわけではなかったにも関わらず、貴族の、それも領主の、愛人だったのである。立派な貴族であるアルカイオスが、外見なんぞに惑わされるわけがない。いくら美しかろうと、王女は「化け物」なのである。

しかし、化け物だけに油断ならぬのである。あの忌わしい力で、アルカイオスを手籠めにするやも知れぬ。王女は己と同じく十五歳——結婚していても当たり前の^{とし}年齢であるし、幼い頃はいざ知らず、少なくとも年頃になってからは若い男に触れるどころか見たこともないはずである。男に飢えていると見て間違いない。アルカイオスは絶好の獲物と成り得る。

——アルカイオス様はわたしの夫となる御方。化け物なんかに触れさせない！

王女が自主的に、離れの塔から出て来ることが無いのは、有り難いことであった。化け物なりに己の

立場を辨わきまえているのだらうと、カトリナは理解していた。

「総大主教猥下は、私と姫が恋仲になることを恐れておいでのようだが、そのようなことはあり得ぬ。私は恋愛遊戯をしにやってきたのではない故」

「男女の仲なんて、当てにはなりませんわ」

「男女の仲ではない。主従だ。そこにあるのは敬愛であって恋愛ではない」

「でも、アルカイオス様はよろしくても、姫様はどうでしょう？」

「どうであらうと、どうにもならぬ。恋愛とはふたりでするものであらう？」

「そうではございますが……僭越ながら、アルカイオス様は、女というものをよく解っていらっしゃらないようにお見受け致します」

「私が、姫の色香に惑わされるのではないかと？」

「ええ」

「姫は、仮にも大国ローゼンディアの王女であらせられる。御自身のお立場は辨わきまえていらっしゃるであらう。聡明な御方であられると信じたい。——話はこれで終わりだ。通せ」

カトリナは、断乎として通さぬという顔つきで、両手を広げた。

「アルカイオス様は、姫様のお気持ちはどうでもよ

ろしいのですか？」

アルカイオスは眉を^{ひそ}顰めた。

「姫のお気持ち？」

「確かに姫様は、御自分のお立場をよく^{わきま}辨えておい
です。離れの塔から一步も出ていらっしゃらない
のは、あの忌わしい力が皆に降りかからぬようにと
いうお気遣い故です。ですから、もしアルカイオス
様に恋心をお抱きになられても、自重なさるでしょ
う。でも、それがどれだけお辛いであろうことか、
お解りですか？」

「……」

「恋愛など、所詮、遊びのひとつとお思いですか？
確かに、恋愛がそのまま結婚に結びつくわけではあ
りませんが、年頃であられながらも、お若い殿方にお
接しになられたことの無い姫様は、恋愛から結婚
を意識せずにはいらっしゃれないでしょう。いえ、
お若い殿方を御覧になっただけで、意識なさってし
まうでしょう。年頃になれば結婚をし、子を為し育
てるのが、人の身の在り方というものです。それな
のに姫様は、呪い故にご結婚が叶わぬ身なのです。
女でありながら子を為すことが許されぬ身なので
す。姫様のことですから、それも仕方の無いことと
思っただけならいざしやるかも知れません。恐らく考えま
いとしていらっしゃるでしょう。そこへアルカイオ

ス様がいらっしゃるということは、心の奥深くに閉じ込めているそのことを、無理矢理^こ抉じ開けるに等しいこととお思いになりませんか？」

カトリナの言葉には、尋常ならぬ熱が籠もっていた。

それも当然だろう。「呪い故」ではなく「あの化け物故」ではあったが、他ならぬ己自身のことであつたのだから。——いや、今となつては、「かつての己自身」とせねばなるまい。夫となるべき^{ひと}男性が目の前に居るのだから。

しかし、そんな事情など知る由もなからうアルカイオスは、すっかり気圧されてしまっているようだった。

「……解つた。そなたの云う通りやもな。考えが足りなかつた」

心なしか青冷めた顔で、持っていた御膳をカトリナに手渡し、

「スープを温め直して、持って行くがよい」

と、カトリナその他の侍女の仕事ぶりを監視することも無く、さっさと消えてしまった。

「……」

最前までの強硬な姿勢はどこへやら、いきなり退き下がってしまったアルカイオスに、カトリナは啞然とし、次いで一瞬にして悟って愕然とした。

——アルカイオス様は、あの化け物に恋をしている？

第七章 苦悩

夜、あまりの寒さに目覚めることがある。昼の暖かさに油断して、それなりの準備を怠ったためである。

デルギリア領は、東に向かって高度の高くなる、東部高原イオルテスの北東部に位置している。広大な国土を持つが故に、地域による気候差が激しいローゼンディア王国だが、中でもイオルテス地方は気候の厳しい部類に入った。

その厳しさとは、ひとつに、一日の内の寒暖差が激しいことが挙げられる。^{アクション}太陽神の車が天の真上を駆けている時は、裸でないと居られないというのに、^{アクション}太陽神が去った途端に急激に冷え込み始め、火を^{おこ}熾さなければならなくなる——などということとは、極端な例ではあるものの、たまにある。

ザーレ要塞近辺は、この半年、夏ですら裸でないと居られないという日はなかったが、領主館のあるギルテよりも冷え込みはきつかった。

とはいえ、もう半年も過ごしているというのに、未だにここの気候に馴れぬというのは、気が弛んでいる証拠であると、アルカイオスは自戒する。

仇討ちが一向に進展せぬのも、気の弛みが原因なのかも知れぬ——と云ったら、キュロスに嘆息され

た。

「弛んでおられるのではなく、^{きぜわ}氣忙しくておられるだけです。仇は雲居山脈方面に消えたとしか判らぬのですよ？ 確かに呪われた悪の種族とはいえ獣ですから、縄張りの中を季節に^{したが}順^{めぐ}って環^{めぐ}ってはおるのでしょうか……雲を掴むが如きことではありませぬか。たった半年でなんとかなるわけがないでしょう。よもや一年二年で仇を討つつもりで、『仇討ちが叶うまでザーレ要塞に居坐る』などと仰ったのではありますまいな」

そんなつもりは無かったが、実際のところはそうだったのかも知れぬ。

早く仇を討ちたかった。

仇を討てば、何かが変わる、何かから解放される——そんな気がするのだ。

不純だな、と思う。

目的のはずの仇討ちが、手段になってしまっている。

こんな気持ちで仇討ちをしても、なんの意味もない。祖父も浮かばれない。

アルカイオスは手を開き、握り締めていた革手袋

を見遣った。稚拙な染め物の如き、黒い染みに覆われている。ステファノスの血である。あの日、ステファノスの^{いのち}生命をわずかながらこの世に押し留めた、名残りであった。

この手袋を見ると、染み込んだ血の臭いを嗅ぐと、一瞬前のことのように、あの時のことがまざまざと思い出される。

^{かじか}凍んだ手にはあまりにも熱かった血潮、徐々に確実に弱まっていく^{いのち}生命の^{おと}鼓動、冬の湖の如き青い瞳の奥に見えた^{ユノー}冥界への道、祖父の激しい叱責、そして己の無様さ。

祖父の死は、避けられないものだったのだろうか？

あの時、矢を落とさなければ、転ばなければ、投げた刀を外さなければ、もっとよく体が動けば、もっと冷静であれば、しっかりと武装していれば、もっと人を連れて行けば、狩りに出掛けなければ、キュロスを厄介払いしなければ、祖父に会いに行かなければ……！

こうしていれば、ああしていれば——そういったことは、いくらでも湧いてくる。

——天命。

と、祖父は云った。

「天命」で片づけるのなら、すべては楽だった。し

かし、「天命」に屈するのは嫌だった。

後悔し続けなければならない。それが^{とむら}吊いだと思う。

それなのに、己はそれから逃れようとしている。仇を討てばそれで終わると思っている。仇討ちが成ったところで、祖父が^{かえ}還ってくるはずもないというのに。

——軟弱なものだな、アルカイオス・セウエルスよ。それでも、^は栄えある^イスター^リヘ^ーレイ^イの末裔の宗家、その継嗣なのか？

苦笑せずには居られない。

あの世で父祖に顔を合わせて、恥じるところの無い生き方ができているかといえは、断じて否である。

仇討ちのことだけではない。王女のことにしたってそうである。

——姫様のお気持ちはどうでもよろしいのですか？

そう云ったのは、誰であったか。

この半年、王女には一度も会っていない。会えるはずもなかった。会うべきではないのだから。

冬のあの三日間、あの少女はどんな気持ちで過ごしていたのだろうか？

頬を赤く染めていたあの少女を、潤んだ目でこち

らを見ていたあの少女を思い出し、アルカイオスは遣る瀬無い気持ちになった。

己は、あの少女の体を傷附けただけでなく、心までも傷付けていたのか……。

それなのに、何も報いることができぬ。^{せいぜい}精精、あの少女の周りの小さな不正を正すことくらいしか、己にはできぬのだ。

「腕をお上げ下さいませ」

突如、女の声が降ってきた。

我に返って声の方を見遣ると、すぐ傍に女が居た。金の髪をきっちりと頭の上に纏めた、召使い姿の女である。

——誰だ……？

この女は何者で、何故、己の部屋に居るのだろうか？ と考えている内に、^{しんい}寝衣を脱がされていた。肌が冷たい空気に^{さら}漂される。

「失礼致します」

女は、アルカイオスの逞しい体を濡れ布巾で拭き始めた。

「……」

されるがままにして、アルカイオスはぼんやりと考えを^{めぐ}回らせた。

——姫の侍女頭、だったような……？

寝惚け頭が徐徐にはっきりしてくる。

そう、姫の侍女頭であるというのに、何故かいつの間にもやら、朝夕、己の体を清めにやってくるのが日課になっていたのだった。

そういえば、最近、気がつくところの女が傍に居ることが多いような気もする。

……。

……？

……まあ、どうでもよいが。

部屋の外から扉が叩かれた。

「キュロスです」

「入れ」

扉が開かれ、キュロスが入ってきた。

キュロスはアルカイオスの体を清めるカトリナを見留め、小さく頷いた。

「侍女頭殿もおいでか。丁度よい」

「何かあったのか？」

「ギルテより早馬です」

ギルテは、デルギリアの領主館があるところである。

アルカイオスはただならぬものを感じた。

「申せ」

「トゥライのナヴィド族に不穏な動きがあるようです」

トゥライは、ローゼンディア王国の東、広大な

トゥライ高原に彷徨^{うろっ}く、野蛮で獰猛な遊牧騎馬民族である。族長を中心とした部族がいくつもあり、たまにそれらを束ねる強力な大首長が現れて、ローゼンディア王国などの周辺国家を津波の如く襲うことがあるが、ここ数十年、そのようなことは無くて久しい。各部族がそれぞれ勝手に動き回り、ある部族は友好的に物物交換にやってきたり、ある部族は敵対的に強盗掠奪にやってきたり、といった有り様で、ローゼンディアの最北東に位置するデルギリアでは、年に数回小競り合いがある程度であった。

「ナヴィド族といえば……確か、去年の今頃、強盗にやってきた奴らだな」

「ええ。我らが撃退しましたな」

「ああ。よく憶えている」

その時のことを思い出して、アルカイオスの身内は熱くなった。

強盗団は、族長の息子に将^{ひき}いられた三十人程度の小集団で、アルカイオスはその族長の息子と刃を合わせ、引っ捕らえたのだった。彼の者は今、王都ガレノスで人質となっているはずである。

「人質を奪い返す算段やもな」

「ということで、注意を怠らぬように、とのことです」

アルカイオスは頷き、カトリナの手伝いで衣服を

着始めた。

＊

いつもの如く、仇討ちに出掛けるアルカイオスらを見送った後、カトリナは自室に戻った。

部屋に入ると、南国の甘く高貴な花の香りがかすかに鼻を^{くすぐ}擽る。窓の方から流れてくるが、外からではない。風が吹く度に、アウラシール産の上等なクウアエ精油を染み込ませたレースカーテンが煽られ、部屋の中によい香りが拡がるのである。

^{みすぼ}身窄らしいザーレ要塞には似合わぬ、華やかな部屋であった。

床に敷き詰められているのは、トゥライ製の風変わりな文様の絨毯である。ふかふかとして文理^{きめ}細かなこの絨毯は、指が細くて^{しな}靱やかな、うら若き乙女にしか織れぬという、稀少なものであった。

壁を覆い尽くしているのは、薄白茶色を基調とした^{つづ}綴れ織である。これは、^{ディオオーメ}藝術の女神の寵愛深い地、ローゼンディアのディオメルテで作られたもので、神話の一場面が描かれていた。

その他、寝台、^{たんす}箆笥、小卓、戸棚などの家具も、王侯貴族が使うような上等なものである。

この部屋にあるほとんどのものが、国王からリュ

フィーナ王女に送られたもので、タニア・カトリナ
おやこ
母娘が横領したものであった。

小卓の上には、筆記道具と、総大主教ジポイテスの封印のある、樹皮の手紙が数通置かれている。カトリナは三ヶ月前に封を切った手紙を取り上げ、寝台に足を向けた。

が、そこはすでに占拠されていた。

精緻な花の刺繍が施された掛布団の真ん中で、黒猫が心地良さそうに丸くなって眠っている。艶やかで毛並みのよいこの猫は、アウラシール産のハピという短毛種で、貴族の愛玩用によく飼われているものである。これまた当然横領したもので、タニアが亡くなってからのカトリナにとって、唯一の慰めともなっている猫であった。

カトリナは仕方無しに寝台の端っこに腰掛け、ここ三ヶ月、何度も読み返している手紙を開いた。

流麗な筆致は、カトリナへ辞職を勧めていた。カトリナのようなよい人材を手放すのは惜しいが、カトリナがすでに年頃の娘になっていたことを失念していたと謝罪し、年頃になったら結婚して子を為し育てるのが人の道であると訓話を混じえて説き、よければ良い男性を何人か紹介してもよいとあった。

初めてこの手紙を読んだ時は、嗤^{わら}ってしまった。

「失念していた」だなんて、よく云えたものだ。ど

うでもよかったに決まっている。

賊が襲ってきたらひとたまりもない廃棄要塞で、日々怯えながら危険性廃棄物の世話をしている者のことなど、一度たりともここに足を運んだことが無い、安全なところで安穩としている者が、何を気に掛けるというのだろう。何も問題が起こらなければよい——それだけだろうに。

王女の教師としてやってきている神官に、一度、そのようなことを真綿に^{くる}包んでぶつけてみたところ、

「口を慎みなさい。総大主教猊下は寛大な御方ですから、あなたの物言いをお赦しになるでしょうけれど、わたくしは赦しませんよ。猊下はお忙しい御方故、わたくしが代わりに参っているのです。猊下はいつだって、姫様のことを、姫様にお仕えしている方々のことを、気に掛けていらっしやいます。姫様が呪われた運命から解放される日を、毎日ご祈願なさっておいでです」

と、総大主教の弟子であるとかいう^{としま}年増女は、片眉をぴくつかせながら云ったものだった。

愚かな女だと思った。騙されているに決まっているのに。もしかしたら、総大主教の不倫相手なのかも知れぬ。だとしたら愉快だった。この女も母タニアと同じなのだ。

総大主教にとって、ザーレ要塞で育った、どこにも行く当てのない己は、都合のよい存在に違いなかった。こんなところに進んでやってこようなんて人間は、まず居ないのだから。

運良く王女の忌わしい力に触れることなく勤務を終えた者の勧めで、御褒美がよいからと勇んでやってきて、その日の内に運悪く王女の忌わしい力に触れてしまい、恐怖のあまり要塞を飛び出してイゴールに喰い殺された——なんて者も居たくらいである。騙すようにして連れてきても、いつだって人手不足なのだ。

己はあの化け物と運命を共にせざるを得ないので、母が死んだ後から、ずっと思い続けてきた。半年前に、セウェルス家の若様、アルカイオスが現れるまでは。

今更だった。なんで今更こんな話が出てくるのだろう。今更辞職を勧められるまでもなく、アルカイオスの妻になれば、こんなところから出て行けるというのに。

しかし、カトリナは、暫く考えさせて欲しいと総大主教に返信した。

——アルカイオス様の妻になれなかったら。

と、考えてしまったのだ。

そんなこと、あり得ない。考えたくもない。

しかし――

――アルカイオス様は、あの化け物に恋をしている。

嘘だと思いたかった。

あの化け物とアルカイオスには、なんの接点も無かったはずである。どうして、見たことも会ったこともない、それも化け物と恐れられている女に、母と己をこんな境遇に陥れた女なんかに、恋などできるだろうか。あり得ぬことである。

とはいえ、己の予感は確かに思えたし、それを前提にアルカイオスを観察してみれば、ぴたりと当て嵌まった。王女に対する待遇改善要求はともかくとして、必要以上に王女のことを聞きたがったり、暇さえあれば王女の居る離れの塔を見ていたり……。

それでも、これはきっと神が与え給うた試練に違いないと奮起して、アルカイオスを己に振り向かせるべく、あの手この手を尽くしてみれば、果たして
ことごと 悉くなんの手応えも無く、意識すらしてもらえず、
それどころか、己に女としての魅力が足りないのではないかと思わされ、やはりこの方はあの化け物に

恋をしているのだと再確認させられて、心に^{ふかで}深傷を負うばかりであった。

アルカイオスは己の夫となるべく、こんなところにやってきたのではなかったのか？ それが運命なのではなかったのか？

とても高貴な、^{イ ス タ リ ヘ ー レ イ}イスターリスの末裔の宗家の継嗣が、この世で最も慈悲深いはずの総大主教のみならず、実父である国王にまで見捨てられた、危険性廃棄物を封じ込めた廃棄要塞にやって来るなど、普通ではあり得ない。^{ラヌスカロン}宇宙山から^{ノ ム ス}人間界に、男神が花嫁を捜しにやって来るようなものである。これを運命と呼ばずしてなんと呼ぼう。母と己の祈りが神に通じたに違いなかるうに！

しかし、必ずしもアルカイオスに^{こだ}拘わる必要もないはずだった。タニアの夢は、カトリナを貴族の妻にすることだったのだ。アルカイオスを諦めて、外に出て他の貴族を捕まえる——そういう選択肢もある。複数の恋人たちと恋愛遊戯を^{たの}楽しみながら、己の夫たるに最も^{ふさわ}相応しい^{ひと}男性を捜す——そういうことだってできるのである。

最悪なのは、拘わり続けた^{あげく}拳句にアルカイオスを得られず、外に出る時にはとうに句を過ぎていて、好色な^{じじい}爺の後妻になるより外無いという場合である。これだけは御免だった。

いったい、どうしたらいいのだろう？

どうしたら、母の夢を叶えられ、己は幸せになれるのだろう？

そんな風に、この三ヶ月、カトリナの心は葛藤し続けていた。

不意に、肩に重さを感じた。柔らかな毛がさわさわと首筋に当たって、^{くすぐ}擦ったい。黒猫ミューが、カトリナの肩に載っかってきたのだ。喉を撫でてやると、ゴロゴロと鳴く。

ミューの体温が、温かさが、カトリナの体を通して心にまで滲み込み、母のぬくもりを思い出させた。

——ふたりでしあわせになろうよ。

と、死ぬ間際の母に云った。

今となっては叶わぬ夢。

……いや、母の幸せがこの己の幸せならば、それで、ふたりで幸せになることになるのではないか。

——あんたが幸せならそれでいいの。

と、母は云ったのだ。

己の幸せを求めることが、母の幸せに繋がるのだ。

ならば、己が心の欲するままに、

どうしたらいいのか？

ではなく、

どうしたいのか？

で、選ぶべきである。

カトリナは目を閉じて、心の声に耳を澄ましてみた。

そうして聞こえてきたのは……

——アルカイオス様を愛している。

どうして諦めることなどできよう。

どうして他の相手を捜す気になどなれよう。

まったく無防備に、己に体を清められているアルカイオスの姿など、あまりにも憎らしくて可愛らしくて堪らないというのに。思わず、その逞しく瑞瑞しい体に抱きついて、頬擦りしてしまいたくなる——そういった衝動を堪えるのが大変だというのに。

カトリナは徐ろに目を開き、^{おもむ}辞職を勧める手紙を、木目に沿って引き裂いた。

——アルカイオス様の妻になる。

第八章 祭り

「若、名誉ですぞ！」

と、青青とした葉でいっぱいの籠が、アルカイオスの目の前に差し出された。

アルカイオスは籠から葉を一枚摘まみ上げ、指先もてあそで遊びつつ、キュロスを見上げた。

「私はやらぬ」

「最終日くらい、よいではありませんせぬか」

「若い兵士ヤツにやらせておけ」

「今詰めている兵には、若い者はおりませぬ」

アルカイオスは笑みを浮かべながら、澄まし顔の口髭男を睥みつけた。

「略はかったな、キュロス」

ザーレ要塞に詰める四人の兵士は、ヘルマディス要塞に詰めている兵士と順次交替させている。アルカイオスは、その兵士の選出をキュロスにすべて任せていた。

「では、お前がやれ」

「私はもう若くはありません故」

「そんなことはない。お前はまだ充分若い。私が保ほし證ようする。先日のエネン・ゲーサでの競技では、皆、お前より若い者たちであったというのに、すべての競技でお前が一番であったろうに」

「いや……それは……競技に参加できる者といえ
ば、ザーレ要塞には六人しかおりませぬし、その上
若が参加なさらないとすれば、まあ……無理もない
結果ではないかと思うのですが……」

キュロスは軽く咳払いした。

「煽^{おだ}てには乗りませぬぞ。私はもう三十を越えてお
ります。若い部類には入らぬでしょう」

「とにかく私はやらぬ。理由は何度も言わせるな」

「……侍女頭殿が残念がりますなあ」

キュロスはぼそりと呟いた。

それを耳^{みみざと}聡く聞きつけて、アルカイオスは怪訝^{けげん}な
顔をした。

「何故そこで侍女頭殿が出てくるのだ？」

「……」

キュロスは秘かに溜息を吐いた。

「私のことは気にせず、祭りを楽しめ。『緑の人』
役は、ヘルマデイス要塞から連れてくるがよい。ま
だ、太陽神^{アクション}は家に帰り着いておらぬ。さっさと行
け」

アルカイオスはキュロスに籠を押しつけ、部屋か
ら追い出した。

フィラデル祭。

毎年四月二十三日から一週間行われる、大地母神

メーサの祭りである。

これは特に、女たちが楽しみにしている祭りで、祭りの期間、女たちはすべての家事から解放され、代わりに男たちが家事をする。日が出ている間は女たちのみで祭りを楽しみ、男たちはその間に家事をし、日が沈んでから祭りに参加し、夜通し火を焚いて、皆で楽しく過ごすのである。

祭りの最高潮では、全身に葉っぱを貼り付けた「緑の人」を先頭にして、皆で町中を練り歩く。「森の男」とも呼ばれる「緑の人」は、大地母神メーサの息子である、草木神プリオニムスの化身と見^{みな}做され、春の到来を告げる存在として、大きな歓びの中で迎えられる。誉れ高いその役は、毎年ひとり、若い男たちの中から選ばれるのである。

アルカイオスは、窓から中庭を覗いた。未だ陽の^{ざんし}残滓の見える夕闇に、頼り無げな^{かがりび}篝火が、ぽうっと浮かんでいる。その周りには、それぞれ^{ほうき}帚を手にした六人の女たちがいる。^{アクション}太陽神が家に帰り着くとともに、^{また}帚に跨がって踊り出すのだ。

^{わび}侘しいものだな、と思う。

領主館のあるギルテでは、篝火があちこちで輝き、ひとつの篝火を二三十人が囲んで踊っていたものである。

いや、ギルテと比べても仕方あるまい。そもそも

が侘しいところなのだ。静寂があまりにも大きすぎて、祭りの賑賑^{にぎにぎ}しさなど押し潰されてしまうほどに。

到底、春が到来したとは思えぬ冷たい風に乗って、歌声が聞こえてきた。女たちが踊り始めたのだ。

そこに、王女の姿はない。なんの祭りであれ、王女が皆と祭りを楽しむことはないらしい。誰も寄せつけず、ただひとり塔に籠もって、日がな一日祈りを奉^{ささ}げているのだという。

一年と数ヵ月前——今や、夢だったのか現だったのか判らなくなりつつある、あの少女と過ごした三日間。その中で交わしたわずかな会話の中には、祭りの話もあった。なんとといってもあの時は、新年の祭りの最中^{さなか}であったから、ごく自然な話題であったといえよう。

皆と一緒に祭りに参加しないのかと問うと、

——わたくしには、祈ることしか許されていませんから。

と、彼女は、高く澄んだ声に似合わぬ、重苦しい口調で云ったものだった。

そこにはいったい、どのような思いがあったのか、アルカイオスには知る由もない。しかし、彼女の目の前で、のほほんと祭りを楽しむ気には、到底

なれなかった。

「祭りに参加なさらぬですと？ イスターリスの末裔の宗家の継嗣ともあろう御方が。怪しからぬことですな」

ザーレ要塞にやってきて初めての祭りの日、キュロスは眉を^{ひそ}顰めながら云ったものである。

祭りというのは神に対する儀礼である。それに参加しないということは、不信心であると云える。

「参加しないわけではない。ただ、ひとりにして欲しいだけだ」

「それは、参加なさっているとは申し上げ難い気がします」

「姫も同じだ。姫をおひとりにして、祭りを楽しむわけにはゆかぬ。私くらい、お付き合いせねば」

「ならば、私も」

「それは駄目だ。お前まで参加しなるとなれば、他の者たちが気兼ねして、祭りを楽しめぬであろう。姫とて、そのようなことは望んでいらっしやらぬはず」

そうして、ザーレ要塞に来て以来、アルカイオスは祭りに一度も参加していないのであった。

しかし、こんなことをしても、姫の心が癒されるわけでも、姫が救われるわけでも、何がどうなるわけでもないのだろうと思う。

——何をやっているのやら……。

己自身でもよく解らぬ。

^{おぼろづき}朧月のほのかな光に、亡霊の如く浮かび上がる離れの塔を見ながら、^{りんご}林檎の香りのする蒸溜酒を煽った。

＊

ぱたぱたぱた……

小走りの軽い足音で、アルカイオスは居眠りから覚めた。

頭ひと振りで眠気を飛ばし、小卓と椅子を蹴散らして、体当たりで扉を開ける。

腰の刀に手を掛けて身構えると、弱弱しい月明かりが射し込む薄暗い廊下の向こうに、ふわりと靡^{なび}く長い金髪が——少女の背中が、一瞬見えて消えた。

「姫っ!？」

心中驚きつつも体は無意識に動き、疾風の如く廊下の端に到ったが、少女の姿はどこにも無く、闇に侵蝕されたが如き階段に、冷え冷えとした風がうねっているばかりであった。

——まぼろし……？

寝惚けていたのかも知れぬと、首を振り振り部屋

に戻ってみると、入り口の辺りに樹皮の切れっ端が落ちていた。

取り上げてみると、女らしい柔らかみのある文字が連なっていた。

「薪小屋でお待ち申し上げております」

と。

樹皮を持つ手がわずかに^{ふる}顫えた。

幾度も幾度も、その文字を目で追った。

その言葉の意味するところが、よく解らなかつた。

「待つ」とは「会う」ということで、「会う」には何かしら「理由」があるわけで……その「理由」がよく解らぬ。それが「今」であることもよく解らぬ。

何やら恐ろしい気がする。

しかし――

――まぼろしではなかった。

先程見た少女の後ろ姿は、まぼろしではなかったのだ。

そう確信すると、心の深奥から言い知れぬ何かが

一気に湧き上がった。それに衝き動かされるままに、アルカイオスは駆けていた。

中庭に出る。

見上げれば、朧月は中天にある。深更であった。

明日に備えてか、すでに祭りの火は消え、ザーレ要塞は静寂に呑み込まれていた。

月の顔前を過ぎる雲の流れは速く、青白く照らされる世界は、緩やかに明滅するように濃淡を変える。

アルカイオスはその中を駆けて、中庭とは名ばかりの荒れ地を抜けて、隅にある薪小屋に辿り着いた。

「……」

扉の前で立ち止まり、立ち尽くした。勢い込んでやってきたものの、扉を前にした途端に躊躇いが生じた。

——この向こうに、姫が……。

そう思うと、妙に心の奥が騒ついて、居ても立っても居られなくなるというのに、

——会ってどうする？

——会ってどうなる？

——会ってよいものなのか？

そういった思考がぐるぐると回って体に絡みつ

き、アルカイオスをその場に足留めする。

時間だけが過ぎていく。

明滅する世界が時の流れを示し、アルカイオスを
急ぎ立てる。

——あまりお待たせするわけにはゆかぬ。

考えても^{らち}埒が開かない。

解り切っている。

この扉の先に、すべての答えがある。

「……」

アルカイオスは月を見上げ、その力を身内に取り
込むように深呼吸をした。

すると、新たな考えが浮かんできた。

難しく考える必要は無いのではないのか？

「待つ」とは「参れ」ということだ。^{あるじ}主から「参
れ」と云われたのだ。ならば、臣下は素直に従わね
ばならぬ。あの時は、名も無き少女と名も無き騎士
であったが、今は違う。王女リュフィーナと、王女
にお仕えする騎士アルカイオスなのだ。

その考えが、アルカイオスの胸の内に、すとん、
と納まった。

今まで何を考えていたのだろうと思いつつ、今ま
での^{しゅんじゅん}逡巡が馬鹿らしくなるほど無造作に、アルカイ

オスは扉を開けた。

その瞬間、内から白い煙が流れ出てきた。一瞬、薪が燃えているのかと思ったが、そんな匂いはしない。未だ嗅いだことの無い不思議な匂いがする。香こうでも焚いているのであろうか。

白い煙が漂う小屋の内を見極めんとするが、外の月明かりに馴れた目には、暗くて判然としない。採光窓はあるものの、そこから射し込む光はあまりにも弱く、そこそこに転がる薪の輪廓を、うっすらと浮かび上がらせているだけであった。冬が終わったばかりの薪小屋は、冬を控えた頃が嘘のように閑散としていた。

「姫……？」

恐る恐る言葉を放った。が、返されることは無く、薄闇と静寂の中に転がり落ちただけであった。

小屋の奥に進む。進むに連れて咳込んだ。煙は奥の方から流れてきているらしい。

何故また、こんなところで香を焚いているのだろうか？ と、思った瞬間――

パタン

背後で扉が閉まる音がした。

「……っ！」

なんたる不覚と青冷めるも、すぐさま振り返って身構えた。

扉の前に誰かが立っている。扉を閉めた張本人であろう。よくよく目を凝らせば、腰まで垂れた長い髪が――少女のものと思しき背中が、見えた。

アルカイオスは構えを解いて、口を開きかけた。が、それよりも早くあちらが口を開いた。

「何をしにいらっしゃったんです？」

アルカイオスは愕然とした。

その言葉と、声の冷たさに。

そして戸惑った。

そちらから一方的に「待っている」という手紙をよこ寄越しておきながら、「何をしに来た」もないだろう。

……いや、そういうことを云っているのではないのか？

アルカイオスは思い直した。

「薪小屋に」ではなく、「ザーレ要塞に、何をしに来た」なら、辻褄が合う。

アルカイオスは言葉に詰まった。

――ここでのことは、どうかお忘れ下さい。

あの時、彼女にそう云われたのだ。

しかし、いかな^{いのち}生命の恩人といえども、そんな願いは聴き入れられない。

「……不正を、正しに」

「不正？ 不正とはなんですか？」

「^{あなた}貴女は……いえ、姫は、ローゼンディアの王女であらせられます。それ相応の待遇を受けられなければなりません」

彼女は小さく嗤ったようだった。

「それ相応の待遇ならば、もう受けているではありませんか。^{ヌーガ}地獄界からこの世に生を受けたわたくしですもの。痛み入るばかりの実に丁重な待遇ですわ」

「……」

彼女らしくもない^{しんらっ}辛辣さに、アルカイオスは息を呑んだ。

「もしや……怒っていらっしゃるのですか？」

「さあ……それはあなた御自身がよく解っていらっしゃるのではないのですか？」

アルカイオスは確信した。

——姫はお怒りだ。

やはり、己のしていることは出過ぎたことなのだろうか……。

「姫は、あの時、忘れよと仰いましたね。忘れぬどころか、こうしてやってきてしまったことはお詫び

致します。しかし、このような不正が罷り通っているなど、あつてはならぬことです。しかも、総大主教猊下の御管掌下でなど」

よもや、正義の体現者たるべき総大主教が、不正なことをしているとは思えない。思いたくない。

王女に仕える者たちの、王女に対する粗略な待遇は、恐れ故なのではないかと思う。侍女頭の話によると、総大主教は一度もザーレ要塞を訪れたことは無いというから、もしかしたら、総大主教はこういった現状を知らぬのかも知れぬ。幾度か手紙を出してみたが、認識に多少のずれがあるように感じた。そのうち直接話をせねばならぬと、アルカイオスは思っていた。

「あなたは不正を正すとおっしゃる。ですが……」

——あなたに何ができるとおっしゃるのですか？

ぐさり、と刺さった。

痛いところに。

深く。

「……」

「少しばかり食事の内容を改善することが、少しばかり住み心地をよくすることが、あなたのおっしゃる『不正を正す』ことなんですか？ あなたはそれ

で不正を正した気になっていらっしゃるのですか？
地獄界に墮ちぬための、ささやかな点数稼ぎという
わけなのでしょうか？ ……いえ、あなたはイス
ターリスの末裔でいらっしゃるから、どんな悪事を
犯そうと、冥界の『勇者の館』行きが決まってい
らっしゃるのでしたかしら」

「……」

「何故今更、こんなことをなさるんです？ あなた
は、ここデルギリアの次期領主でいらっしゃる。わ
たくしがこんなところに幽閉されていることは、
ずっと前から御存じだったんでしょ？」

「……」

何も云い返せぬ。

そうだ。己は、彼女と出会う以前から、彼女がこ
んなところに幽閉されていることを知っていた。し
かし、まさか、王女が受くるべき待遇を受けていな
かったとは知らなかった——いや、これは益体も無
い言い訳に過ぎぬ。追追、己が治めるであろう領地
で、「知らなかった」は通用せぬ。

「……申し訳ございません」

「……」

「何ができるのかと姫は問われましたが……憚り乍
ら、私自身も判りませぬ。私もそれを知りたい。姫
は私の生命の恩人です。私にできることなら、なん

「あれ、して差し上げたいと思っております」

「では……わたくしをここから連れ出して下さる？」

アルカイオスは一瞬目を見開き、息苦しそうに声を押し出した。

「それは……申し訳ありませんが……できませぬ」

——貴女をここから連れ去ってでも御恩に報いる。

などとは、あの時、よく云えたものだと思う。彼女が彼の^かリュフィーナ王女であるとは知らなかったとはいえ。

恥も外聞も無く、彼女を連れ去ることができたらどんなによいだろうと思う。

しかし、己は^イスター^リヘー^レイの末裔の宗家の継嗣なのだ。英雄たちの時代より連綿と、父祖の血と汗で作られてきた、「セウエルス家」を背負う者なのだ。その名を汚すことは、父祖の死を無駄にすることは、到底できるはずもなかった。それは、この身が滅びるよりも遙かに恐ろしいことであると、アルカイオスは感じていた。

リュフィーナはわずかに肩を^{ふる}顫わせ、くすくすと^{わら}晒った。

「ごめんなさい……冗談ですわ。あなたの立場も、わたくし自身の立場も、重重承知しております。わ

たくしはここで一生、生殺し^{なま}にされる運命、どうして
たって救われぬ身なのです」

抑揚の無い口調である。

アルカイオスは居たたまれぬ気持ちになり、俯いた。足許を這う煙の間に、木屑と埃にまみれた木床が見える。少し、煙が目に滲みる。

——やはり、私には何もできぬのか……？

苛立ちが湧いてくる。

「あなたがわたくしにできることといたら、精神、慰めることくらいのものですわ」

「慰める……」

そんなことができるのだろうか。慰めの言葉ひとつ、浮かばぬというのに。

「……後ろを向いて下さいますか？」

「？ ……御意」

云われるままに後ろを向くと、背後から、リュフィーナの居る辺りから、衣擦れの如き音が聞こえてきた。

——なんだ……？

どくん……と、アルカイオスの胸の鼓動が高くなった。

——何を、しているんだ……？

どくどくどく……と、アルカイオスの胸の鼓動が速くなった。

不安を振り払うように、アルカイオスは大きく息を吸い込んだ。

途端、ぐらりと視界が揺れた。慌てて踏鞴^{たたら}を踏んだが、己の体が傾^{かし}いだわけではないようだった。すぐさま視界は元に戻った。

——眩暈？

ぱちぱちと幾度か目を瞬^{しばた}くと、背中に温かく柔らかかなものを押しつけられた。記憶にある、温かさと柔らかさであった。

「……っ!!」

跳び上がりそうになると、両脇の間から白く細い両腕が伸びてきて、アルカイオスの胸にしがみついた。

「……」

頭の中は真っ白であった。

硬直するアルカイオスに、リュフィーナはさらにぎゅっとしがみつき、そして——

かすれるような声で、ささやいた。

「抱いて、ください」

アルカイオスは息を呑んだ。

胸に回された両手が、緊^{きつ}くしがみつく両手が、アルカイオスの頸をも絞めているようであった。息苦

しさに、アルカイオスは喘ぐように呼吸した。

依然として頭の中は真っ白であったが、なんとかそこに「抱いて、ください」と書き込む。すると、すぐさま神託が下った。

「それは……なりませぬ。神がお許しになりませぬ。そういうことは、愛し合っている男女がすることであって……」

「ひどいことを、おっしゃるんですね。あなたは、わたくしを愛していらっしゃらないのですか？」

「それは……」

アルカイオスは再び、真っ白な頭の中にその言葉を書き込み始めたが、書き終わらぬうちに、

「わたくしはあなたを愛しているのに」

その言葉で、書きかけの言葉が吹き飛んだ。

どくどくどく……

己自身の高く速い鼓動だけが、頭の中で響く。

アルカイオスは幾度も深呼吸を繰り返し、思考を蘇らせようとした。

——抱くことで、慰めになるのですか？

という言葉が湧いてきて、口を衝いて出そうになった。慌てて呑み込んだ。あまりにも無粋である。

「……ならばなおさら、抱くわけにはゆきませぬ」

「怖いのですか？」

「……え？」

「呪われたこの体を抱くのが、怖いのですか？」

「……」

しがみつくりュフィーナの体から、温かさに加えてふる顫えが伝わってくる。アルカイオスは、恐る恐る、リュフィーナの小さく繊細な手に、己の大きく武骨な手を重ねた。暗くてよくは見えぬが、あの時の傷は治ったのだろうか。

——怖いのですか？

その言葉に秘められた想いに、息苦しくなる。遣る瀬無くなる。

彼女は生まれた時より、恐れられ疎まれてきたに違いない。

あの時——初めて顔を合わせたあの時、己は、しがみつく彼女の手足を振り払って、彼女から逃げ出した。

その時の彼女の顔、絶望に満ちた顔は、

——ああ、またか。

——この人もか。

と、云っていたのではなかったのか？

今になって、そう思う。

アルカイオスは、重ねた手に力を籠めた。

「怖くはございませぬが……」

ぐらりと視界が揺れた。

「子が、できたら……」

ぐるぐると視界が回る。

堪らず、アルカイオスは目を閉じ、^{ひざまず}跪いた。

「いかがされました？」

声が遠くに聞こえる。

「何やら……眩暈が……」

「目をお開け下さい。わたくしが、お判りになりますか？」

ゆっくりと目を開けると、深奥に輝きを秘めた緑の瞳が、真っ先に飛び込んできた。白く端正な顔と、春の陽光を集めたが如き金髪。あの時と同じように、眼前に、美しいあの少女の顔があった。いつの間にやら己は仰向けに倒れ、顔を覗き込まれている。

「姫……」

と、口を開いて閉じかけた瞬間、口を塞がれた。温かく柔らかな少女の唇で。

「んっ……」

アルカイオスは横を向いて逃げようとした――が、できなかった。舌が差し入れられたのである。拒まれることを恐れるように、そろそろと、^{ふる}顫えながら。そしてその動きは、あまりにも稚拙であった

が、あまりにも必死でもあった。求め得ぬ、何かを
求めるように。

愛しさが溢れるように込み上がってきて、アルカ
イオスは少女を優しく受け容れていた。

——まずい……

熱く深く口づけを交わしながら、とろけていく意
識の奥深くでそう思った。

——口を合わせるだけなら……

とも思ったが、知らず、少女の裸身を引き寄せ
て、なめらかな肌に指を滑らせていた。

——いかん……待て……それ以上は……

抱くわけにはいかなかった。

一線を越えてしまったら……子ができてしまっ
たら……

どうなるのか？

任務に対する責任、男としての責任——そういっ
たものもあるが、それ以上に……

彼女自身がどうなってしまうのか？

——それがどれだけお辛いであろうことか、お解
りですか？

誰だったかの声。

——私は信じておるぞ、クラティスの子よ。

総大主教の声。

しかし、少女に触れるごとに、少女の切なさを知

るごとに、制止の声は遠^{とおざか}離^りっていった。

第九章 祭りの後

人の気配を感じて目覚めると、すぐ近くにキュロスの顔があった。

「——っ!!」

思わず驚きの声をあげかけたところに、冷水を浴びせられた。開けた口から、鼻から、水が奥深くまで入り込み、思い切り^む噎せた。

「お目が覚められましたかな？」

涙目になって噎せているところに、浴びせられた水よりも冷たい、キュロスの声が降ってくる。

「……っ……なに……を……するっ！」

^{ようよう}漸漸声を出すと、

「^{やかた}領主館にいらっしゃらぬからといって、羽目を外しすぎるのは感心ませぬな。こんな薪小屋で、隠れるように」

ぎくり、とした。

昨夜——

彼女の肌の熱さ、

甘く切ない^な啼き声、

を思い出し、アルカイオスは身体が熱くなるのを感じた。

が、その意味するところを^{さと}覚って、急転、青冷め、しとどに冷や汗を流した。

「いや……あれは……」

ぱくぱくと口を動かすが、空振るように言葉が出て来ない。

「……責任は、とる」

「ならば、さっさと着替えて下さい。もうすでに、ヘルマデイス要塞からの討伐隊が到着しておるのです。朝食は抜いて下さいよ」

「……？ ……いや、正式に、姫を妻にお迎えしてだな……」

キュロスは、呆れたように深く嘆息した。

「まだ寝惚けていらっしゃるのですか？ それとも、まだ酔いが抜けていらっしゃらないのですか？ いずれにしろ、祭りはもう終わったのですぞ」

アルカイオスは、顔に貼り付いている、濡れた前髪を掻き上げ、キュロスを見上げた。

「もう充分、目は覚めておるし、酔ってもおらぬ。そもそも、酔うほど飲んでおらぬ」

キュロスの目が、^{けんのん}剣呑さを帯びた。

「『酔うほど飲んでおらぬ』ですと？ ——では、これらはいったいなんなのですか？」

と、キュロスが示した辺りを見ると、空の^{さかつぼ}酒壺が三つ、転がっていた。

アルカイオスは啞然とした。

こんなものは、まったく憶えが無い。

「……知らぬ」

酔うとはそういうことだとでも云うように、キュロスは適当に頷いた。

「まあ、よいです。それよりも、急いで下さい」

「……ああ」

訳が解らぬままに、アルカイオスはのろのろと立ち上がった。途端、頭痛と眩暈に襲われて^{よろ}蹠めき、キュロスに支えられた。

——これは……二日酔い、なのか？

なんとなく疑問を感じるものの、状況的にはそれが当て嵌まる。

そういえば、今まで気づかなかったが、辺りが酒臭い。デルギリア特産の^{りんご}林檎から作られた、蒸溜酒の匂いがする。

強い酒である。混酒器を使って水で割って飲むのが普通であるが、アルカイオスはそのまま飲むのを好んでいた。三壺も飲んだのなら、記憶が飛ぶのも当たり前だろう。

——ならば、あれは夢だったのか？

己の衣服を見れば、先程浴びせられた水で濡れているところがあるものの、乱れたところはどこにも無い。昨日の服のままである。

「……そうか、夢、だったのか」

そうと判ると、安堵と笑いが込み上げてきた。

しかし、だからといって、罪悪感が消えるわけではなかった。

——私は姫に対して、あんな慾望を持っていたのか……？

主従であるはずなのに。

＊

最後に、名残り惜しむように、眠りこけるアルカイオスの唇を味わって、少女は薪小屋を後にした。

外に出ると、西に傾いた月の光が、少女の姿を^{あら}露わにした。

乱れた金の垂髪、朱が差した白い肌、未だ潤んでいる充血した青い目。無表情なその顔は、カトリナのものに相違なかった。

カトリナは幽鬼の如く、よろよろふらふらとしながら夜のザーレ要塞を歩いた。

要塞内に渦巻く冷気が、体の火照りを吹き飛ばしていく。熱に浮かされた頭が、次第にはっきりしてくる。

とはいえ、はっきりしたところで、めちゃくちゃに荒らされた部屋の中を見せられているようなもので、どこから何から手をつけてよいのやら皆目判らず、ただ呆然と立ち尽くすより外無いといった状態

であった。しかも、部屋荒らしに己自身も加担しているとなると、何がなんだか、何をやっているのか、己自身のことでありながらも訳が解らず、頭がおかしくなりそうだった。

ともかく――

――アルカイオス様に抱かれた。

これだけは確かだった。

体が^{おほ}感覚えている。

五感ですべてを感じた。

感触、匂い、味、声、そして未だかつて見たことの無い、愛しむようにこちらを見つめる顔。

思い出すだけで、身体が熱くなる。

――愛された。

しかし、愛されたのはこの肉体だけであった。

低く響きのよいあの声で、「姫」と、あろうことが「リュフィーナ」とも――忌々しいあの名前を、熱い吐息と絡めてささやかれた。

その度に、甘やかな夢は碎け散り、苦い現実に戻された。

この^{ひと}男が愛しているのは、「カトリナ」ではなく「リュフィーナ」なのだ。

と。

しかし、それならば、この身体の熱さはいったいなんなのか？ この男^{ひと}に愛されているこの体は、いったいなんなのか？ この体は「カトリナ」ではないのか？

心と体が引き裂かれる痛みに、呻^{うめ}いた。

しかし、そんな痛みも心も体も、すぐさま快樂の大波に呑み込まれて、掠^{さら}われてしまうのだった。その快樂の前では、この体の名前が、「カトリナ」であるのか「リュフィーナ」であるのかなど、どうでもよくなった。

いや、その快樂こそが、紛れもない現実なのではないのか。ふたりの体がひとつに繋がっているというのに、心は繋がっていないなんて、そんなことがあるはずがない。あってはならない。

そう思って、カトリナは、より深くより激しく、アルカイオスを感じようとした。求め得ぬ心を求めようとした。この身に与えられる快樂こそが、確かな愛^{あかし}の證であるとでもいうように。

しかし、こうしてアルカイオスから離れて、この身から快樂が去ってしまえば、なんとも虚しいものだった。途端に現実を突きつけられる。

アルカイオスとリュフィーナ——ふたりはすでに出会っていたらしい。

あの男^{ひと}は云っていた。

「生命の恩人」

と。

あの化け物は、あの男^{ひと}の生命の恩人であるらしい。

——何それ？

あの男^{ひと}は、あの化け物のために、ザーレ要塞^{こんなところ}にやってきたのだという。

——何それ？

「抱いて」と云ったらあの男^{ひと}は、この身をあの化け物だと思って抱いた。

——何それ？

我知らず、体が顫^{ふる}えた。言い知れぬ感情が湧き起こり、体内を循^{めぐ}って荒れ狂い、体外へと溢れ出ようとしていた。

そして、寝台の真ん中で、何食わぬ顔ですやすやと眠っている黒猫を見た瞬間、愛用の瀟洒^{しょうしゃ}な椅子を掴んでいた。

ミュウ……

その声で我に返った。

薄闇の中に、金の双眸^{そうぼう}が光っている。カトリナの気配に気づいた黒猫が、目覚めたのだ。黒猫は、椅

子を振り上げているカトリナを、小首を傾げて不思議そうに見ている。

「あ……」

カトリナは椅子を振り上げた恰好のまま、がたがたと顫え出した。

——わたしはいったい、何を……!?

黒猫に椅子を投げつけて、鬱憤^{うっぷん}を霽^はらそうとした——そうと気づいて、自己嫌悪した。

^{あいびょう}愛猫であるのに。

この要塞で、たったひとつ、己の傍に居てくれる生き物であるのに。

黒猫は寝台から飛び降り、とてとてとやってきて、カトリナの足に擦り寄って喉を鳴らした。そのぬくもりを感じた瞬間、カトリナの目から堰^{せき}を切ったように涙が溢れ出していた。

カトリナは椅子を下ろし、黒猫を抱き上げた。そしてそのぬくもりを感じつつ、呻くように泣いた。

抱かれなければよかった、と思った。

この身を以て、アルカイオスのリュフィーナに対する情熱を思い知るだけでしかなかった。

抱かれなければ、アルカイオスのぬくもりを知ることにはなかった。あのぬくもりを知ることがなければ、愛されていない寒さはこんなにひどいものではなかったに違いない。

カトリナは黒猫を抱いたまま、戸棚から香炉と小さな木箱を取り出した。木箱の中から干乾ひからびた草のようなものを取り出し、香炉に入れ、火を着けた。程も無く白い煙が立ち上ってきて、カトリナはそれを深く吸い込み、目いっぱい吸い込んだところで、体内に行き渡らせるように息を止めた。

薪小屋に充満していたものと同じもので、ムラッドという不思議な草を焚いたものである。その煙を体内に取り込めば、夢の世界へ連れて行ってもらえる。トゥライのもので、あちらでは、何らかの儀式に使われているという。

ここ数ヶ月、カトリナはこれを常用していた。最近は、耐性がついてしまったのか、少しくらい吸っただけでは、なかなか夢の世界には行けなくなった。薪小屋で、アルカイオスはふらふらになっていたが、カトリナにはさほどでもなかったのである。

煙を吸ったアルカイオスは、カトリナの顔を見て、

「姫」

と云っていた。

「姫」「リュフィーナ」と何度も呼ばれるうちに、遂に堪えきれなくなって、

「違う！ わたしはカトリナ。姫でも、リュフィーナでも、侍女頭でもなく、カトリナなんです、アル

カイオス様！ わたしを見て！」

と叫んだが、まったく聴き入れてもらえなかった。

——どうして、わたしではないんですか？

——どうして、あの化け物なんですか？

——アルカイオス様！

いや、アルカイオスが悪いのではない。

あの化け物だ。

あの化け物が、アルカイオスに呪いをかけて、その心を^{とりこ}虜にしたに違いない。そうに決まっている。そうでなければ、この己がアルカイオスに愛されぬはずがない。

愛されぬはずが……

「あ……」

漸く、煙の効き目が出てきた。

カトリナは黒猫を胸に抱いて寝台に寝そべり、そして夢幻の奥深くに落ちていった。

＊

「何をのんびりとしていらっしゃるのですか。早く着替えて下さいと申したでしように」

部屋の扉が開かれて、キュロスの呆れ顔が現れた。

「む……？」

アルカイオスは、濡れそぼったまま、椅子に腰掛けてぼうっとしていた。

いや、いつもならば、こうしていると、いつの間にか着替えが完了しているはずで……。

周りを見回すと、居るはずの人間が居ない。

——今朝は、侍女頭殿は来ないのかな？

アルカイオスは首を傾げつつ、服を脱ぎ始めた。

第十章 襲撃

カトリナはアルカイオスの体を清めながら、^{いくささきず}戦傷のある逞しいその背中を眺めた。

あれから一週間。

夢から覚めた後に気づかれぬよう、そこに附けた口づけの痕は、もう残っていない。アルカイオスがカトリナに附けたものも同じだった。

この体に抱かれたなど、夢だったように思える。いや、今となっては、夢だったのかも知れぬ。カトリナがアルカイオスに抱かれたことを知っている者は、たったひとり、カトリナ自身しか居ないのだ。

その記憶が現実のものであるかなど、己自身ですら確めようもない。アルカイオス自身に云ったところで信じやしないだろう。

——でも、もし……

もし、たったひとりでなかったら。

^{イスターリス}
「戦神の加護のあらんことを」

カトリナは仇討ちに出掛けるアルカイオスらを見送り、総大主教からの使いが待っている部屋へと向かった。

＊

寂とした山中に、三十人の響^{どよ}動^{こだま}めきが弔した。

「分散するな！ 固まれ！」

アルカイオスの大声が走る。

茂みの中から、突如三頭のイゴールが襲ってきたのである。三頭はひと塊^{かたまり}となって突進してき、兵たちを薙ぎ倒し、血飛沫^{ちしぶき}を散らしながら、疾風の如く隊の懐を駆け抜けて、今まさに取って返してくるところであった。

「射^てえ！」

矢が放たれた。が、イゴールらは、木々を盾にして難なく避ける。

自然の防備多い、林の中である。避けられるであろうことは承知の上、足留め、分散させることが目的であった。

しかし、未だ隊列の整わぬ討伐隊の射撃は疎^{まば}らで、分散させることはできたものの、足留めすることはできなかった。イゴールは三手に分かれて、三方から襲いかかってきた。討伐隊は、死傷者を内にしてひとつに固まりつつ槍の壁で応戦し、きちんと体勢を整えたところで、それぞれのイゴールを囲んで三手に分かれた。

「逃がしてもよい！ 深追いはするな！」

後方にあるアルカイオスから、次々と指示が飛ぶ。

——変わられた。

キュロスは前方へ注意を向けつつ、アルカイオスをちらりと窺い、この一年、幾度と無く思ったことを思った。以前のアルカイオスならば、我先に飛び出しているはずである。

アルカイオスは槍を扱^{しご}きつつ、血の滾^{たぎ}りを抑え込んでいた。いつもの如く、背後に、もはやこの世に存在するはずの無い、青く冷徹な目を感じる。それがアルカイオスの猪突を押し留めているのである。

——まずいな。

死傷者を見てそう思った。現在、死者二人、重傷者八人である。呻^{うめ}き声をあげている者の中には、イゴールの毒牙にかかった者も居るようで、比較的軽傷の者から応急手当てを受けている。

「討ち取ったり！」

続けて二頭討ち取った、その時——

「あちらより、新手のイゴールが二頭!!」

木々を避け、茂みを飛び越えて、二頭のイゴールがやってくる。兵たちに怯^{ひる}みが走った。

アルカイオスから思わず舌打ちが漏れた。

——あの時と同じだ。

「若っ！」

槍に附いた血と肉片を払いつつ、キュロスが駆けつけてきた。

ふたりは目を交わし、互いの目に同じものを見て、頷き合った。

「お前は死傷者らと先に行け。私は^{しんがり}殿後を務める」

キュロスは異議を申し立てるように口を開きかけたが、

「聴かぬ！ さっさと行け！」

アルカイオスの気迫に^お圧され、また、話し合っている暇なぞ無いと考え、瞬時に折れて、兵たちに退却の指示を出した。

アルカイオスは、無傷軽傷の兵十二人をひとつところに集めて、退きながら応戦する構えを取らせた。荷駄用の馬は三頭連れてきてはいたが、全員徒^か歩であった。人間とイゴールでは足の速さが違いすぎる。討ち斃さずとも、追い散らさねば、到底逃げ切れるものではない。

「誘いに乗るな！ しっかりと隊列を固めろ！」

最初に襲ってきた三頭の中の生き残り、新手の二頭が合流し、一斉に襲いかかってきた。

——む？

新手の一頭に見覚えがある。

右眼左眼と比べて濁りのある第三の赤眼、三分の一ほど^か缺けた左耳、拳大の毛抜けのある左脇腹、そしてその^{たたず}佇まい。

——間違いない。

アルカイオスは確信した。

込み上がってきた怒りと歓びを声に乗せて、

「いざ、討たん！ あれなるが、我らが豪傑ステファノス・セウエルスの仇!!」

という言葉が発しかけて呑み込んだ。今はそんな場合ではない。仇討ちよりも、兵を生かして帰すことが重要である。

その時丁度、^{くだん}件のイゴールがアルカイオスの居るあたりに襲いかかってきた。

アルカイオスは嬉嬉として槍を^{しご}扱いた。

——よくぞ来た！ 我が父祖の守り手、^{ふんぬ}忿怒せるイスターリスよ！ 我に力を！

迎撃に^{かこ}託つけて討たん^とと槍を突き出す——が、あと一息の間合いで、イゴールは後退した。

——腑抜けが！

アルカイオスは一步踏み出しかけた——が、すんでのところで思い^{とど}止まった。ここで一步出れば、隊列を崩してしまうことになる。背中に突き刺さる、在らざる視線がそう云っている。

——くそ！

アルカイオスは^{はぎし}齒軋りして、身内に煮え^{たぎ}滾り、今にも噴き出さんとする熱を必死に抑え込んだ。

——何故、今なのか!?

一年である。

仇討ちを始めて一年、祭りの時以外、ほとんど毎日出撃して、一度たりとも仇と出遭^{でくわ}すことはなかった。空手で帰ってくるのがほとんどで、イゴールと遭遇するようなことがあっても、死者が出るようなことは数回しかなく、それとても、今回のような退却を強いられるようなことにはならなかった。

——^デ運命^ユの^ー三^ノ女神^イよ！　これはどういうめぐりあわせなのですか!!

そうこうしているうちに、一頭が討ち取られた。仇のイゴールではなかったが、それを見た仇のイゴールともう一頭は、^ぶ歩が悪くなったと思ったのか、身を翻して逃げ出してしまった。

「イスターリスよ、感謝^{たてまつ}し奉る！」

兵たちの間に歓声があがる。

それを聞きつつ、アルカイオスはひとり、仇の、黒い^{すじ}糸がふたつ入った茶褐色のその背中を、口惜しそうに睥んで見送った。

——次こそ……次こそだ！

己に言い聞かせ、どうにか無念を呑み込むと、アルカイオスは兵たちを見回した。無事だったどの兵の顔にも、戦闘の昂奮に混じって、疲れの色が見えた。

「……よし、引き揚げるぞ」

呟くように告げた。兵たちの間に安堵が拡がっ

た。

死者を運び、傷付いた者を助け、その上後方を警戒しながらも、ザーレ要塞への道をできる限り急いだ。また襲われては堪らぬ。

そうして足速^{あしばや}に歩を進めた所為か、思いの外早く、崩れかけの要塞の姿が見えてきた。

この道で要塞に帰還することは初めてではない。むしろ、数え切れぬほどである。

にも関わらず、アルカイオスは今回に限って違和感を感じた。

——なんだ……？

何かがおかしい——と思う間に、道の先から馬が駆けてきた。

「若——っ!!」

キュロスの声である。切迫している。空馬^{からうま}を一頭引き連れてやってくる。

「一大事!! ザーレ要塞にトゥライ来襲!!」

＊

怪我の功名というべきなのか。

退却するようなことにならなければ、トゥライの襲撃には気づかなかっただろう。いつもならば、まだ山中を徘徊している頃合いであった。

アルカイオスが馬を駆ってやってくると、ザーレ要塞はその懐に、トゥライ人の侵入を許してしまっているところであった。低い胸壁を、トゥライ人が乗り越えている。

修復を施したといっても、そもそもが廃棄要塞なのである。周囲を囲む壕^{ほり}は、要塞を破壊した折の瓦礫で埋まっており、防壁たる胸壁は、攀^よじ登れなくもない高さにまで破壊されている。

イゴールならばこれでもまだよかろうが、亜人間のジャグルや巨人のゴロドなどの悪の種族、人間には通用しないだろう。しかも、それでたった六名の兵士で衛るなど、あまりにも無茶な話であった。

——襲われたらひとたまりもない。

ザーレ要塞にやってきた日、アルカイオスは一目見てそう思った。

この上さらに補修・改修したところでどうなるものでもなかった。どう手を加えても蘇りようのないほどに、要塞としての機能はすでに完璧に死んでいた。

——どこか安全な場所に姫をお移しするより外無い。

その旨、総大主教と父クラティスに申し出てみた。が、案の定却下された。

それでもなおアルカイオスは食い下がり、^{らち}埒の開

かない遣り取りの末、ならば実行に移してしまうまで、と、王女をヘルマデイス要塞に移すことを勝手に決めた。

そうして今漸く、その手筈が整わんとしているところであったのだ。

——もっと早くそうしていれば……！

悔やまれてならない。

五人の兵と、彼らから手当てを受けている七人の負傷兵が、キュロスに命ぜられた通り、茂みの中で待機していた。足りぬ二人は、ヘルマデイス要塞に向かったという。応援の手配に加えて、毒を受けた者の治療もあった。解毒は迅速さが肝要である。

待機中の兵たちによると、トゥライの一団は十五人ほどであるという。対して、こちらで戦力となる者は七人である。

これで突っ込むのは少少心許無いが、応援のヘルマデイス要塞の兵、後からやってくる徒歩の兵はまだ来ぬであろうし、その間、トゥライの横暴を指を啜くわえて見ているわけにはゆかなかった。

それに、なんといっても王女が心配である。

「戦える者は随ついて来い」

とりあえず、胸壁の外で、内に入った者たちの足と思しき空馬からうまを伴って、所在無げに待機している者たちを始末しよう。七人残っている。これならば互

角である。いや、あちらはこちらに気づいていないから、不意打ちのできるこちらは遙かに有利である。馬も潰す。それで内に居る者たちは逃げられなくなる。

アルカイオスらは、トゥライ人に気づかれぬよう、木々と茂みに隠れながら、トゥライ人まで百歩の距離に移動した。

「よく狙え。ひとりがひとり殺せば、一瞬で終わるぞ。――ウードラ殺しの大いなる神よ、我らに力を……」

狩猟神ダルフォースに祈りを^{ささ}奉げながら、茂みの中から弓を構える。

「願わくば、我らが狙い、外させ^{たも}給うな！」

その言葉で一斉に矢を放つ。

ひゅうんと空気を切り裂く軽い音の後に、どっと地に倒れ臥す重い音が続いた。初撃で戦闘不能になったのは、二人といったところであった。

伏兵に気づいたトゥライ人たちは、次々と飛来する矢の中で、トゥライ語で何やら^{わめ}喚きながら、ある者は要塞内へ緊急を伝え、ある者は刀と盾で矢を払い、ある者は矢に中たって倒れ臥し、ある者は馬に^の騎ってこちらに向かってきた。

「エレーサ!!」

^{とき}鬨の声をあげて、アルカイオスとキュロスは騎馬

で踊り出た。徒歩^{かち}の兵はその後に続く。

刀を振り翳^{かざ}したトゥライの騎兵が、雄叫^{おたけ}びをあげてやってくる。アルカイオスは槍を突き出す。喉に一撃。敵の顔が間抜けた表情で凝り固まる。血飛沫をあげながら視界から消える。

それが地に落ちる音を聞く前に、左で刃の燦^{きら}めきを見た。無意識に盾を持った左手が動いた。刃を受け止めると同時に弾き飛ばし、凧型の盾の角で顔を殴打する。鼻と頬肉がごっそりと削^そげ、白い骨と歯列が露わになった。盾の角に血と肉片がこびり付き、肉片の端で皮がひらひらと揺れる。アルカイオスはくるりと馬を返し、落馬したその敵の喉に、止^{とど}めの一撃を見舞った。

「ぬるいっ！」

槍を引き抜きながら吐き捨てる。

仇のイゴールと遭遇したために湧き起こり、已^やむ無く逃したために行き場を失った熱が、ここぞとばかりに迸^{ほとばし}っていたが、それを受け止めてくれるべき敵に缺^かいていた。嬉^き嬉^きとして手を合わせたというのに、なんの歯応えもなく、あっという間に反応が無くなるのである。血は滾^{たぎ}るばかりであった。

槍に附いた血肉を払いつつ、次の獲物を求めんと周囲を見回すと、すぐ傍に、敵を討ち斃したばかりで、少し弛^{ゆる}みの見える味方が居る——と思ったら、

その^{くび}頸にトゥライの矢が突き立った。上から、ザーレ要塞からである。

頭上に盾を^{かざ}翳しつつ振り返ると、胸壁の上に数人の影があり、その内のひとつが日輪を背にして、降ってくるかの如くアルカイオスに襲いかかってきた。

アルカイオスはその影の中心に槍を突き出した。が、槍は刀を持つ腕と脇の間にすっと入り、挟まれ、不意に蹴りが飛んできた。

——くらう！

と全身に緊張が走った瞬間、

「ぐっ!!」

視界が白く^{ひらめ}閃いた。

顔面に、見事に入っていた。痛みと衝撃が意識を引き離しにかかる。

そのことにアルカイオスは妙な心地良さを^{おぼ}感覚えた。戦闘の昂奮が身内を循っている所為であろうか。

体勢を崩して馬上から転げ落ちたが、そのまま受け身を取って、^{リ オ プ}鎖革鎧を鳴らしつつ地面を転がった。

とにかく起き上がる。考えるよりも速く。立ち合いでは倒れることは死を意味する。痛みや口内の血溜まりを意識している余裕は無い。

案の定、立ち上がるよりも早く、己が頸を突かんとする槍先の燦めきが目に入った。咄嗟に腕で柄を払って軌道を逸らす。穂先が耳を半分裂いて、ずぶりと地面に刺さった。その音が遠離れた死の呻きに聞こえて、背筋が凍った。

が、遠離れたのも束の間、死はまたすぐさま接近してきた。今度は刀である。がきりと盾で受けた。次の刹那、思い切り足を振り上げて相手を蹴りつけた。敵が呻いて後退する。その間に、アルカイオスは反対側に素速く転がって立ち上がった。

鼻血を拭う間も無く、口内の血を吐き捨てる間も無く、だらだらと鼻から口から血を溢れさせたまま、すぐさま抜刀し、構えをとって敵を観た。

一瞬、見蕩れた。

美男子

であった。

——刀身のようなだ。

と思った。

それも、古今随一の名匠の手による、妖刀である。

頭に巻かれた、緑地に白い三角柄入りの布から、黒く長い総髪が垂れ、顔にかかる前髪の間から、鋭い光を放つ黒い瞳が見え隠れしている。細身でありながらも強靱さが窺える肉体は、触れる者すべてを

容赦無く傷付けるような、危険な気を纏^{まと}っていた。

知らず、笑みが浮かびそうになった。

——待っていた。貴様のような敵を。

「でえあっ!!」

口から血を撒き散らして、掛け声ひとつ、アルカイオスは喉を狙って突きを放った。男は身を捌^{さば}きながら刀で受け流した。アルカイオスは続け様に斬撃を見舞ったが、それも受け流された。

こちらはまだ落馬に至った衝撃から回復していないとはいえ、充分な膂^{りよりよく}力を籠めた攻撃である。それらが悉^{ことごと}く受け流された。

何合か打ち合ったところで、アルカイオスは身を退き、再び構えをとった。

目の前の相手が、ただ者ではないことを理解したのである。

——筋がよい。

そう思う。

思ったところで、己の傲慢^{ごうまん}さに気づいて恥じた。

目の前の男は己とそう変わらぬ年齢に観える。そんな相手を捕^{つか}まえて、筋がよいのどうのと批評できる程、まだ己の腕は高くはあるまい。

だが男の剣技が確かなものであることは、疑うべくもなかった。

野盗のものとは思われぬ。無論、普段手合わせし

ている家中の戦士たちのものとも違う。さりとして己が知るいずれの流儀にも当て嵌まらぬ。だがそこには確かな理^{ことわり}が感じられる。

異質な剣であった。

男の口元に、わずかな笑みが広がった。

「貴族の剣だな」

多少訛^{なま}りがあるものの、ローゼンディア語でそう呟いた。

「俺は、ナヴィド族長ビザンが末子、ナガン」

——おお。

名の^な告りを受けて、無視するわけにはゆかぬ。アルカイオスは盾をわずかに引き、ナガンの目を見据えた。

「私は、イスターリスが末裔、セウエルス氏族宗主クラティスが長子、アルカイオス」

ナガンの顔に驚きが浮かんだ。よもや己の相手がこの地方の支配者、領主一族の者だとは思っていなかったと観える。

アルカイオスは、ナガンの名を噛み締めるように、胸の内で幾度か反芻した。恐らく、あちらもそうしている。互いの名を知ることによって、ふたりの間の空気が、濃密になった気がした。

不意に、ナガンの目に暗い光が宿った。

「……そうか。貴様か。我が兄が世話になったと聞

く。礼をせねばなるまい」

風が疾^{はし}った。

それは呻りをあげながらアルカイオスの脇を抜けた。

その後を追って瞬時に身を翻すと、同じく身を翻したナガンの姿があった。血が流れ出しているその右腿に、アルカイオスは一瞬前に繰り出した己が攻撃の跡を見た。

「皮一枚、か……」

ナガンが驚きを隠し切れぬ声で呟いた。

その言葉を怪訝^{けげん}に思った途端、アルカイオスは頸に走るわずかな痛み気づいた。その意味を理解して戦慄した。

——ほんの少しでもずれていたら……。

頸から勢いよく血を噴き出させている己を想像する。身体に顫^{ふる}えが走る。イスターリスに感謝を奉げずにはられない。

考えて、判断して、動いているわけではない。そんなことをしていたら間に合わない。千も万もの辛く厳しい鍛錬と、イスターリスへの揺るぎない信仰が、無意識に身体を動かして、己が身を救ったのである。

それにしても……

頸の皮一枚斬られたというのに、この昂揚感は

いったいなんなのか？

身内を循る血の熱さ、荒荒しく脈打つ鼓動に、アルカイオスは心地良さを感じていた。

ナガンを見れば、その顔に不敵な笑みが浮かんでいる。きっと己もそんな顔をしているに違いない。

ふたりは抑え切れぬ笑みを交わし、再び刃を合わせんとした。

その時――

「ナガ――ンッ!!」

野太い、大音声である。

辺り一帯に響き渡ったその声は、敵味方いずれの動きも、一時的なものとはいえ封殺する力を持っていた。

アルカイオスもナガンも例に漏れず、踏み出しかけた足を止めていた。声の方を振り返ってみると、五百歩ほど先の胸壁の角から向こうの林の中へと、五つ六つのトゥライの騎馬が駆けていく。

その中の、周りの人間よりも頭二つ分ほど抜きん出た男が、自然とアルカイオスの目に飛び込んできた。トゥライやローゼンディアではあまり見かけぬ、西方に蟠踞するヴァルゲン人の如き、目を睜るような巨漢である。魂消るような声を出したのは、

きっとあの巨漢なのだろう。

それは扱^{さてお}措き、その巨漢の鞍^{くらまえ}前にぐったりと横たわるものを見て、アルカイオスは驚愕した。

風に靡^{なび}く金の髪、露^{うなじ}わになった白い項、似つかわしくない身窄らしい衣服——あの少女、王女リュフィーナその人に違いなかった。

——しまった！

戦闘で熱くなった身体が、瞬時に凍りつく。心地良かったはずの汗が、冷や汗にとって替わる。

戦闘に現^{うつつ}を抜かして、王女のことなどすっかり頭の中から消え去っていた。

「続きはまたな」

不意に、馬の嘶^{いなな}きと共に、上方から声が降ってきた。

そちらを見遣ると、騎乗したナガンが馬を駆けさせたところであった。あの巨漢と王女が消えた方へと。

アルカイオスは舌打ちひとつ、その辺に彷徨^{うろっ}く馬を捕まえ、騎乗し、刀の平で馬の尻を叩いた。

「追え——っ!! 姫^{さら}が掠われた!!」

第十一章 謀略

カトリナは酒樽の陰に隠れて、身を縮こまらせて
ふる
顫えていた。

どうなったんだろう？

破壊、悲鳴、^{おたけ}雄叫び、^{けんげき}剣戟——そのような音が、
扉ひとつ隔てた向こうで、嵐の如く吹き荒れていた。
——先刻まで。

今はそれが夢か幻であったかのように、辺りは静
まりかえっている。

カトリナは恐る恐る、酒樽の向こう、食糧庫の出
入口へと到る上り階段附近を窺った。真っ暗で何も
見えやしないが、必死に気配を探った。

依然として、人がやってくる気配は感じられぬ。
あの嵐の最中であっててもそうであった。地下室の存
在に気づかなかったのかも知れぬ。教^てえ^てな^かっ^た
のだから無理もないが、ともかく己の身の安全は保
たれたようではあった。

カトリナは周囲にあるものを手探りしながら、階
段へ向かい、階段を上り、頭上にある、両開きの扉
の片方を押し上げようとした。

しかし、何か^のが載^っか^って^いる^のか、びくともし
ない。

——まさか……閉じ込められた？

そう思って一瞬戦慄し、もう片方の扉を思い切り力を入れて押した。すると何かを押し退けながら勢いよく開いた。

外の眩しさに思わず目を瞑ると、顔にぽたぽたと何かが滴った。

——水……？

いや違う。匂いがする。覚えのある匂いである。

ゆっくりと目を開き、明るさに馴れてくると、開かなかった片方の扉の端から、こちらを覗いている顔があった。

血管の浮いた白目を剥き、口から血と唾液を滴らせ、「何故あんたは生きてるの？」とでも云いたげな、怨めしそうな女の顔である。

「ひい——っ!!」

カトリナは腰を抜かして、その場に坐り込んだ。

がたがたと体が顫える。がちがちと歯の根が噛み合わない。

それなのに、この死に顔から目を逸^そらせない。逸らしたいのに逸らせない。

——わたしは悪くない。

わたしは悪くないわたしは悪くないわたしは悪くないわたしはわるくないわたしはわるくない……

死に顔が語りかけてくる無言の攻撃から、己が身を守る呪文であるかのように、ひたすらそう唱え

る。

——すべてはあの化け物の所為なのよ！

カトリナは、^{ほうほう} ^{てい} 這這の体で地下の食糧庫から脱出し、^{おぼつか} 覚束無い足取りで離れの塔に向かった。

ザーレ要塞内は、血臭と静寂に満ちていた。残虐非道で知られるトゥライ人である。要塞内の人間を皆殺しにしたのかも知れぬ。

隠れていてよかったと、カトリナは胸を撫で下ろした。協力者であるとはいえ、そんなことなど関係無しに、カトリナも殺されていたかも知れぬ。いや、殺されていたに違いない。あの男のことだ。

とはいえ、人を殺す必要などほとんど無いはずであった。王女がどこに居るか、要塞守備状況はどうなっているか、要塞内部の様子はどうなっているかなど、王女掠奪に必要なものはすべて教えたのだから、人知れず侵入して王女を^{さら} 掠うことは充分可能だったはずである。

それとも、ついでに何かを物色でもしていったのであろうか。もしかしたら、己の部屋は荒らされているのかも知れぬ。価値のあるものがある場所といたら、この要塞内ではあそこしかない。

とにもかくにも、なんということをしてくれたの

か。あの化け物を掠ってくれるだけでよかったのに。

屍体に遭遇する度に、カトリナは息を呑むような小さな悲鳴をあげ、身体をがくがくと顫わせた。トゥライ人の屍体はひとつもなかった。皆が皆、カトリナと同僚——つまりは、顔見知りであった。つい最前まで、動いていて、呼吸していて、カトリナと言葉を交わしたりもしていた——そんな屍体であった。

カトリナは、彼ら彼女らから無言の圧力を感じた。

——あんたがわたしたちを殺したのよ。

カトリナは堪らず、声に出して叫んだ。

「すべてはあの化け物の所為なのよ!!」

あの化け物が己をこんな境遇に陥れた。最愛の母を奪った。夫となるべき男ひとも奪った。そして己に罪を犯させた。こうして罪も無い同僚を結果的に殺すようなことをさせたのだ。

あの化け物は、そのようにして誰かの幸せをくらって、生き続ける存在なのだ。

——でも、もう大丈夫。

離れの塔の最上階——王女の部屋に辿り着いてみ

れば、そこは蛻^{もぬけ}の殻であった。

——化け物はもうここには居ない。

カトリナは高らかに笑った。

＊

その男と出遇ったのは、まったくの偶然からであった。

——アルカイオス様の妻になる。

そう決意して、辞職を勧める総大主教からの手紙を破いた時、まずはあの男にはっきりと言っておこうとカトリナは思った。

田舎の朴訥^{ぼくとつ}な青年——まさしくそんな男であった。いつの頃からか、月に一度、王都からザーレ要塞に物資を運んでくる、役人の中に紛れていた。気がつけば己の方をじっと見つめていて、目を合わせるとさっと俯き、嬉し恥ずかしといった様子で顔を^{あから}赧めるのが常であった。

泥臭い、冴えない男ではあったが、カトリナの女心を満足させてくれる、よい存在であった。己の魅力が男心を捕らえた——その^{しょうさ}證左である。悪い気はしなかった。むしろ嬉しかった。

しかし、今となっては、そんな己を^{いまいま}忌忌しく思

う。名門中の名門の貴族の妻になるべき己が、こんなところに^{よこ}寄越されている小役人如きに想いを寄せられて歡ぶなど、どうかしていたとしか思えぬ。あんな男にいくら想われようと、アルカイオスの妻になるための足しになるわけでもないというのに。

——けじめをつけなくては。

過去の愚かな己と^{けつべつ}訣別し、アルカイオスの妻に^{ふさ}相^わ応しい己になるのだ。

物資が運ばれてきたその日、カトリナは、要塞から少し離れた林の中、^{いにしえ}往古のイスターリスの石碑のあるところに、^{くだん}件の男を秘かに呼んだ。ふたりきりで居るところを見られでもしたら、どんな噂が流れてアルカイオスの耳に入るとも知れぬからである。

石碑の^{そば}傍で待っていると、男は歡びを隠しきれぬ様子でやってきた。カトリナからよい言葉が聞けると思って、勝手に期待しているのだろう。

——おめでたい男。

と、カトリナは心秘かに嗤った。

——わたし、貴族の娘なのよ。領主の令嬢なのよ。あなた如きに惚れるわけがないじゃないの。

男は、カトリナと顔を合わせると、頬を赧め、緊張に^{こわば}硬張った笑みを見せて、口を開いた。

「お待たせしたかなあ、カトリナさん」

男の第一声に、カトリナは我が耳を疑った。

この男は何を云っているのか。

お待たせしたかなあ、カトリナさん

なんて馴れ馴れしく凶凶しい物言いだろう。

アルカイオスですら、カトリナのことを「カトリナさん」などとは呼ばない。呼んでくれない。

「さほどでもありませんわ、お役人様」

「ならよかった」

男とアルカイオスに対する腹立ちに、カトリナは嫌味を籠めて云ったのだが、男には通じなかったようである。

「あ、そうそう、お役人様ではなく、テロンと呼んで欲しいな」

「……」

「……で、話って、何かな？」

期待に満ちた声である。男はカトリナの顔をまともに見れないのか、頬を赧めたまま、少し俯いている。

いちいち腹の立つ男だと、カトリナは心中苛ついた。

「実は、わたし、あなたがわたしにずっと想いを寄せていることに、気づいていました」

「あ、そうなんだ。嬉しいな」

男の声に、喜色が一層強まる。

「それで、いい加減、お返事をしておいた方がよいかと思って呼びましたんです。その方がお互いのためですから」

「……え？」

男は少し驚いたような声を出した。己が期待しているものとは違うのかも知れぬと思ったようである。

「……あ、それは申し訳ない」

男はぎごちない笑い声をあげた。厭な予感を打ち消すかのように。

「本来なら、俺から言い出すことだよね」

秋波を送っていたのは男の方である。

「いえ、恋する相手には、人は臆病になるものですから」

「そう云ってもらえると助かるなあ」

「わたしのことは諦めてもらえませんか？」

「……」

男の身体が、俯いたまま固まった。

「わたし、お慕いしている方がいるんです」

「……」

暫しの沈黙の後、男は徐ろに口を開いた。

「……俺のこと、嫌い、なのかな？」

溜息にも似た、力無く^{しほ}萎んだ声である。

「……というか、あなたのこと、よく知らないの
で」

なんてことは云わなければよかったと、カトリナは後悔した。その言葉に希望を見出したのか、男の声が少し力強さを取り戻したのである。

「それならさ……試しに、付き合っ^て、みない？
俺の他に慕っている男^{ひと}がいるっていてもさ、俺を振る必要はまだないんじゃないかなあ」

複数の相手と付き合い、その中から己に相^{ふさわ}応しい結婚相手を捜すということは、よくあることである。

無論、多情的に複数の相手と同時進行で恋愛を楽しむようなことは、社会的にも微妙な反応を招く行為ではある。それを心良く思わない人はローゼンディアにも大勢存在してはいる。とはいえ、一度に一人ずつ恋愛を重ねていくというのは、未婚の男女ならば至極当然のことである。

要するに個人の良識と道徳の範囲内、言い換えれば、恋の節度に則った範囲での自由恋愛は、ヴァリア教の庇護の元、完全に認められているのである。

多くの相手と付き合ってみて、慎重に結婚相手を選ぶということは、男女共に当然のこととして、社会的に認知されているのだ。

「いえ、その男^{ひと}性と結婚したいと思ってますから」

「……」

男の身体が再び固まった。

「……いや、でも……ほら、まだ結婚したわけではないじゃない。『したい』ってだけで」

カトリナは疲れてきた。いい加減、振られたことを認めて欲しいものだ。

「その相手って……もしかしたら、あの若様なのかな？」

「ええ」

「……あ、やっぱり」

「判りますか？」

「まあ……そりゃあ、ね。……でもさ、こう云っちゃあなんだけど、カトリナさん、恋愛経験ほとんど無いでしょ？ ……つーか、はっきり云って、全然無いでしょ？」

カトリナはむっとした。だからなんだと云うのだろう。

「無理も無いよね。こんなところに閉じ込められてるんじゃないよさあ。年頃だっていうのに。……だからさあ、なんの経験も無しに若様ひとりに絞るってのは、視野が狭いってゆーかさあ……いろんな男ひとと付き合ってみてからでも遅くはないと思うんだよね。俺は貴女あなたに、男というものを、恋愛というものを、教えてあげたいんだよ」

男は厭らしさのある笑みを浮かべて、カトリナの腕を掴んだ。カトリナは気持ち悪さに露骨に顔を^{しか}顰めて、すげなく振り払った。

「結構よ」

厭らしい笑みを浮かべたままの男の目に、暗い光が宿った。

「ここまで云っても解らないかなあ？ カトリナさん、分相応って言葉解る？ 名門セウエルス家の若様だよ？」

と、鼻で微かに嗤い、

「そんなの無理に決まってるだろ？ だから、俺にしといた方がいいって云ってるの。現実をよく観て御覧よ。俺しか居ないよ？ カトリナさん、男も知らずに終わる気？」

不意に、風が起こった。程無くして、小気味よい音が、紅葉し始めている林の中に響き渡った。カトリナが男の顔を平手で打^ぶったのである。

男は、引き攣ったような、醜く歪んだ笑みを浮かべた。打たれたところが赤くなっている。

「やるねえ。いや、いいよ。気の強い女って、好きだから」

怒りを抑え込んだような、^{ふる}顫えた声である。

カトリナは、気持ち悪さに胸を^{むかつ}嘔かせながら、男をきつく睥^{ぼくとつ}んだ。その風貌から、田舎の朴訥な青年

かと思っていたが、とんでもない勘違いであった。

「はっきり言うわ。あなた、鬱陶しいのよ！ 目障りなのよ！ いつもわたしのこと、舐めるように観てて、目を合わせると顔を赧めて、気持ち悪いったらありゃしない。わたしの前から消えて欲しいのよ！」

男は嗤った。

「よく言うなあ。満更でもなかったくせに」

凶星を言い当てられて、カトリナは顔を赧め、再び平手を振り上げた。しかし、今度は^{やすやす}易易とその腕を掴まれた。

「汚い手を放しなさいよ！ こうしてわたしが呼び出さなければ、わたしに話し掛けることすらできなかった小心者の^{げす}下種のくせに、いい気になってるんじゃないわよ！」

男の顔がどす黒くなった。

男は掴んでいた腕を^{ひね}捻り上げた。カトリナは痛み
に悲鳴をあげた。

「カトリナさんさあ……何考えて、俺をこんな人気の無いところに呼んだの？ 男女がふたりきりとなったら、やることは決まってるよね？ 本当は期待してたんだろ？ 年頃なのに、男日照りじゃ無理無いもんね」

「あっ!!」

男はカトリナを押し倒し、両手をひと纏めにしてカトリナの頭上に押さえつけ、両脚の間にその身を割り込ませた。そして、カトリナの衣服の胸元を引き裂いた。

「いやっ!!」

白く、形のよい乳房が露わになった。途端、男はその片方にしゃぶりつき、もう片方を^{わしづか}驚搦んだ。

「やあ——っ!!」

カトリナは、男のどろりとした汗臭さ、肌を這うざらついた指、ねっとりとして生温かい舌——そういったものの気持ち悪さに鳥肌を立てながら、男の^{いまし}縛めから逃れようと、金の髪を振り乱して必死に^{みじ}身動き、土や草を蹴り上げながら脚をばたつかせた。しかし、奮闘虚しく、縛めはびくともしない。圧倒的な力の差を思い知らされて、カトリナは茫然とした。泣き叫ぶより外無かった。

「アルカイオスさまあ——っ!!」

その時、乳房に歯を立てられ、そこからくぐもった声が聞こえてきた。噛まれた痛み^に声をあげる間もなく、男の体がずしりとカトリナにのしかかってき、生温かい液体がカトリナの胸に拡がり始めた。

何やらおかしいと気づいて男の方を見ると、男は血走った目をぎょろりと見開き、カトリナの乳房に食らいついたまま、口から血を溢れさせてカトリナ

の白い胸を赤く染め、その頸に刀を突き立てていた。

息が吹きかかるほどの間近でそんなものを見せられて、涙に濡れているカトリナの顔面は蒼白になった。頭の中は真っ白になった。

「ひい……っ……ああ……っ」

あまりの衝撃に声も出ない。息もできない。

「おい、大丈夫か？」

優しさなど^{かけら}欠片も無い、^{ぶしつけ}不躰な口調である。そんな聞き覚えの無い男の声が、頭上から降ってきた。

焦点の定まらない目を、反射的に声の方に向けると、カトリナに襲いかかってきた男の後ろに、細身の男が立っている。逆手に持った刀を、男の頸に突き立てたまま。

——助かった……？

ようなのだが、混乱している所為か、あまりそんな気がしない。

細身の男は刀を引き抜いた。

一瞬、青い空が赤く染まったのかとカトリナは思った。カトリナにのしかかっている男の頸から、勢いよく血が噴き出したのである。

それがカトリナの白い顔に金の髪に、びちゃびちゃと掛かった。空気を求めて喘いでいた口の中にも入った。胸の辺りは血まみれとなった。

「ひっ……！」

先とは比較にならぬ夥^{おびただ}しい血、その臭いと生温かさ、口に入った血の味に、カトリナは気が遠くなった。逃れようにも、己の上にのしかかっている屍体がそれを許さぬ。いや、そもそも恐怖のあまり体が動かぬ。

「話せるか？」

茫然自失のカトリナを、細身の男が覗き込んできた。

頭に巻いた草原色の布から、黒く長い髪を垂らした、美しい男である。目が離せなくなるような、引き込まれるような美しさがある。

しかし、その根底に何か恐ろしいものを感じて、カトリナは恐怖に恐怖を重ねた。

「あっ……うあ……っ」

涙と涎を垂らしながら喘ぐ。

そんなカトリナを観て、美男子は小さく溜息を吐いたようだった。

「……駄目か」

美男子は、血に濡れた刀の切先を、カトリナの喉目がけて無造作に下ろした。

「……っ!!」

反射的に、カトリナは目を瞑り、身体を硬くする。

……が、衝撃は一向にやってこなかった。

「……止めるな。この女は使えん」

「使えなくしたのはお前だろう」

「……すまん。石の都の女が、こんなに神経が細いとはな」

「俺が出て行って、頸を[^]押し折ればよかったな」

「もしくは、女の方を殺して、男の方を生かせばよかったか……」

「いや、俺は下種から話は聴きたくないぞ」

「俺もだ」

ふたりの男が何やら言い合っている。ローゼンディア語ではなくトゥライ語である。互いに似たところのある言語であるとはいえ、トゥライ語に^{くら}蒙いかトリナには、なんの話をしているのかよく解らぬ。いや、^{たとえ}仮令ローゼンディア語であったとしても、今は理解・判断できるような精神状態ではなかった。

カトリナが恐る恐る目を開くと、美男子の傍に、美男子が子供に見えるほど大きい、巨人のような大男が居た。しかし、そんな^{ずうたい}図体をしているにも関わらず、美男子のような底知れぬ恐ろしさは感じられぬ。美男子と同じくらいの年齢に見えるが、随分と落ち着いた印象がある。

「どのみち殺さねばならん。姿を見られた」

「……それはそうだが、正気に戻るまで待ってみてもよいだろう」

「そうだな。……近くに川があったな。ヴィシュタ、頼む」

なんの抵抗もせず、いや、そんな考えも及ばぬままに、カトリナは大男に^{かつ}担ぎ上げられた。

＊

ぴしゃり、と、冷たい濡れ布巾が、カトリナの額に押しつけられた。

「顔を拭って、目を覚ませ」

美男子はカトリナの顔を拭ってなどくれなかった。布巾を押しつけたきり、その手を離れた。自然、布巾はカトリナの顔をわずかに拭って、腹の上に落ちた。

川のせせらぎがすぐ傍に聞こえる、川辺の林の中であった。カトリナは木の根元に^{もた}凭せられていた。恐慌状態からは脱していたものの、頭の中は未だ混乱していた。

美男子が片膝をついてこちらを覗き込んでいる。大男は二、三步離れたところに佇んでおり、こちらの様子を窺いつつ、辺りにも注意を払っているようだった。

この二人はいったい、なんなのか？

敵なのか、味方なのか？

助けられたと思ったら、殺されかけた。

ということは、味方ではないのかも知れぬ。

ともかく、ローゼンディアの人間でないことは確かだろう。こんな美しい男も、こんな巨大な男も、未だかつて見たことが無いが、その言葉、装束いでたちからは、両者ともトゥライ人のように思える。

「お前、あの崩れた要塞の者だな？」

美男子が話し掛けてきた。

ザーレ要塞のことを云っているのだろう。

カトリナは頷くか否か迷った。何が契機きっかけとなって殺されるか判らぬ。

美男子はそれを察したのか、わずかに笑みを浮かべて、軽い口調で云った。

「案ずるな。殺しはしない」

ならば、刀に掛けているその手はなんなのか？

そもそも、己を殺そうとした張本人である。そんな男の云うことなど信じられぬ。

「お前が嘘うを吐かねえ限りな」

と、男は、目に不穏な光を宿らせて、そう付け加えた。

カトリナは、どのみち答えなければ殺されるに違いないと思って、恐る恐る頷いた。

「あれはなんだ？」

「なんって……」

「何故あんなところに人が住んでいる？」

「……化け物を、飼育しているのよ」

美男子は切れ長の目をわずかに見開き、愉しげに小さく笑った。

「化け物を飼育、ね。——どんな化け物なんだ？」

「エレの娘よ」

「エレ？」

「狂気と疫病の女神」

「何故そんなものが飼われている？」

「仕方無しによ。殺したら何が起こるか判らないもの」

美男子はトゥライ語で大男に話しかけた。

「外れだったな」

「こんなところに王女が転がっているなど、所詮は都合の良すぎる噂^{はなし}というわけか……どうする？」

美男子は溜息を吐き、

「……無駄骨だったな。こいつを殺して帰ろう」

と、カトリナを頤^{あご}で指し示しながら立ち上がった。

大男の顔に厳しさが浮かんだ。

「……どうしても、殺さねばならんか？」

その言葉を予想していたかのように、美男子はわ

ずかに笑みを浮かべた。

「売り飛ばす方がいいのか？ まあ、見目は悪くないし、男好きする体をしてるし、高く売れそうではあるかな。お前が担いで行くってんなら、何も文句は無えよ」

大男は不満そうに顔を^{しか}顰めた。

「そうではなく……」

美男子の顔から笑みが消えた。

「妙な情け心は起こすなよ。すでに俺はこいつを殺しかけた。こいつはそれを忘れんだろう。人の怨みを甘く見るな。こいつひとりじゃ俺たちに何もできんかも知れんが、こいつが子供や友人にそれを語ったらどうなる？ ^{たとえ}仮令こいつがあのに逝っても、怨みはこの世に残り続け、いずれ俺たちに害を為す」

「殺された怨みはどうなる？」

「あの世のことはカムラーンの仕事だ。俺たちはこの世にある怨みを潰さねばならん。俺たちのため、ナヴィド族のためにな」

「……」

大男は苦苦しい顔をした。

カトリナはそんな大男の顔を目に映しながらながら、美男子が発したある言葉に希望を見出していた。

——ナヴィド……ナヴィドって、確かに云った！

トゥライ語が解らずとも、カトリナは必死に二人の会話に耳を傾けていたのである。その中に、己が生き延びるための何かを求めて。

カトリナは、数日前のアルカイオスとキュロスの会話を思い出していた。

——トゥライのナヴィド族に不穏な動きがあるようです。

——ナヴィド族といえば……確か、去年の今頃、強盗にやってきた奴らだな。

——人質を奪い返す算段やもな。

「あんたたち、ナヴィド族なの？」

会話を続けていた二人の男は、驚いたようにカトリナを見た。

「耳聡いじゃないか」

「あんたたち、あの化け物を人質にするつもり？」

二人の男の顔色が変わり、剣呑な空気が漂った。

「トゥライ語が解らねえってのは嘘か？」

と、美男子はいつの間に抜刀したのか、カトリナの頸に白刃を当てていた。

カトリナは息を呑んで青冷めた。舌をもつ纏れさせながらも、なんとか言葉を発しようとした。

「まっ、まっ、待って！ 違う！ う、うそ、嘘じゃない！ 違うの！ わたし、あんたたちの味方よ!!」

「……ほう？」

美男子は凄惨とも云える笑みを浮かべた。

カトリナは怯えつつ、

「あ、あんたたちの会話が解ったわけじゃないわ。たまたま、『ナヴィド』って言葉が聞き取れて、それで、ナヴィド族が人質を奪^とられてるって話を思い出したのよ。あんたたち、あの化け物を人質にして、人質交換するつもりなんですよ？」

美男子は鼻で嗤い、刀の平でカトリナの頸をぴたぴたと叩いた。

「俺たちと取り引きでもしようってのか？ 残念だが、俺たちが欲しいのは『王女』であって『化け物』じゃねえんだよ。そんなもん、人質になるわけねえだろ？」

「王女よ！ 化け物が王女なのよ！」

ただでさえ鋭い美男子の目が、さらに鋭くなった。

「おい、適当なこと云ってるんじゃないやろな？」

「ほ、本当よ！ わたし、あんたたちの味方だって云ったでしょ？ わたし、あんたたちに褒美を与えてでも、あの化け物をここから掠^{さら}って欲しいの

よ！」

「ほう？　なんか怨みでもあるのか？」

カトリナは声を荒げた。

「そんなもの、いくらでもあるわ！　わたし、あいつの飼育係なのよ！　あいつに人生滅茶苦茶にされてるのよ！」

「下種に襲われたのも、関連してるのか？」

カトリナは羞恥と怒りに顔を赧めた。

「勿論よ！」

美男子は大男を振り返り、トゥライ語で話しかけた。

「乗ってみてもいいかも知れんな。こいつとあの下種の遣り取りからしても、こいつの境遇に嘘はなさそうだ」

「しかし、化け物王女となるとどうなんだ？　それでも人質となり得るのか？」

「なるさ。国王が王女を溺愛しているという話は、確かな筋からの情報だ」

美男子はカトリナを振り返った。

「おい、乗ってやるよ」

カトリナの顔に安堵と喜色が浮かんだ。

「ただし……」

と、美男子はカトリナの頭に触れたかと思うと、そのまま髪の毛を鷲掴んで引っ張り、カトリナの顔

を仰のかせた。カトリナが痛みに顔を顰めると、その目前、鼻息が吹きかかるほど間近に、男の美しくも恐ろしい顔が現れた。カトリナは顫えた。黒い瞳がカトリナを射抜くように見ている。

「裏切ったら承知しねえからな」

「ち、誓うわ。契約^{ヴァリア}の神に誓って、裏切ったりしないわ」

「裏切ったら、地の涯までも、あの世の涯までも追っていくからな。こちらにはカムランが居る。お前ら云うところの、魔術師とか、呪い師^{まじな}みてえなもんだ。本当にあの世まで追えるからな」

「あ、あんたたちこそ、裏切らないんで……ぐっ！」

カトリナは再び顔を顰めた。喉輪を鷲掴まれたのだ。

「口の利き方に気をつけろ」

ザーレ要塞の厳し過ぎる真冬よりも冷えた声だった。しかし、カトリナの耳には届いていなかった。頸を絞められて、目の前が白くなり始めていた。

「おい、ナガン！ 殺す気か!?!」

大男は慌ててカトリナから美男子を引き剥がし、息が止まりかけてるカトリナの呼吸を促した。カトリナは涙と涎を垂らしながら咳込んだ。大男はそんなカトリナの背中をさすりながら、申し訳なさそう

に口を開いた。

「大丈夫か？ ……いろいろと、すまん。悪い奴ではないのだが……^{ゆる}赦せ。俺たちトゥライ人にとって、裏切りは、死を以てしても^{あがな}贖われぬ最低の行為だ。だから、信じてくれてもよいと思う」

「……なんだっていいわ。とにかく、あの化け物を連れてってもらいたいよ。わたしが望むのはそれだけよ」

第十二章 王都

デルギリアのある東部高原イオルテス、中央高原ローゼリアと、痩せた大地を西へ西へと進んでいくと、草木が生い茂り、花々が咲き乱れる、^{みずみず}瑞瑞しい大地が見えてくる。オギュルエー—現在は王都の名をそのまま適用することが多く、ガレノスとも呼ばれている地方である。

北をフェルシナ内海、南をゼレーア海に挟まれた陸橋に入っていけば、やがて、青い空と緑の大地の間に、^{こまごま}細細とした白い建物群と、それを囲む灰色の城壁が見えてくる。王都ガレノスである。

十二ある門のひとつを潜り抜け、白い建物ばかりが連なる、石で舗装された煩雑な道を、内に向かって進んでいくと、再び城壁に突き当たる。先の城壁と区別して、こちらは内壁、あちらは外壁と呼ばれている。内壁の歴史は外壁よりも遥かに古く、技術的に高度で、伝説に^よ拠れば、七人の巨人たちが築いたものであるという。そのためこの城壁は「巨人の城壁」、あるいはその堅牢さから「不滅の城壁」とも呼ばれている。

その内側に、王の館はあった。

＊

「猊下、陛下がお呼びです」

内壁内に設けられた、ローゼンディア最高学府エムスエルス神学院、その学長室で、学長であり総大主教であるジポイテスは、書きものをしているところであった。

その手を休めて、ジポイテスは使いの者に頷きを返した。それを受けて、使いの者は下がった。

年季の入った重厚な扉が閉ざされる音を聞いて、ジポイテスは瞑目し、静かに深呼吸した。

——遂に、この時が来たか。

それは予感である。

使いの者は、王の呼び出し目的を何も述べなかった。しかし、ジポイテスには判っている。

——ザーレ要塞で何かあった。

そうに違いない。

一年ほど前、あそこにアルカイオス・セウエルスという新しい風を送り込んだのだ。そろそろ何かあって然るべきだろう。

ジポイテスは口元にわずかに笑みを浮かべた。

——何かが起こって欲しかったのか、私は。

「姫をお救いするには、祈るより他にありませぬ」

そう公言し、自らそれを熱心に実行してはいたも

のの、ジポイテスは怪しんでいた。

姫は恐らく、狂気と疫病の女神エレ、もしくは、死の神ネストスに魅入られている。そのように神の寵愛を受けている者を、人間如きがどうこうできるものではない。神に選ばし者は、その宿命から逃れることはできぬ。

姫を殺すつもりは最初から無い。殺せばどんなことが起こるか判らぬ。封印できるのならそれはそれでよい。

しかし、できることなら死んで欲しい。

我ながら恐ろしいことに、そう思っている。

そう思えばこそ、ヌーガに最も近き場所、加えてトゥライにも近き場所、廃棄要塞ザーレに幽閉したのである。

要塞はきちんと修復した、近くにヘルマディス要塞もあるから危険は無い、姫には何不自由無い生活をさせている——そう云って、姫を溺愛する王を納得させた。ザーレ要塞に行きたがる王を止めた。

しかし、その実態はどうなのか？

——知らぬ。

一度も見に行ったことが無いのだから、どんな風になっているのかなど、知りようが無かった。

とはいえ姫は、王が想像しているような豪奢な生活はしていないだろうと思う。

姫に対する王の^{あいびん はなは}愛憫は甚だしい。

毎月必要以上の物資を送ろうとするが、ジポイテスはそこから余分なものを差し引いて、必要最低限の物資を送るようにしていた。

それは端から見れば横領に違いないし、ジポイテス自身もそれと自覚している。

^{ばれ}暴露たら暴露たでなんの言い訳もせずに罰を受けるつもりであるが、この行為は清貧を尊ぶ宗教者としては、^や已むに已まれぬものであった。

それほどに、見過ごせぬほどに、王賜は膨大であった。だから差し引くことにしたのである。

だが、^{ヴァリア}契約の神に誓って不正などではなかった。そうして差し引いたものは、公共福祉の方に流しているのである。己の懐に入れたものはひとつも無い。

しかし、姫の生活は^{いささ}些か清貧の度を過ぎているのかも知れぬとは思ふ。

と云うのも、教師として派遣している神官やアルカイオスから、そういった報告が来ているからである。恐らくは、ザーレ要塞のすべてを任せている侍女頭あたりが、必要最低限の物資からさらに差し引いて横領しているのだろう。

無論、最低限とは云っても、一国の姫としての暮らし向きが充分維持されるようにはしてある。

ジポイテスからしてみれば、それでも十分すぎる量であるとさえ云える。

だが、いかな呪われた宿命を持って生まれたとはいえ、大国ローゼンディアの姫には違いないのだ。事実上の収監ではあっても、囚人と同じようには扱えなかった。服と皿だけ与えて、後は鎖に繋いでおくというわけにはゆかぬのである。

だからこそ教師も派遣したし、お付きの侍女たちも配してあるのだ。そもそもあのような僻地^{へきち}で、侍女たちが何するのだろうかとは思いますが、そこは体面というものである。王に対する言い訳と考えてもよい。

ジポイテスは流麗なカトリナの筆跡を思い出した。文面も、正規の教育を受けた者でなければ書けぬものであった。

赤子の時分からカトリナは要塞にいるのだ。本来ならば彼女には、教育の機会は与えられなかったはずである。

カトリナに教育を授けたのは勿論、姫のために派遣している教師役の神官である。

あとで判ったことであるが、これは母のタニアが懇願したのだという。

このことに少なからずジポイテスは衝撃を受けた。何とも云えない嫌な気持ちだが、胸の中にいつま

でも残った。

嫌悪感からではない。

遣り切れない気持ちになったからである。

教師役の神官から聞いた話では、姫もカトリナも優秀な良い生徒であるという。

聡明であり真面目な良い生徒だと。

二人とも、できることなら王都の学院に迎えたいものだと、その神官は控えめに漏らした。

——することがなくなって横領に走ったか。

それとも、それ以外に心を保つことができぬのか。

イオルテスは過酷な地方である。

その中でも更に僻地と云える場所にザーレ要塞はある。

そのような場所に幼時からずっといるのだ。いや、そもそも外の世界を全く知らないと云うべきだろう。

そのような者が横領をしているとするならば、これはただ事ではない。

そこに籠められた思いを、情念を、思わねばならぬ。

「悪の前にその悲しみを知れ」

とは、聖賢リュベイオンの言葉であるが、それを噛み締めねばならぬ。

横領は紛^{まご}う方無き不正である。それは間違いない。だが真の悪はそこにはないのだ。

「蠍^{さそり}がどこに隠れているかを知れ」

これもリュベイオンの言葉である。

だからジポイテスには侍女頭を罰する気は無かった。横領を理由に辞めさせる気も、他の者に替える気も毛頭無かった。

こういったことは必要悪であると思っている。人の世にあっては必ず出てくる問題である。

ある面、世の中がうまく回っていくには、仕方の無いことだとも云える。

勿論納得したわけではない。割り切れたわけではない。

だが長年悩み続けて、少なくともそれらは、何らかの必要性があって起こっているのだとは考えられるようになった。

タニア・カトリナ^{おやこ}母娘を要塞へと送り込んだリュトア領主レクシスとて^{しか}然りである。彼が^{おやこ}母娘に加えた仕打ちは推測できているし、それが真実ならば到底許されるべきことではない。しかし、それもまた必要なことなのだ。

^{ぐまい}愚昧なる己には、神々の御意志が理解できぬだけなのだ。

^{デューノイ}運命の三女神の授けた運命が、いったい如何なる

ものであるのかなど、定命なるこの身では、計り知ることなどできぬのである。

大切なのはその運命を理解して、人として正しくあることなのだ。この世界にあるものはすべて、定められた運命を有しているのだから。

そこに優劣を持ち込むのは人の愚かさである。草も、樹も、石も、己の運命を嘆きはしない。

野辺に咲く花は明日には手折られ、火にくべられるやも知れぬ。しかし、その花でさえ、こんなにも美しく咲いているではないか。

神々はそのように全ての存在を愛し給う。花と木の女王、野獣たちの女主人は、^{たとえ}仮令この一輪の花さえ決して、なおざりにはしない。

だから人々よ、運命を^{なげ}慨くな。

「花は問わない」

聖賢リュベイオーンはそう語ったという。

いずれにせよ、ジポイテスはそういった犯罪の現場を実際に目撃したわけではなかった。判らぬものを取り締まることなどできなかった。——そういうことにしてあった。

そういった者たちは、己が裁かずとも神が裁いてくれるとも思っている。

己の、王に対する背信とも云える行為が公になったその時は、甘んじて罰を受けよう。どんな理由があれ、それはそれで罪に違いない。

無論、ジポイテスは己が真に正しいことをしていると信じている。

王賜を横領することにより施療院を建てた。そこでは今こうしている間にも、病に苦しむ人々が、幾ばくかの助けを得ていることは間違いないのである。

そのような施設でもない限り、寄る辺の無い老人や孤児といった人々は、病が直接に死に繋がってしまうのだ。

何もかも、すべて、王国万民のためであった。

それこそが、何を措いても守るべきものであるとジポイテスは思っている。この王国に災厄を為す者を野放しにしておくわけにはゆかぬのである。

しかし――

そういった己の行いに、まったく私心がなかったのかどうか？

そう己に問うてみると……

分らない。

いや、分らなくはないはずである。

分らないことにしておきたいのではないのか？

姫に死んでももらいたいという思いの中に、個人的

な、恐怖や嫌悪という感情が混じっていないか？

姫の世話をする者たちのことを、なおざりにしていないか？ 考えまいとしてはいないか？

ザーレ要塞に一度も足を運べていないことを、忙しさを理由に言い訳にしていないか？ ステファノス・セウエルスの葬儀の帰りにでも、立ち寄ることができたのではなかったか？

そういったことは、考えればいくらでも浮かんでくる。

ともあれ、もしまったく私心が無いのならば――

姫を背負って、ヌーガの奥地にでも行っている。

はずではないのか？

いや、無論そうするつもりである。

ただ、己には、姫のこと以外にも遣らねばならぬ仕事がたくさんあるのだ。それが終わったら、己の死期が近づいたら、姫と共にヌーガの^{かなた}彼方に消えようと思っている。それが己の最後の仕事であると思っている。

無論、その前に死んでくれるのなら、それに越したことはないが、姫と共にヌーガへ行くことを恐れているということは断じてない。……そのはずだ。

それなのに、「ザーレ要塞で何かあった」という

予感を得て、己はどこかで安堵してしまいか？

——神よ。どうなのでしょう？

ジポイテスは、光沢のある赤褐色の木扉を見つめた。両開きの扉の片方に、獅子の頭部と鳥の翼を持つ両性具有の若者——主神ヴァリアが彫られている。もう片方に、弓を持った、長い巻き毛の^{たくま}逞しい美青年——王家の祖神である、太陽神アクシオンが彫られている。

その扉が^{おもむ}徐ろに開かれると、その先に、戦神イスターリスの如く^{ふんぬ}忿怒せる、ローゼンディア国王バルバドゥス二世が待っていた。

「総大主教！ リュフィーナが^{さら}掠われたぞ！」

＊

見す見す王女を奪われ、取り返すこともできなかった。

アルカイオスは始終苦しい思いを抱えながら、デルギリアから王都までの^{みちのり}道程を、ほとんど不眠不休で駆け続けた。己自身を責め立て、痛めつけるように。

戦いに^{うつ}現を抜かして本来の目的を忘れるなど、あってはならぬことである。

——^{イスルバルディス}狂戦士でもあるまいし。

その身に神を宿して狂ったように戦う彼らだけは、そうあることを許されている。

仇のイゴールに対して自制できたことで、気が弛ゆるんだのであろうか。

——いや。

何も成長していなかったのだ。

祖父が生きていた頃から。何も。

「戦いに現を抜かすなど言語道断ですが、しかし、状況が状況でしたので、現を抜かさずとも掠われていたのではないかと存じます。そもそも、ザーレ要塞の守備状態に問題があり過ぎるわけで」

と、キュロスは云った。

確かに、ザーレ要塞の守備には問題があり過ぎる。しかし、それとても己の失態に違いない。そうと知りながら、王女を安全な場所に移すことができなかったのだから。

「致し方ありますまい。総大主教猊下の御管掌下故、その中でできることをするより外ありませぬ。今回のことは、我らの力の及ぶところではありませんでした」

淡淡とキュロスは云う。

そんなキュロスに腹が立った。

「姫が掠われたというのに、随分と落ち着いているのだな、キュロス！」

「掠われたといっても、ただの人掠いではないでしょう。王女と分っていて掠ったものと見えます。そのうち、あちらからなんらかの要求があるでしょう。少しは落ち着いて下さい。騒ぎ立てているのは若だけですぞ」

その最後の言葉で、アルカイオスはキュロスを殴りそうになった。が、軌道を逸らして、卓子に拳を叩きつけた。

キュロスの云う通り、姫が掠われて動揺を見せているのは己だけであった。

父クラティスに姫が掠われたと報告しても、「そうか」

とだけしか云わなかった。

——おかしいのは私なのか？

いや、そんなはずはない。

王女が掠われたのだ。

それも、領主の息子が守備の任に当たっておりながら。

これ以上無い不名誉である。

しかし——

——姫は疎まれている。

考えたくもないが、このような事態を望まれていたのだとしたら……

とはいえ、それにしても、デルギリアとしては、

セウエルス家としては、割に合わぬのではないのか？

呪われていようが疎まれていようが、王女は王女である。不名誉であることには変わりあるまい。体面や名誉というものが生命にも等しい、いや、それ以上でさえある貴族にとって、それは屈辱である。

——父上は、こんなことさえも呑んだのか？

王女の身柄を領内に^{あずか}与るにあたって。

恐らくはそうに違いあるまい。そうでなければ、王女をザーレ要塞に置くことを許すはずがない。王女の警護を嚴重にしているはずである。

アルカイオスは、悔しさで居ても立っても居られなかった。

王女自身は何も悪くない。悪いのはその身にかかっている呪いだけである。

それなのに、その身と呪いが切り離せぬが故に、王女は呪いごと疎んじられる。そうならざるを得ない。

その呪いが如何なるものであるのか、アルカイオスは知らぬ。結局一度も目にすることはなかったし、ザーレ要塞の者たちは語ることすら恐ろしいとばかりに皆一様に口を^{つぐ}噤んでいた。それほどの呪いならば、王女が疎んじられるのも仕方の無いことではある。それは解る。

総大主教も父クラティスも、個人的な感情はどうあれ、国民を領民を護らねばならぬ立場にある。それは解る。

領民を損う虞^{おそ}れ、不名誉を被^{こうむ}る虞れがありながら、王女の身柄^{あずか}を与ることにした父の決断がどれほどのものであったか。それも想像に難くない。

しかし、疎んじられる王女はどうなる？

それが運命だなんて……疎んじられるために、蹂^ふみ躪^{にじ}られるために生まれてきただなんて、そんなことがあってもよいものなのか？ 神の血が流れるその身は、神に愛されるべき身ではないのか？ それとも、それもまた神の愛なのか？

定命の身たるアルカイオスには何も解らぬ。ただひたすら駆けるより外無かった。

アルカイオスは、旅の疲れや汚れもそのままに、見苦しい姿を王の目に触れさせる無礼は承知の上、王の御前に参上した。

金の光を鋭く放つ瞳、獅子の鬣^{たてがみ}の如く逆立ち波打つ黄金の髪——王のその姿は、まさしくア^アク^クス^スヘ^ヘンの末裔^{レイ}のものであった。

王は光を放っているかのようだった。しかしそれは、その娘リュフィーナの如き柔らかなものではない。リュフィーナが春の陽光だとしたら、王バルバ

ドウス二世は真夏の陽光であった。大地を干上がらせ、草木を枯れさせる、苛烈なものである。

初めて王に謁見^{えっけん}したアルカイオスは、緊張を乗り越して萎縮した。

王の王女に対する愛情はひとかたならぬものがあるという。己の失態を報告したら、己は、セウエルス家は、いったいどうなってしまうのか？

アルカイオスはごくりと唾を呑み込んで、大理石の床に頭を打ちつけるかの如く平身低頭し、どうしようもなく口の中が乾いてかすれてしまう声で、王女が掠われた旨を奏上した。

述べ終わる前に、何かが飛んでくる気配を感じた。王の方からである。反射的に避けそうになった。が、それはまずかろうと思って、歯を食いしばるに留めた。前頭部に何かが中たった。目が眩んだ。飛んできた何かが床に落ちて大きな音を立てた。見れば王笏^{おうしゃく}であった。

「何をやっておった!!」

王の怒声がアルカイオスの身を貫き、顫^{ふる}えさせた。謁見の間自体、びりびりと震えたようでもあった。

「……も、申し訳ございません！」

アルカイオスはさらに頭を下げた。

「デルギリアの兵も随分と軟弱になったものよの

う！」

アルカイオスの目が見開かれた。聞き捨てならぬ言葉であった。

アルカイオスは顔を上げた。

玉座から立ち上がった王は、怒りも露わに^{いか}厳めしい顔を赧めて、輝ける金の瞳でこちらを睥んでいた。それをアルカイオスは青い瞳で睥み返した。

不遜だとは思わぬ。王であるとはいえ、こちらの失態であるとはいえ、侮辱までされる^い謂われはない。

ローゼンディア国王とはいっても、ローゼンディアすべてを支配しているわけではない。広大なローゼンディアの各地には、古くからその地域を支配する者たち——つまりは領主が居て、^{おのおの}各各己が領地を支配している。ローゼンディア国王は最大規模の領地を支配してはいるが、彼ら彼女らの束ね役でしかない。盟約により、各領主から忠誠を誓われているに過ぎない。

^{はばか}「^{なが}懾り乍ら、デルギリアは総大主教猊下の言を国王陛下の言と思い、その通りに従ったまででございます」

責任転嫁の如き物言いに、アルカイオスは我ながら気持ち悪さを禁じ得なかった。しかし、事実は事実である。

「元よりザーレ要塞は姫をお護りするだけの力がございませんでした。修復したところでどうにかなるものでもございませんでした」

「何!?!」

バルバドゥスの怒りに満ちた顔が、半ば驚愕に塗り潰された。

「どういうことだ？ 総大主教はなんの心配も要らぬと申しておったぞ!?!」

さもありなん——と、アルカイオスは思った。

王は王女を溺愛している。王を欺あざむきでもせねば、王女をザーレ要塞に置くことを承知させることなどできまい。

「猊下が陛下になんと仰おっしゃっておられたのかは存じ上げませぬ。しかし、本来、ザーレ要塞は姫のような高貴な御方をお迎えできるような場所ではございませぬ。それは実際に御覧になれば一目瞭然の事実にございます」

バルバドゥスは口を顫わなな動かせ、口角沫こうかくあわを飛ばして叫んだ。

「総大主教を呼べ!!」

暫くして、総大主教ジポイテスが現れた。

ジポイテスは、怒れる王と、この場に居るアルカイオスを観て、瞬時にすべてを悟ったようであっ

た。

しかし、驚くでもなし、慌てるでもなし、見る人の心を和ませるような、いつもの円やかさと貫禄は崩れない。優雅さのある泰然とした足取りで、神に仕える者特有の白い長衣の裾をわずかに翻しながら、こちらにやってくる。

その在りようは、怒り心頭に発しているバルバドウスとはえらく対称的であった。いや、そもそもの雰囲気からして、このふたりは対称的なのである。

「総大主教！ リュフィーナが掠われたぞ！」

王の怒声が謁見の間に響き渡った。

しかし、ジポイテスの在りようは一向に変わらぬ。

——馴れておるのやもな。

と、アルカイオスは思った。

総大主教は王の相談役でもある。こうでなくては務まらぬのだろう。

「申し訳ございません。この不手際はすべて、私めの不手際にございます。どうかデルギリアの者たちには何も問わぬようお願い申し上げます」

と、ジポイテスは深深と頭を下げた。

「申すことはそれだけか!? おぬし、儂を騙りおったろう!!」

「御意」

ジポイテスは顔を上げて、激怒するバルバドゥスを真っ直ぐに見つめた。

「しかし、決して、^{ヴァリア}契約の神に誓って、私心からではありませぬ。すべてはこの国のためにございます」

「王を騙るのが国のためと申すか！」

「いえ、私は王を騙ったのではございませぬ。娘を愛する一個の父を騙ったのでございます」

バルバドゥスの顔色が、赤を通り越してどす黒くなった。

「ぬけぬけと！ 屁理窟など聞きとうないわ！ —
—衛兵！ あやつを牢獄にぶち込め！」

王の言葉に打たれるように衛兵は動きだし、総大主教を捕らえようとした。が、近くまで歩み寄るだけで、直接手を触れようとはしなかった。

衛兵は迷いを見せていた。

当然であろう。目の前にいるのは神に最も近いとされる総大主教、ヴァリア教徒全ての頂点に立つ人物である。ヴァリア教徒としては、とても手が出せるものではない。

「何をしておるか！」

王の叱責が飛んだ。衛兵たちは途方に暮れたように仲間に目を遣り、それぞれが顔を見合わせてい

た。

「牢獄へは自ら参りましょう。罰は甘んじて受けま
す。しかし、その前に申し上げたきことがございま
す」

ジポイテスは威厳のある手振りで自ら兵を招き寄
せた。おずおずと二人の衛兵が進み出てきて、その
両脇に立った。

「衛兵！ 何をやっておるか！ さっさと連れて行
け！」

ジポイテスの言葉などもう聞きたくないとばかり
に、バルバドウスは衛兵を急き立てた。

二人の衛兵はそれでも躊躇いを見せていたが、ジ
ポイテスが歩き出すと、それに従うように歩み始め
た。

謁見の間を出る前に、ジポイテスは振り返って王
に言葉を放った。

「陛下、天命をお受け入れなされ。リュフィーナ姫
が呪いをお受けになって^あ生まれましたのも、^{あなた}貴男様が
ローゼンディア国王でいらっしゃるのも、すべては
神がお定めになったこと。神は陛下に試練をお与え
になったのです。姫はこのままお手放しなされ。さ
すれば、この国はさらなる繁栄を……」

その言葉を最後に、赤褐色の扉の向こうへとジポ
イテスは消えた。

「畏れ多くも大神ヴァリアにお仕えすべき身でありながら、ようも今まで嘘を吐き通してきたものよ。よもや神の^{すまい}住居にあのような^{さそり}蠍が居るとは思わなんだわ！　だが儂はあの腰抜けとは違うぞ。儂はリュフィーナの呪いと戦う！　おお、それこそ神が望んでいらっしゃることに違いあるまい！　戦わずに逃げるなど、王のすることではないわ!!」

王の言葉に、アルカイオスは^{いた}甚く感銘を受けた。

——姫の呪いと戦う！

そんなことなど思いも寄らなかった。どうにもならぬものだと思っていた。

暗闇に光明を見出したが如き気分であった。

——さすがは王よ。

アルカイオスは敬意の籠もった眼差しで王を仰ぎ見た。

バルバドゥスは側に控える侍従に命じた。

「急ぎ兵を集めよ！　トゥライを攻める！」

アルカイオスは慌てた。

「お待ち下さい！　申し遅れましたが、賊から人質交換の要求があったのです」

「む？」

バルバドゥスは、まだそこに居たのかという顔つきでアルカイオスに目を向けた。

「姫と、こちらに囚われているナヴィド族のゼノン

とを交換したいと」

それを聞いて、バルバドゥスの厳めしい顔が、少しやわら和いだ。

「そうか。——ただ直ちに、ナヴィド族のゼノンを出せ！ 出立の用意もせよ！ 儂自ら参る！」

アルカイオスは再び慌てた。

「お待ち下さい！」

「なんだ？ もう下がってよいぞ。総大主教に免じて、デルギリアに責は問わぬ」

「それは有り難き御言葉。しかし、はばか なが 憚り乍ら、人質交換には私が参りたく存じます」

見す見す王女を掠われて、王に合わせる顔などどこにも無かった。それでもこうしておめおめとやってきたのは、汚名返上の機会を得んがためであった。

「ならん！ リュフィーナのことはもう誰にもゆだ委ねられん」

「陛下の御心情、お察し致します。しかし、そこをどうか！」

アルカイオスは頭を下げた。

「ならん！」

「よいではありませんか」

熱気の籠もった室内に、突如、冷氣のある女の声がすっと入り込んできた。

バルバドゥスの背後からである。

驚きも露わにバルバドゥスが背後を振り返ると、バルバドゥスの逞しい体の陰から、いかにも高貴な女が姿を現した。

華やかな——いや、毒毒しい美女である。金の髪の毛の結び上げ方といい、化粧といい、衣装といい、その存在自体といい、すべてがすべて過剰すぎるほどに華美な女であった。年の頃は二十代後半といったところであろうか。

——いや、女の^{とし}齢は見た目では判断できぬ。

思った以上にずっと^{としかさ}年嵩なのかも知れぬとアルカイオスは思った。

しかし、これだけ目立つ女だというのに、今の今までその存在に気づけなかった。恐らくはつい先程、奥にある王専用の出入口から入ってきたのではあろうが。

「……アグネッサか。そのように驚かせるものでない」

アグネッサ——現国王妃の名である。

「失礼致しました。でも、驚かせるつもりはありませんでしたのよ。あまりにも熱心にお話をなさっていたから、お気づきになられなかったのでしょうか」

と、アグネッサは、妖艶さのある笑みを浮かべながら云う。

「ふむ。まあよい。それよりもアグネッサ、儂は暫^{しばら}くここを留守にする。後のことは頼んだぞ」

「いえ、それはお引き受けできませんわ」

バルバドゥスの眉に剣呑^{けんのおん}さが現れた。

「儂はリュフィーナを迎えに行かねばならんのだ」

「王の為さることではございませんわ。そのようなことは他の者に委せて、玉座で泰然とお待ちになるのが王の在り方というものです。神々の中心^{いま}に坐す、大神ヴァリアの如く」

「泰然と待っておったら、リュフィーナが掠われたのだぞ！」

バルバドゥスはアグネッサに怒声を浴びせた。しかし、アグネッサは平然と笑みを浮かべている。

「責は総大主教にあるのでございましょう？ ならば、デルギリアに名誉挽回の機会をお与えになりませんと。デルギリアのセウェルス家と申しますと、イスターリスの末裔^{イスターリヘーレイ}の宗家、七宗家の一つではございませんか。家格は、同じく七宗家の一つ、アクシオン^{アクシスヘーレイ}の末裔の宗家、我らがメルキオス家と同等」

七宗家は、王家を含めた王国貴族の頂点に立つ家々である。

七宗家には序列は存在しない。王家といえども例外ではない。それはヴァリア教の教えによるものである。

神々の王たる至高神ヴァリアだけは別格ではあったが、ヴァリアを中心にして円を描くようにヴァリアに付き随^{したが}うその他の神々には、序列は存在しない。優劣も存在しない。皆同等の存在なのである。

「そのような名家の名誉挽回の機会を、王が横から奪うような為さりよう、世人^{せじん}はどう思うでしょう？ デルギリアはどう思うでしょう？ 神はどうお思いになるでしょう？ 奪われたものは、奪われた者の手で取り返すのが理^{かな}に適^{かな}っているのではございませんか？ 王女を奪われたことですら汚名であるというのに、取り返す機会までも奪われてしまったら、それも王が代わりに取り返すともなれば、汚名に汚名を重ねるようなものですわ。デルギリアの面目は丸潰れですわね」

——そうでしょう？

と云わんばかりに、アグネッサは流し目の如き艶^{つや}っぽい目をアルカイオスにちらりと送った。

いきなりそんなものを送られて、アルカイオスはどぎまぎした。気不味さを隠すように、さっと会釈した。

「むう……しかし……」

苦い顔で渋るバルバドゥスを後目^{しりめ}に、アグネッサはアルカイオスに顔を向けた。

「そなた、名はなんと申す？」

「は……クラティス・セウェルスの子、アルカイオスと申します」

「アルカイオス……」

アグネッサは、その名を味わうように口の中で転がし、

「……よい名ね」

この上無く美味おいしかったとでも云うような、笑みを浮かべた。

アルカイオスは返答に窮し、再び会釈を返した。

「陛下、セウェルス侯の息子がわざわざこうして参っているのです。それも単騎で参ったそうではありませんか。よい若者しょうすいが憔悴しょうすいしきって……」

と、アグネッサは憐れむような目をアルカイオスに向けた。

「相当急いで参ったに違いありませんわ。彼の者をそうまで動かしたものは、いったいなんでございましょう？ 名誉と誇りを守らんとする心——それは当然ございましょう。しかし、それだけではございけません。そこには、陛下に寄せる篤あつい信頼もあるの
でございます。同じ貴族として、盟約を結んだ仲として、名誉と誇りを守らんとする心をご理解いただけるのではないかと、そう信頼して馳はせ参じたので
ございます」

「……」

「信頼にお応えなさいませ。それでこそ諸侯の長たるにお相応しく、諸侯の王に対する忠誠は一層篤くなるというものですわ」

バルバドゥスは観念したかのように目を閉じた。

「……解った」

バルバドゥスは口惜しさが残る目で、アルカイオスを見た。

「アルカイオス、と申したな。人質交換の役目は其方に委せよう」

「有り難く存じます！」

畏まるアルカイオスの声には喜色が滲んでいた。込み上がる歓びを抑えきれなかったのである。

「くれぐれも……」

バルバドゥスの目に輝きが戻ってきた。

「くれぐれも頼んだぞ！」

「御意！」

＊

翌朝、アルカイオスら人質護送隊は王都を發った。

その様子を三階の窓辺から見送りながら、アグネッサは昨日のバルバドゥスの言葉を思い出していた。

——リュフィーナを王都に連れて参れ。

「今更、冗談じゃないわ」

バルバドゥスには三人の子が居る。前王妃トリュファイナとの間に一人、現王妃アグネッサとの間に二人——その内最も愛されているのが、トリュファイナの子リュフィーナなのである。

呪い故にリュフィーナは、幼くして父王から離れることを余儀なくされた。まだ数えで三つか四つとしの齡としのことである。

バルバドゥスは前王妃トリュファイナを深く愛していたという。

そしてトリュファイナの死後、その愛はそっくりそのままリュフィーナに向けられることになった。

人智を越えた呪いの故に、リュフィーナは疎うとまれ、恐れられたが、それだからこそ逆に、父王の愛を強く受けることになったとも云える。

しかも聞くところによれば、成長したリュフィーナはその母によく似ているという。つまり前王妃トリュファイナに似ているということになる。

もちろん勿論バルバドゥスはその姿を見てはいない。だが話にしても充分である。

決して無能な王ではない。無能な王ならむしろよかったと思うくらいである。その方が、操作するにも楽でよいのだから。

ところが事実はそうではない。バルバドゥスはなかなかの王であり、君主としては平均以上であるとさえ云える。そしてその所為で己は苦勞していると、アグネッサは思っている。

ともかくバルバドゥスはリュフィーナを溺愛している。自分だけがリュフィーナの庇護者であると信じている^{ふし}節がある。それは滑稽なことではあるが、恐らく正しいだろう。

もしかしたら、トリュファイナが死に臨んだ時、後のことを託したのかも知れぬ。

それは十分にあり得る話だとアグネッサは思う。己も恐らくそうするだろうし、概して男という者は義理堅いところがある。

ましてやあのバルバドゥスである。誇り高く、気性が激しく、しかも一徹なところがある男である。愛する女の最後の頼みを、^{むげ}無下にできるとは思えない。

恐らく忠犬よろしく主人の命令を守っているのだろう。主人は^{ユノー}冥界に旅立って久しいというのに、今でもその言葉を守っているのだ。実に腹立たしい。

おまけにバルバドゥスは未だに、王位を誰に譲るかを述べていない。忌^いみ子^ごとはいえ、リュフィーナが女王になる可能性もないではないのである。

男であろうが女であろうが、王は王である。ロー

ゼンディアでは別段女王でも構わないのである。

いっそのこと隣国レメンテムのように、男だけが帝位に就けるなどの法が有ればよいのに、とも思う。

そうであれば、これほどまでにリュフィーナのことを気に病む必要はなかったのだ。ザーレ要塞で朽ちるに任せておけばよい。

バルバドウスは言った。

——儂はリュフィーナの呪いと戦う！

と。

もし、その戦いに勝利したなら……。

そんなことは阻止せねばならぬ。

もう手は打ってあった。

リュフィーナは帰って来ないだろう。

交換すべき人質が、護送隊諸共、賊に襲われて死ぬのだから。

そこまで考えたところで、アグネッサはふとアルカイオスのことを思い出した。

若く^{たくま}逞しい体、迷いの無い強い^{まなざ}眼差し、厳しさと美しさを^{あわ}併せ持った、とても魅力的な若者だった。

デルギリアなどという辺境にいるのが惜しまれる。王都にいれば女たちが放っておかぬだろう。

無論、己も含めてである。

しかしアルカイオスが望めば、いつでも王都に滞

在することはできるはずだ。それをしないというのは、恐らく元元、綺羅^{きら}びやかな王都の暮らしに興味がない性質^{たち}なのだろう。

武辺一辺倒であるのかも知れぬ。しかしあの若者に於いては、それすらも魅力に感じられる。なんとも可愛らしいではないか。

あの若者の髪も目も、イスターリスの末裔^{イスターリヘーレイ}の特徴を色濃く示していた。それはヴェルデスの祭祀^{さいし}を司^{つかさ}どる者たちと云ってもいい。

イスターリスの末裔^{イスターリヘーレイ}はローゼリア、そしてイオルテスに多くが住む。彼らはイスターリスの子たる、英雄ヴェルデスの血を引く者たちである。彼らはイスターリスを崇め、ヴェルデスの祭祀を取り仕切る。

今から千八百年前、聖賢リュベイオンの導きによって、一族の本宗家であるセウエルス家は、イオルテスのデルギリアに移ったという。

以来王国の東の護りとして重責^{にな}を担い、それによく応え、大きな役割を果たしてきたと云えるだろう。

「でもそれも、これで終わりかもしれないわね」

英雄ヴェルデスは二人の女に愛されるだけでなく、愛の女神ペネルピアからも愛された。そしてそれが、彼の命取りになった。

英雄は戦場で堂堂とした死を迎えることはできずに、裏切りによって謀殺されたのである。

彼はその高貴なる生まれと、立派な行いの数数にふさわ相応しい最期を、遂げることができなかったわけである。

己を女神ペネルピアにひけん比肩しようなどとは思わぬが、それでも今のアグネッサには、英雄を死に追いやった女神の気持ちが解るような気がした。

これも運命なのかも知れぬ。デ ユー ノ イ運命の三女神は英雄の子に、その父祖と同じ運命を授けたのではないだろうか。

そう考えて、アグネッサは甘やかな喜びを感じた。

あの魅力的な若者は惜しいが、これも運命である。運命であるならば仕方の無いことではないか。

元より自分は、あの若者を殺したいなどとは、露ほども考えてはいないのだから。

人質護送隊が段段と小さくなってゆく。

アグネッサはそれに背を向け、窓辺から離れた。

第十三章 前夜

アルカイオスが人質を伴ってギルテに帰還すると、すぐさまナヴィド族に使者が送られた。要求に応じる旨を伝えると、人質交換に関する具体的な指示が返ってきた。

場所はザーレ要塞正面門前。

期日は五日後。

条件は兵を伴わぬこと。

以上であった。

「ザーレ要塞正面門前……何やら不穏なものを感じますな」

と、キュロスは渋い顔をした。伏兵を案じているのである。

ザーレ要塞が襲撃された後、要塞は引き払われた。現在のザーレ要塞は無人のはずである。そこに潜まれたら……。

「そう案ずることもないと思うがな。我が領内であるし、近くにヘルマデイス要塞があるし……むしろ信頼されていると考えた方がよいのではないか？ 人質交換には、私が行くことも伝えてあるしな。それに、トゥライ人にとって、約定を違えることは万死に値するのだろうか？」

と、アルカイオスは、片親がトゥライ人である

キュロスに問うた。

「その通りです。骨を粉粉に碎かれます」

死して後、骨を碎かれる——それは、トゥライ人だけでなくローゼンディア人にとっても恐ろしいことであった。特に、狩猟神ダルフォースを篤く信奉している人々にとっては。

「まあ、一応、ヘルマデイス要塞に指示を出しておけ」

「御意」

と、キュロスがアルカイオスの居室から下がるうとした時、家中の召使いがやってきた。

「若、カトリナ・ミアスと申す者が目通りを願っております」

「カトリナ・ミアス……？」

アルカイオスは訝しんだ。どこかで聞いたことのあるような名である。

思い出そうと努めた。しかし、王女のこと気が掛かり過ぎている所為か、なかなか思い出せぬ。

「……知らんな。今はそれどころではない。帰せ」

と、面倒臭そうに手を振った。

キュロスが慌てて口を挟んだ。

「若、侍女頭殿ですよ。姫の」

アルカイオスは少し驚いたような顔をした。

「侍女頭殿は生きておったのか？」

てっきり、ザーレ要塞に居た者たちは全滅したものだとはばかり思っていた。

「唯一の生き残りです。ザーレ要塞引き払いにあたって、とりあえず、ギル^こテ^こに連れてきておりました」

「そうか。では、通せ」

程無くしてカトリナはやってきた。

アルカイオスは目を^{みは}瞠った。一瞬、誰だか判らなかった。

約一ヶ月ぶりにアルカイオスの前に姿を見せたカトリナは、いつもの侍女姿ではなかった。結い上げ引っ詰められていた金の髪は下ろされ、侍女の素っ気ないお仕着せは貴族の華やかな衣服に変わっている。

まるで貴族の令嬢であった。

いや、「まるで貴族の令嬢」とは実に失礼な感想であるな、と、アルカイオスは思い直した。カトリナは事あるごとに、「わたくし、こんなところにおりますけれど、貴族なんですよ。リュトア領主の娘なんですよ」と、云っていた。

本来ならば、やはり貴族に対してはそれなりの扱い方をする必要がある。というよりも、そうした方が望ましいという社会的な雰囲気がある。

アルカイオスにしてみれば、カトリナに対し、己

に等しい身分の者として接する必要があるのである。

しかしアルカイオスはそうはしなかった。あくまでカトリナを侍女頭として扱い、呼びかける時にも、その姓名を呼んだことは一度もない。

これは身分よりも職分を優先させたからだと言えるが、本来ならば、そうすることが正しいのである。ヴァリア教の教えにも合致している。

世の中には身分の別が、責任と誇りを示すものであるということを、理解せぬ輩が多い。だが上の者が下に威張り散らし、下の者が上を怨むようであれば、国など立ちゆかぬではないか。

まず貴族たる己がそのところを明確にしなければならぬ。そう考えての対応であったが、「侍女頭殿」と呼びかけると、カトリナがわずかにその表情を曇らせる事に気づくこともあった。

貴族としての誇り故のことであろうか。このような僻地の要塞で、呪われた姫に仕えることを恥じているのやもしれなかったが、しかし恥じることなど何もないのである。職分を果たすことは褒められこそすれ、恥じる必要はないのだ。もしカトリナが恥じる必要があるとすれば、姫に対する態度、気持ちの持ち方であろう。

そう考えて、今までアルカイオスはカトリナのこ

とを、姓名で呼んだことはなかったのである。

加えてアルカイオスは、これまで貴族同士の付き合いになど、頓とんと興味がなかったし、それにローゼンディアは広大である。リュトア領というのがどの地域に属するのかなど皆目見当がつかなかった。

そのこともカトリナの名前と姿が一致しなかった原因であるが、やはり職名で呼ぶことが日常であったことが、何よりの理由であろう。

「お久しぶりです、アルカイオス様」

カトリナは優雅に会釈した。

「ああ……侍女頭殿、息災で何よりであったな」

「今まで、アルカイオス様の母上様のお世話になっておりました」

「母上の？」

アルカイオスはさらに驚いた。

「ええ。わたくし、行く当てがないものですから、母上様のご厚意に甘えさせていただきました」

「そうか。……貴女あなたには詫わびなくてはならぬな」

アルカイオスは威儀を正して、カトリナに向き直り、

「申し訳なかった」

と、頭を下げた。

「ア、アルカイオス様っ!？」

カトリナは驚き慌てた。

無理も無い。神々の末裔の中でも最も高貴と類されているひとりに、頭を下げられたのだから。

「お顔をお上げ下さいませ！ わたくしなどに、そのような……！」

「私は己の責務を、ザーレ要塞守備の任務を、^{まっ}とうできなかった」

仇討ちも兼ねていたとはいえ、それで代理を置いて留守にしていたとはいえ、守備に関する全権を委せられていたのは己である。

「……仕方の無いことでした。あの要塞ですもの。どうにもなりませんわ。むしろ、アルカイオス様がお気の毒です」

カトリナは努めて明るく云おうとしているようだった。その心遣いが身に滲みた。

「そう云ってもらえると有り難い。——ともあれ、貴女が生きていてくれて、よかった」

と、アルカイオスはカトリナに微笑みかけた。

カトリナは少し驚いたような顔をして頬を赤く染め、青い瞳を潤ませた。今にも^{まなじり}皆から^{こぼ}涙が溢れそうになった。

そんなカトリナを見て、アルカイオスは自責の念を強めた。

——さぞ恐ろしい想いをしたのであろう。

足を運ぶ暇がなかったため、直接現場を見ていな

かったが、話は聞いている。残虐なトゥライ人らしいといえはらしいが、女まで殺されていたというではないか。

「それで……」

アルカイオスは云い難そうに切り出した。

「用件は何か？ 申し訳ないが、今忙しいものでな……」

「用件はまさしくそのことなんです」

カトリナは懇願するような目でアルカイオスを見た。

「アルカイオス様、どうか、わたくしを人質交換のお役目に同行させていただけないでしょうか？」

アルカイオスはまたまた驚いた。

「姫様のことが心配なのです」

アルカイオスは首を振った。

「駄目だ。気持ちは解らんでもないが、危険なのでな」

「承知の上ですわ」

「いや……悪いが、有り体に云えば、何かあった時の足手纏いになるのだ」

「その際は、わたくしのことはお捨て置き下さい」

「そのようなことができるはずがなからう」

わずかに怒気を含んだ声である。弱き者、戦えぬ者を見捨てるなど、騎士のすることではなかった。

「では、近くまででも構いませんわ。わたくし、姫様が帰っていらした時に、お側にいたいのです。きっと姫様、恐ろしい想いをして帰っていらっしゃるに違いありませんもの。すぐにお慰めして差し上げなくては」

「ふむ……」

一歩も退かないといった様子のカトリナを眺めながら、アルカイオスは考えるような顔つきをした。

「……そうだな。現場に連れて行くことはできぬが、近くまでならよかろう」

ナヴィド族の要求通り、現場に兵は連れて行かぬが、人質の身の安全のために、つまりは護送のために、途中まで連れて行き、待機させておくつもりである。カトリナもそこで待たせておけばよい。

「ありがとうございます！」

カトリナの顔に歡びが広がった。

＊

「人質交換にはあの男が来るのか……」

広広とした草原にぽつねんと在る一騎が、徐々に小さくなっていく。デルギリアからやってきた使者を見送りながら、ナガンは呟いた。

「ザーレ要塞とは思いつたな。危険過ぎやしない

か？」

「だから、お前が行くんだらう？」

出立の準備を整えたヴィシュタに云う。ヴィシュタ率いる一隊は、伏兵として先立ってザーレ要塞に向かうところであった。

「だが……」

「あの男は貴族だ」

貴族とは、正義と名誉を重んじる者たちである。

「それに、これはあの男にとって、名誉挽回となるか、恥の上塗りとなるかのどちらかだ。妙なことはできまい。あの男に関してはさしたる心配は無い。むしろ……」

「……王女、か？」

ヴィシュタが深刻な面持ちで云った。

ナガンの顔に、その美しさを磨き上げるような凄惨さが浮かび上がる。

「あの女、とんでもないものを押しつけてくれやがった。殺し損ねたのが悔やみきれん」

元よりカトリナは、王女は化け物であると言っていた。

とはいえナガンは、「国王の寵愛深い王女」と「忌避される化け物王女」を秤に^{はかり}かけて、「国王の寵愛深い王女」を^と択ったのである。

——先を急ぎすぎた。

と、ナガンは悔やむ。

本来、そういった二者択一などという賭けは、ナガンの好むところではない。生きるか死ぬかなど、馬鹿げていると思う。死んだらすべてが終わる。故に、選択するのではない。作るのだ。確実に生き残れる道を。

しかし、敬愛する兄ゼノンが囚われて、もう一年以上経つのである。兄のことを想うと、気が急いてしまった。

——俺としたことが！

アルカイオスらと^{でくわ}出遇したのは不運であったとも云えるが、族人も八人^{うしな}喪ってしまった。遺体はローゼンディア人によって手厚く葬られたようだが、それがせめてもの救いであった。虫のよい話ではあるが、これが逆の立場の己なら、骨を砕いている。

「王女を取り返したくないという連中も、当然居るに違いない。そいつらがどう動くか……。あの男の手腕に期待するより外無いな」

ナガンは涯しなく高く青い空を見上げた。同じ空の下に居る者たちに、想いを馳せるように。

＊

夕闇迫る空の下に、^{がれき}瓦礫を積み重ねたが如き、

ザーレ要塞の姿があった。一メディオンと少し——
徒歩で四半刻もない距離である。

アルカイオスら人質護送隊二十三人は、そこに腰
を落ち着けて、夕餉^{ゆうげ}を済ませたところであった。

今夜はここで野宿である。明朝、兵はこのまま待
機させて、アルカイオス他三人でザーレ要塞に人質
を連れて行く。

——いよいよ明日か……。

木々の合間から見えるザーレ要塞を眺めながら、
アルカイオスは思う。

——姫はどうかさっておいでか。

^{さら}掠われてから、もう少しで一ヶ月経つ。

大事な人質である。よもや粗略な扱いを受けてい
るとは思い難いが……

あの呪いがある。

それに、異国である。

言葉も、風習も、宗教も、何もかも違う。

まして王女は、物心ついて後はザーレ要塞から出
たことが無いのである。外の世界に触れたことが無
いのである。

戸惑うことも多かろう。心細い思いもしていよ
う。

アルカイオスはリュフィーナの端正な顔を思い浮
かべた。

そして愕然とした。

アルカイオスの記憶にある彼女の顔は、^{はにか}含羞んでいるか、寂しげであるか、虚ろであるかのいずれかでしかなかった。そんな彼女しか知らぬのである。たったの三日間しか、顔を合わせたことが無いとはいえ。

あの呪いがある限り、彼女の顔に心からの笑顔が浮かぶことはないのかも知れぬ。

しかし、王は言った。

——儂はリュフィーナの呪いと戦う！

と。

あの王なら、その戦いに勝利できるのではないか？ ——そんな気がしてならぬ。

できることなら己もその戦いに参加したいものだ、と、アルカイオスは思った。

しかし、己には己の戦いがある。祖父の仇討ちがある。

だから、祈ろう。

王の勝利を。

彼女の顔に笑顔が浮かぶその日を。

明日はその第一歩となる。

明日になれば、彼女はローゼンディアに帰ってくる。そして、デルギリアではなくガレノスに、暗く寒寒しいザーレ要塞ではなく、温かな愛情満ちる王

の館に、帰っていくのだ。

——わたくしは、ここでしか生きられぬ身なので
す。

虚ろな目でそう云っていた彼女が、遂に生まれ故
郷に帰るのだ。

実に^{よろこ}慶ばしいことであった。

しかし——

それなのに——

何やら寂しい気もする。

不意に、あの夢を思い出した。

夢にしてはやけに生々しい、しかし、^{うつつ}現にしては
都合の良すぎる、あの出来事を。

夢の中とはいえ、結婚すべき男女の間でしか許さ
れぬことをした——^{けいけん}敬虔なヴァリア教信徒であるア
ルカイオスはそう思う。

彼女に対する同情心が、あんな夢を見させたの
か？

それとも……

「若っ!!」

その声で我に返った。

振り返ると、野営の天幕がいくつも密集している
間から、キュロスが切迫した形相でやってくる。ア
ルカイオスはただならぬものを感じて、身を^{ひきし}緊縮め
た。

キュロスの口が重重しく開かれた。

その時、夜の訪れを告げる、凍えるような冷たさを持った風が、音を立てて辺りを吹き抜けた。焚き火の炎は揺らめき、ぱちぱちと燃え盛り、草木はやたら耳障りにさわさわと騒^{ざわ}めいた。

そんな喧噪の中、ともすればキュロスの声は掻き消されてしまいそうだった。しかし、掻き消されたのは周りの音の方だった。

——人質が、死んだ……？

それはいったいどういうことなのか？

^{にわか}俄には理解できなかった。

「人質が、死んだ」

声に出してみる。

しかし、えらく空虚に響いただけであった。

アルカイオスは茫然としたまま、キュロスに促されて歩き出した。^{くだん}件の人質、ナヴィド族のゼノンを収容している天幕へと向かう。その周囲では十数人ほどの兵が群がっていたが、アルカイオスがやってくると、道を空けるようにさっと脇に退いた。

天幕の中に入ると、人質の直接的な見張りと護衛

を委せてあった三人の兵士に囲まれて、ゼノンが横たわっていた。

その弟ナガンの如き、一度見たら忘れられぬような印象的な美しさを持っていたわけではなかったが、それでもゼノンは端正な顔つきをした男であった。それが今、見る影も無く醜く歪んでいた。血色よく滑らかであった肌は土気色に濁ってかさつき、赤黒く淀んだ目には生氣に代わって無念が籠もり、未だ苦悶の叫びをあげ続けているような口からは、血と涎よだれが生したたしく滴っていた。

苦しみ抜いて死に至った——そんな顔であった。

そう、明らかに死んでいた。

その体に触れてみても、それを確認するだけでしかなかった。

——人質が、死んだ……

何故死んでしまったのかなど、どうでもよかった。いや、考えられなかった。

人質が死んでしまったというその事実には、アルカイオスは打ちのめされた。

「申し訳ございません！」

三人の兵士が、身の置き場も無いといった様子で、縮こまりながら謝罪する。

「先程まではどうということもなかったのですが、突然苦しみ出しまして……」

「我らには手の施^{ほどこ}しようもなく……」

アルカイオスには、兵士たちの言葉が遠くに聞こえる。

人質が死んだ。

王女と交換する人質が死んでしまった。

ならば、どうなる？

明日は、どうなる？

王女は、どうなる？

「若！ しっかりなさいませ！」

キュロスに叱咤され、体を揺さぶられた。

気がつけば、燈火^{ともしび}ひとつのほの暗い天幕の中には、己とキュロスとゼノンだけであった。

「キュロス……」

力強く頼もしさのある目が、アルカイオスを見ている。

「情ない声をお出しになりますな。呆^{ほう}けている場合ではありませんせぬぞ。若には、そう在ることは許されておらぬのです。この一隊の長たる若には！」

「ああ……」

キュロスの云う通りである。

己は、王から、人質交換における全権^{ゆだ}を委ねられている。

その己が茫然としていたら、どうにもならぬ。

しかし、そうは思えど、なかなか気持ちを切り換えることができなかった。

「死んでしまったものはもう仕方ありません。次、
どうするかを考えなくては」

「ああ……」

「これはどう見ても、毒を食らったとしか思えませぬ」

ゼノンを見ながらキュロスは云う。

「毒殺、でしょうな」

「毒殺……」

「しかし、連れてきている兵は全員デルギリアの
者、素姓のはっきりしている者たちです」

「……」

「若！ 聴いておられるのですか？」

見かねたように、キュロスは声を強めた。

アルカイオスははっとした。

「ああ……明日どうするか、考えていた」

出任せである。何も考えていなかった。

「明日、若はギルテにお帰り下さい」

アルカイオスは訝しんだ。

「明日の人質交換には私が参ります」

「お前が……？」

キュロスは頷き、アルカイオスの青い瞳を見つめ

た。

「私は明日――」

――死んで参ります。

アルカイオスは啞然とした。

「なっ……ばっ……！」

うまく言葉が出て来ない。

「今、兵らに棺ひつぎを作らせております。遺体は丁重にナヴィド族に渡しましょう。逃げ出すなど以ての外、犯人を引き渡し、嘘偽り無く事情を話して、誠心誠意謝罪するより方法がありませぬ。そうであっても、人質交換の場に赴いた者は死を免れますまい」

確かにそれしかない。

しかし――

「それは、国王陛下から委された私の役目だ。あナヴィド族にもそう伝えてある」

「若は次期領主。死なせるわけには参りませぬ」

「次期領主は私でなくともよかろう」

「殿には他にお子がおりませぬ」

「叔父上の子がおる。養子にすればよい」

「しかし……」

なおも食い下がらんとするキュロスに、アルカイ

オスは声を荒げた。

「キュロス！ 我が家に泥を塗るつもりか!?!」

「……」

キュロスは苦苦しい顔をし、アルカイオスから目を逸らすように俯いた。

「当初、人質交換には、陛下御自身がいらっしゃるはずであった。それを譲っていただいたのだ。我らデルギリアの名誉のために。国王・王妃両陛下の御恩情でな。……それなのに、この失態。一度ならず二度も。この上、役目を授かった私が、途中でそれを放棄したらどうなるか？ デルギリアは、セウエルス家は、ローゼンディアのみならずトゥライでもよい嗤いものとなろう……」

「わ、若……若御自身は……」

今まで聞いたことも無い、キュロスの声であった。よく通る、耳に心地よい声が、今は妙にかす嘎れている。俯くキュロスをよくよく見れば、その肩がわずかにふる顫えていた。

そんなキュロスをいと愛しく想いながら、アルカイオスはふと思った。

この男はいったいいつから、こうして己の側に在ったろう。

木刀を振りながら駆け回り始めた時には、もう側に在った気がする。

一回りほど年上のキュロスは、兄のような存在でもあった。いや、兄弟姉妹の居ない己にとって、まさしく兄そのものであったと云ってもよいかも知れぬ。

この男は常に己の側に在った。

何気ない日常の中でも。

生死を賭けた戦いの中でも。

共に、泣き、笑い、鬱陶しいと思ったことも数知れぬ。

しかし――

それも明日になれば……

「キュロス……」

「……」

「今まで苦勞をかけたな……」

アルカイオスはキュロスの肩に手を掛けた。

その瞬間――

キュロスは見事な体捌きでアルカイオスの横に回り込み、頸の後ろに手刀を見舞った。アルカイオスは何かを思う間もなく気を失った。

キュロスは、力無く崩折れるアルカイオスを支えながら、その潤みを帯びた灰色の瞳に、決意の光を宿らせていた。

「若、泥は私が被^{かぶ}りましょう」

＊

目が覚めた。

枯葉色の天幕の天井が見えた。

揺れる^{とうか}燈火に、ゆらゆらと照らし出されている。

「申し訳ございません」

キュロスの声がした。

アルカイオスは声の方を振り向こうとした。

が、体の様子が何かおかしい。自由に動かせぬ。

両手両足を縛られ、^{さるぐつわ}猿轡を嚙まされていた。

「う——っ！」

声をあげ、身動ぐと、キュロスの顔が視界に入ってきた。ひどく思い詰めた顔である。灰色の瞳に悲愴なものが浮かんでいる。

アルカイオスは何やら不吉なものを感じた。

「うう——っ!!」

やめろ!! ——と叫んだが、呻きにしかならぬ。

アルカイオスは大きく目を見開いて、キュロスの灰色の瞳を凝視した。そこから何かを読み取ろうとした。しかし、何も解らなかった。いや、それが己が望まぬことであるということだけが解った。

キュロスの口髭がわずかに動いた。

^{むほん}「謀叛を起こします」

云うやいなや、キュロスは刀を抜き放って、ゼノンの胸に突き立てた。

「——っ!!」

アルカイオスは声にならぬ叫びをあげた。

ゼノンの胸から刀が引き抜かれる。すでに死んでいる所為か、吹き出るほどの血は出なかった。

「私は半分トゥライ人ですからね。人質を殺してトゥライに走った、それで充分です。後のことは王都の連中が考えてくれるでしょう」

キュロスはアルカイオスに背を向け、天幕の出入口に垂れ下がる布で、刀に附いた油脂を拭った。

「兵二十人……なかなか厳しいものがありますな」

アルカイオスは仰天した。

——兵を殺す気か!?

許し難いことであった。

兵を統率する者にとって、兵ひとりひとは己が生命にも等しいものである。

「う——うう——う——っ!!」

(やめろ！ キュロス！ そんなことは許さん！ 頼む！ 頼むから、私にお前を見損なわせないでくれ——っ!!)

アルカイオスは自由にならぬ体で身動き^{みじろ}、必死に叫んだ。

「ご安心下さい。謀叛人らしいところを見せなけれ

ばなりませぬのでな。殺しはしませぬ。——まあ、それだけの余裕があれば、ですが」

「うう——っ!!」

「ナヴィド族も、もう傍まで来ていることでしょう。この騒ぎに気がつくかも知れませぬが、若の御指示通り、ヘルマデイス要塞に指示を出してありますし、兵の中にはヘルマデイス要塞に駆け込む者もございましょう。……まあ、この辺は運次第ですが、致し方ありますまい」

「うう——っ!!」

「私のことは怨んで下さって構いません。忘れて下さっても構いません。——ただ、最後にひとつ、申し上げさせて下さい」

キュロスはアルカイオスに背を向けたまま、刀を握り直し、出入口の布に手を掛けた。

「キュロス・バルダスは、若のお側におれて幸せでございました」

出入口の布が舞い上がった。

天幕の内に、橙色の光が射し込む。

焚き火の、燃え盛る炎が放つ光の中に、キュロスは一步踏み出した。

その時——

「敵襲——っ!! 賊が襲ってきた——っ!!」

＊

熱かった。

身も、心も、周囲も。

夜の闇に叛逆の咆哮ほうこうをあげるが如く、天幕が次々と燃え上がり、辺りは明明あかあかと照らし出され、熱されていた。

揺れる炎と深い夜闇の狭間で、剣戟と叫声と血飛沫が飛び交う。

人馬・敵味方入り乱れる、混戦であった。

カトリナを護りつつ、次から次へと襲い来る敵と戦わねばならぬアルカイオスには、敵の数は判然としない。周りを見回している余裕など無い。多勢であるとしか判らぬ。ただ、血と汗にまみれて戦い続けるばかりである。

キュロスの謀叛を制するように、敵はやって来た。謀叛どころではなくなっていて、キュロスはすぐさまアルカイオスの縛いましめを解いた。

敵はいかにも山賊の風体であった。しかし、手を合わせてみれば、その中身はそうでないことが容易に判った。

——刺客。

そうに違いない。

人質を殺しにやって来たのだ。

いや、人質と護衛隊を、だ。

人質を毒殺したのがこの刺客の仲間かどうかは判らぬが、この刺客を放った者は、山賊に襲われるという不慮の事故で、人質が死んだということにしたいようである。

——いったい、誰が……？

いや、そんなことはどうでもよい。

今は、とにかく生き残らねばならぬ。

襲い来る刃を刃で受け止める。途端、甲高い音が生じて、アルカイオスの刀が真っ二つに折れた。無理も無い。もう何人斬ったか判らぬが、刀は大分疲弊しているはずだった。

受け損ねた刃は軌道を逸れたものの、アルカイオスの左の二の腕をざっくりと斬り裂いていった。

「ひっ!!」

アルカイオスの代わりに悲鳴をあげる者が、背後に居た。カトリナである。

「侍女頭殿っ！ 頼むから目を閉じてくれるな！ 辛いかも知れぬが、ここは戦場だ。目を閉じたら死ぬぞ！」

屍体から奪った槍で敵の喉を突きながら、何度云ったか知れぬ言葉を再度云う。返ってくるのは、

案の定頼りない声であった。

人を庇護^{かば}いながら戦うというのは、想像以上に大変なものだとアルカイオスは痛感していた。つい先頃まで、先陣を切って敵中に突っ込んでいくのがアルカイオスの戦い方であったのである。後方を気にせねばならぬような戦い方をしたことがなかった。

従騎士の如く、周りに目端を利かせ、武器を補充してくれるなどということはまったく期待してはいないものの、カトリナは、どうしようもないほどにアルカイオスの足を引っ張ってくれる。アルカイオスが絶えず指示を飛ばさねば動けず、戦いの一挙一動に小さく悲鳴をあげ、ともすればアルカイオスにしがみつこうとするのである。戦場を知らぬのだから仕方の無いことではあるが、そうと解っていても苛立たしさを抑えきれぬ。

しかし、なんであれ自業自得であった。カトリナに同行を許したのは己自身なのである。

——油断していたのかも知れぬ。

人質を毒殺されたことも然りである。

そうしてキュロスに、死の決意のみならず謀叛の決意までさせてしまった。

——くそ！

己自身に対する苛立たしさが、大きく燃え上がる。すぐ傍で、天幕を焼き尽くしている炎の如く。

「ああ——っ!!」

^{つんざ}
劈くような咆哮をあげて、アルカイオスは槍を
^{ふる}
揮った。

第十四章 宿業

——もう、駄目だ。

夜空に輝く星々を眺めながら、アルカイオスは思った。

血と汗、焼け焦げた草と肉の臭いを含んだ夜風が、大地に倒れたアルカイオスの体を優しく撫^なでていた。熱く火照^{ほて}った体に、心地よい風であった。臭いは気にならぬ。すでに鼻が馴れていた。

——もう、動けぬ。

今襲われたら、確実に死ぬだろう。

まんしんそうい
満身創痍であった。

疲弊しきっていて、体のどこがどう傷附いているかも判らぬ。いくつか深傷^{ふかで}も負っているようであった。体の奥深いところに、危険を感じさせる痛みがある。

記憶も途中から飛んでいた。

灼熱^{ただなか}の直中に在って、身も心も周囲も何もかもが融^とけ、混ざり合い、気がつけば、こうして倒れていたのである。

周囲はすでに、夜の静けさと、星明かりのささやかな明るさを取り戻していた。

——侍女頭殿はどうなった……？

ふと思った。

残っている記憶の中では生きていたが、消し飛んでしまった記憶の方では判らぬ。

正直、護り切れた自信が無い。

己は、彼女を放り出して、敵に突っ込んでいったのではないか？

そう思う。その可能性が強い。

アルカイオスは、溜息と共に目を閉じた。自己嫌悪が、アルカイオスの身を浸し始める。

不意に、草を踏み締める足音が聞こえてきた。

どくん

と、アルカイオスの心臓が飛び跳ねた。

——敵……？

敵だったら……

見つけられたら……

——確実に死ぬ。

冷たい汗が滴り落ちる。

あろうことか、足音はこちらの方に向かってきている。近づいてくるに従い、アルカイオスの胸の鼓動が高く速くなっていく。呼吸が否応も無く激しく乱れ始める。

——どうする!?

アルカイオスは体を硬くさせた。

父祖イスターリスには、死者に紛れて危機を脱する神話がある。

故に、その末裔である己にとって、死んだ振りは決して恥ではない。

——屍体に紛れることができれば……。

だが、この相手が敵であるならば、必ず確認をするだろう。何者の命を受けたのかは分らぬが、最初から人質殺害を目的としてきた連中である。一人の生き残りも見逃すとは思えなかった。

呼吸の乱れを抑えることができぬ。

恐怖故に。

——情ない。

敵の直中に突っ込んでいく時の勇気はどうした？

……いや、違う。

あの時この体は自由に動いたが、今は違う。思い通りにならぬ。抗う術が無い。

そう思い至ると、呼吸はさらに乱れた。

こんな死に方は御免だった。

——神よ！ 我が父祖イスターリスよ！

祈りを^{ささ}奉げた途端、アルカイオスはびくりと体を^{ふる}顫わせた。頬に冷たいものが押しつけられていた。

「……大丈夫、ですか？」

おずおずとした声が降ってきた。聞き覚えのある女の声である。

アルカイオスは恐る恐る目を開いた。

夜闇に、返り血に汚れた、金の髪と白い肌が浮き上がっていた。青い目が、心配そうにこちらを覗き込んでいる。

「侍女頭殿……」

アルカイオスは脱力した。心底安堵し、大きく息を吐いた。

途端、激しい痛みが襲ってきた。体を硬くして、歯を食いしばって呻いた。

「アルカイオス様！」

「大丈夫……大丈夫だ。気にすることはない」

今の痛みからして、とても大丈夫とは思えなかったが、カトリナを不安がらせてはいけない。

ここは戦場であるし、まだ敵が残っているかも知れぬのだ。混乱を起こされては、救けられるものも救けられなくなる。

「でも……」

「侍女頭殿が不安がる必要はない。私は慣れておる故」

苦痛を隠して微笑みかけると、カトリナも少しは安堵したのか、微笑み返してきた。

「『侍女頭殿』ではありません。『カトリナ』で

す」

「カトリナ……」

促されるままにそう呟くと、カトリナは今にも泣き出しそうな顔で笑みを浮かべた。

「アルカイオス様……」

カトリナの顔が近づいてきた。

何かを考える前に、唇が重なっていた。

その唇の熱さに、アルカイオスは戸惑った。が、脱力しきっている心身には、何かを考える気力も、する気力も無かった。されるに委せ、その熱さだけをただ感じていた。不思議と、懐かしさを^{おぼ}感覚えつつ。

「……ご無事でよかった」

目を潤ませ、頬をほのかに上気させつつ、カトリナは云う。

「カトリナも……」

「ええ、アルカイオス様の御蔭ですわ」

「私は……^{あなた}貴女を……護れたのか？」

「はい。ですから、こうしてお側におります」

カトリナは、アルカイオスの頬に押しつけていた濡れ布巾を動かし、アルカイオスの顔に附いた血や汗や泥を優しく拭い始めた。

「皆は……皆は、どうなった？」

「……」

カトリナの手が止まった。気不味げに、アルカイオスから目が逸らされる。

そんなカトリナの様子に、アルカイオスは驚きはしなかった。

——やはり。

諦めにも似た哀しさで、そう思っただけである。

いや、いろんなことが一度にありすぎて、よく理解できていないのかも知れぬ。

すべてに現実味が無かった。

「恐らく、敵も味方も……皆……」

「……そうか」

ふたりの間に、重苦しい沈黙が落ちる。

皆——ということは、キュロスも……恐らくは…
…。

アルカイオスは茫然とした。

——また、ひとり生き残ってしまった。

ひとり生き残って、どうせよというのか？

皆を吊うために、残されたとでもいうのか？

己は、祖父を、キュロスを、人質を、兵らを死なせてしまった。

そして、恐らくは、王女までも死なせることになってしまったのではないのか？

それなのに、この上なお、己は生きなければならぬというのか？

——^デ運^ユ命^ーの^ノ三^イ女神よ……女神よ……お教え下され……

不意に、温かく滑らかな両手に、顔を押し包まれた。

「アルカイオス様……」

憂いを帯びたカトリナの顔が、間近に迫ってくる。

また唇を重ねられるのだろうかと思っていたら、今度は皆に^{まなじり}口づけられた。

「お泣きにならないで……」

アルカイオスははっとした。

己は泣いていたのだろうか。

——^{ひと}他人に涙を見せるなど、無様な……。

「わたくしがおります。カトリナがおりますわ。あなた様のお側に」

優しい眼差しが、アルカイオスに注がれる。

——慰めてくれるのか……。

温かなものが、アルカイオスの胸にしみ込んでいく。

「ありがとう……」

「ギルテへ……ギルテへ一緒に帰りましょう」

「ギルテへ、帰る……」

そう呟いた途端、アルカイオスはそれに躊躇いを感じた。違和感を感じた。

——ギルテではない。

己が行かねばならぬ場所は。

己には果たさねばならぬことがあったのだ。

そうだ。ひとり生き残ったのは、そのために違いない。

「ギルテへは行かぬ」

アルカイオスは宣言した。

カトリナは、不思議そうに目を瞬しばたいた。

「アルカイオス様……？」

「時間がないのだ。貴女をヘルマティス要塞へ届け
たら、私はザーレ要塞へ行く」

「……」

カトリナは啞然とした。

「え……ザーレ要塞……？ 何を……？」

「私は最後まで役目を完まっうせねばならぬ」

カトリナは訝しげな顔をした。アルカイオスが何を云っているのか、理解できておらぬ様子だった。

「役目は……役目はもう終わりましたわ。人質が死んでしまったのですもの。人質交換など、できないではありませんか」

「いや、交換場所へ行き、ナヴィド族に謝罪するまで、役目は終わらぬ」

カトリナは仰天した。

「そ、そんな……死にに行くようなものですわ!!」

「ああ……そうやもな。しかし、これより他に、誠意の見せ方が分らぬ」

「何故、アルカイオス様がそのようなことをしなくてはならないのですか？ アルカイオス様は何もお悪くないではありませんか！ だって、人質は賊に襲われて死んでしまったのですもの。どうしようもない事故でしたわ。それにこんな傷では、無茶というものですわ」

「人質は毒殺された。……いや、なんであれ、人質は殺されてしまったのだ。その責は問われる。人質を無事届けて交換するのが、私の責務であった故」

「今更……今更なんの意味があるというのです？ 謝罪したところでどうなるというのです？ 交換すべき人質が死んでしまったのですもの。どうしたって、姫様は戻ってきませんわ！ 死ぬに決まっていますわ！」

——姫が死ぬ。

そのことが、アルカイオスの胸に深く突き刺さる。

己は、あの不幸な少女を、不幸なまま死なせてしまうのか……。

胸中に苦苦しさが拡がる。

つい最前まで、明日は希望に満ちたものであったはずであった。それが今やどうだろう。希望は見る影もなく粉粉に碎け散った。

これもまた、運命なのか……。

——^{デューノイ}運命の三女神よ、お恨み申しますぞ。

「ザーレ要塞へ行っても、無駄死にするだけですわ！　ここで死んでしまったら、お祖父様の仇討ちもできなくなってしまいますのですよ？」

——お祖父様の仇討ち……。

なんということだろう。それすらも果たせずに終わってしまうのか。

「お祖父様にはあの世で詫びよう。必ずや解って下さる。いや、ここでザーレ要塞へ行かなければ、私はお祖父様に、勇者の館に^{いま}坐す父祖たちに、顔向けできぬ」

カトリナは激しく首を振った。

「駄目です！　嫌です！　わたくし、アルカイオス様に死んで欲しくないのです！　わたくし……わたくし、アルカイオス様を愛しているんです!!」

カトリナの目から、大粒の涙がぽろぽろと^{こぼ}溢れ、アルカイオスの顔に落ちてきた。

己を愛してくれる人が居る——それはなんと歓ばしいことか。アルカイオスはカトリナを愛しく想い、優しく微笑んだ。

「ありがとう。とても嬉しい」

「ですから……ですから……」

「行かなくてはならぬ」

カトリナの言葉を遮って、アルカイオスはきっぱりと言った。力の籠もった目で、カトリナを見つめながら。

「……」

カトリナは滂沱と流れる涙もそのままに、唇をふる顫わせながら口を開いた。

「実は、お子が……アルカイオス様のお子が居るんです」

アルカイオスは訝しんだ。

——私の、子……？

「アルカイオス様のお子が、わたくしの胎内おなかに居るんです」

と、カトリナは己の下腹に手を当てながら云う。

アルカイオスは茫然となった。

——この女との間に私の子が……!?

憶えが無い。まったく。

「フィラデル祭、最終日の夜、大地母神メーサがお授けになったのです」

カトリナは頬をほんのり染めながら云う。

アルカイオスは大きく目を見開いた。

——フィラデル祭、最終日の夜！

相手は王女ではなかったのか!?

いや、あれは夢ではなかったのか!?

アルカイオスは狼狽した。

「憶えが無い———そうおっしゃいますか？」

「いや……」

言葉が出て来ぬ。

「そうかも知れませんわね。ひどく飲んでらしたから。でも、生まれてみれば判りますわ。この子はきっと、アルカイオス様のような、青い瞳と銀褐色の髪を持っているでしょうから」

「……」

「だから、わたくしたち、ギルテに帰らなくてはならないのです。この子のために」

「……」

ただただ茫然とするアルカイオスに、カトリナは哀しげに柳眉を顰めた。

「まさか……まさか、アルカイオス様は、わたくしたちをお捨てになるなんてことはございませんわよね？ ——わたくしの父のように」

「え……？」

「わたくしの父、リュトア領主レクシスは、わたくしの母がわたくしを孕むと、わたくしたちを捨てたんです。ザーレ要塞に」

アルカイオスは息を呑んだ。

領主ともあろう者が、なんたる悪逆か！

「なんと不憫な……。安心するがよい。私は貴女を捨てたりはせぬ。貴女は私の妻なのだから」

カトリナの顔に、この上無い喜びが満ち、涙が溢れ落ちた。

「アルカイオス様っ！」

カトリナは再び唇を重ねてきた。

口づけを交わしながら、アルカイオスはなんとなしに納得した。この口づけに懐かしさを感じたのは、初めてではなかったからであろう。

——私はこの女を愛したのか。

あの少女の代わりに。

あの少女の代わりに、この女を抱いたのだ。

——なんということを……。

アルカイオスは己の下劣さに吐き気がした。

「……すまなかった。貴女には、辛い想いをさせたかも知れぬ」

カトリナは微笑みながら首を振った。

「いいえ。過去のことなどどうでもよいのです。これからが幸せなら。——ですから、明日、一緒にギルテに帰りましょう」

「いや、帰らぬ」

カトリナの笑顔が凍りついた。

「私の子が居ると判って安心した。これで心置きな

く死ぬる」

アルカイオスは、何かが吹っ切れたような晴晴とした顔をしていた。

「どうか、生まれてくる我が子に伝えてくれ。私が――父が、堂堂とザーレ要塞へ向かったことを」

カトリナは硬張った顔で首を振った。

「嫌です……そんなの、嫌です。一緒に帰りましょう、ギルテへ。わたくし、アルカイオス様と一緒になければ、幸せになれません！」

アルカイオスは目を細め、小さく微笑んだ。

「貴女の気持ちは嬉しく思う。その気持ち、この心に籠めて、あの世へ逝こう」

カトリナはなおも激しく首を振る。

アルカイオスは微笑みながら、わずかに溜息を吐いた。

「貴女も貴族なら解るであろう？」

カトリナはぴたりと動きを止め、硬直した。心なしか青冷めてもいた。

「あ……はい……わたくし、貴族の娘ですわ。領主の娘ですわ」

と、抑揚のない口調で云う。

「私は、貴女にも、生まれてくる子にも、恥ずかしい想いはさせたくない。貴族として、立派な夫であり父でありたい。――解ってくれるな？」

「あ……っ……は……っ」

アルカイオスは訝しんだ。カトリナの様子が何かおかしい。その顔はすっかり青冷め、目は虚ろ、口は小さく^{わなな}顫動している。

と思ったら突然、生き返ったかの如く顔が明るくなった。

「そうだわ！ アウラシール……アウラシールへ行きましょう、アルカイオス様!!」

アウラシールはローゼンディアの南東にある大国である。正確には一つの国ではなく都市国家連合であり、諸王国と呼ぶのが正しい。

アルカイオスは眉を顰めた。カトリナが何を云っているのか理解できぬ。

「何もかも捨てて、アウラシールへ行くのです。いえ、アウラシールでなくたって、レメンテムでも、ヴァルゲンでも、トゥライでもよいですわ。ローゼン^こディア以外ならどこでも。わたくしたちのことを知っている者が居ないところならどこでも。そこでやり直しましょうよ。親子三人で」

この上ない名案であるとしてもいうように、カトリナは高らかに言い募った。

アルカイオスは呆れた。

「何を言っている！ それでも貴女は貴族か!? 神々の直系の末裔たる、私の妻か!？」

あまりに呆れた所為か、思わず怒鳴りつけるような口調になってしまった。

カトリナはびくりと体を顫わせ、心底驚いたような顔をした。王都で悪の種族と遭遇することがあっても、これほどの顔はすまい。

「うっ……ああ……は……っ……」

カトリナの様子が再びおかしくなった。先程よりもひどい有り様であった。恥じらいも何もあったものではない。止め処なく涙を溢れさせ、^と嗚咽した。

アルカイオスは狼狽した。

——言い過ぎたか……？

しかし、言わずにはおれなかった。

これが己の妻かと思うと愕然とした。

無理も無いことであった。

責任逃れをする、誇りあるセウエルス家の名を、汚すのみならず捨てるなどということは、正真正銘の貴族たる、アルカイオスの理解の範疇を大きく越えているのである。

「……すまぬ。とにかく、私はザーレ要塞へ行かねばならぬ」

「そんっ……そんなに……あの化け物が……よいの、ですか!？ わたしより、もっ……あの化け物……の方が……だいじ……なんですかっ!？ ……わたし…
…アル、カイオスさま、の……妻なの……にっ!!」

鼻にかかった声で、嗚咽混じりにしゃくり上げながら云う。

「化け物……？」

カトリナはアルカイオスの左頬を愛しげに撫でながら、右頬に、涙に濡れる己の左頬を重ねた。

「アルカイオス、さま……愛しい、アルカイオスさま……そうまで、あの化け物の呪いが……あなたさまのお心を、蝕むしばんでいるのですか……お可哀想な、アルカイオスさま……今、わたしが、解放して差し上げますわ……」

「！」

アルカイオスは、戦士特有の勘でカトリナを突き退けた。――が、体はまだ思うように動かぬ。カトリナが振り下ろした短剣の軌道を、わずかに逸らしたただけであった。アルカイオスの頸をかすめて、ざくりと地面に突き刺さった。

アルカイオスは反対側に転がって、カトリナから距離を取った。それはまったく以て鈍い動きであったが、所詮、カトリナは戦いの素人である。すぐに攻撃してこなかった。アルカイオスは取り敢えずの難を逃れ、儘ままならぬ体を起こそうとした。

カトリナは傍らに落ちている血刀を取り上げ、それを両手で引き摺りながら、アルカイオスに近づいていく。

涙でふやけてしまいそうなカトリナの目は、恐ろしいほどに虚ろであった。

「お逃げにならないで。もう他に方法がないのです。折角、あの化け物を^{さら}掠ってもらったというのに、あの化け物をアルカイオス様から引き離したというのに……駄目だったみたいなんですもの。わたし自ら手を汚して、人質を毒殺までしたのにね」

その言葉に、アルカイオスは驚愕した。

「貴女の^{たくら}企みだったのか……!？」

「企みだなんて……わたしはただ――」

――幸せになりたかったただけなんです。

カトリナは^{ほほえ}微笑んだ。夜の闇よりもなお、深く暗く。

そこに在る心を悟って、アルカイオスは胸が苦しくなった。吐くような叫びをあげたくなった。

――^{デューノイ}運命の三女神よ！ 何故このような運命を死すべき身の人の子にお^{さず}授けになるのですか!？」

己が幸せのために悪に手を染めるとは、いったいどういうことなのか？

アルカイオスには想像もつかぬ。

しかし、途方も無いことであろうと思う。

ザーレ要塞に捨てられた――と、カトリナはそう

云っていた。

——姫だけではなかった。

ここにも同じ境遇の少女が居た。

この少女はあの少女であり、あの少女はこの少女であった。

カトリナは両手で刀を振り下ろした。が、心乱れ、しかも刀の重さに振り回されているため、避けるまでもなく狙いを外れて地面を打った。アルカイオスの足元に鉄棒を叩きつけたようなものであった。

「うっ……」

カトリナが呻いた。刀を取り落として右肩を押さえた。今の一撃で肩をおかしくしたのかも知れぬ。

刀に限らず、武器とは屈強な戦士が扱うことを前提としている道具である。素人の、しかも女の細腕に扱える代物ではない。

「やめろ！ 戦士でない者が武器を使うものではない。貴女の方が怪我をする。今ので肩がおかしくなったはずだ！」

アルカイオスは必死でカトリナに忠言した。しかし、カトリナは聴かぬ。右肩を押さえながらよろよろと、大地を覆う血と肉塊の中に、他の武器を探し始めた。

「こんなことはやめるんだ！ 攻撃されたら、私も

貴女に攻撃せざるを得ない。貴女を殺したくはないんだ！ 私の死を望むというのなら、貴女がその手を汚さずとも、明日、私は死ぬ。ザーレ要塞で死ぬ！」

言いながら、アルカイオスは近くにあった槍を掴んだ。

「ザーレ要塞には行かせませんわ。あの化け物の目に触れさせたくないの。あの男の手で殺させたくないの」

カトリナは、累累たる死屍の中から、矢が装填されたままの十字弓を取り出した。

「アルカイオス様は誰にも渡しませんわ。わたしのものなんですもの」

と、カトリナは満面の笑みを浮かべて、アルカイオスを振り返った。

途端、その笑いがそのまま凝固した。

カトリナの胸を、投槍が貫いていた。

アルカイオスではない。槍はまだ手に握られている。

別の何者かが放った槍である。

しかし、アルカイオスは、その何者かを確認することができなかった。

胸を、十字弓から放たれた矢に貫かれていたのである。

「若、御無事ですかっ!?!」

キュロスの、声。

よかった。無事だったのか……。

すぐ傍にひざまず跪く気配を感じ、アルカイオスは首を動かした。

体に手が回され、ゆっくりと助け起こされた。

言葉を発しようとしたが、口から出てくるのは血の泡ばかりである。

「若っ、若っ……!!」

取り乱したキュロスの声だけが、やけにはっきりと耳に届いた。

己はこんなところで死ぬわけにはゆかぬ。

ナヴィド族に会わねば……。

事情を説明して詫びなければならぬ。

姫……。

祖父の仇も、まだ討っていないというのに……。

体が、燃えるように熱かった。

息ができない。

——お赦ゆるし下され……。

結局、己は何もできずにこのまま死ぬのだろう。

姫を救いたかった。

祖父の無念をは霽らしたかった。

カトリナも……。

もっと早くに彼女の気持ちに気づいていれば…
…。

——お赦し下さい……。

薄れゆく意識の中で、アルカイオスはただ詫びることだけしか、できなかった。

カトリナが地面に倒れた。

ふたりは大地母神メーサの、慈悲深き緑^{てのひら}の掌の中へと、還^{かえ}っていった。

「若——っ!!」

戦場に、キュロスの悲痛な叫びが響いた。

＊

七の数を持つ死の御使い——オルディヌスの訪れを告げる馬蹄の音を聴きながら、カトリナは歓喜と至福に浸っていた。

——アルカイオス様に殺された。

なんという悦^{よろこ}びか。

アルカイオスを自らの手で殺した後は、彼の人の後を追って、冥^{ユノー}界へ逝くつもりだった。アルカイオスの居ない世界に、己の幸せなど在りはしないのだから。

とはいえ、真実、アルカイオスの子をこの身に孕^{はら}

んでいたのなら、死ぬつもりはなかった。アルカイオスを殺した後は、我が母タニアの如く、女手ひとつでアルカイオスの子を育てていたに違いない。

すべての生命の与え手である大地母神——その祭りの期間に、男女が愛し合えば、メーサがふたりの間に子を授けてくれると謂われている。

——でも、女神は授けて下さらなかった。

きっと、あの化け物の所為だ。

あの化け物の呪いが、アルカイオスの身も心も何もかも、すべてを虜とりこにしているに違いない。

——でも、それももう終わり。

ユノー冥界にまでは、ノムス人間界に居るあの化け物の呪いは届かぬであろう。

アルカイオスは、ユノー冥界で解放されるに違いない。

そうして漸ようやく、己とアルカイオスは、真実、身も心も結ばれるのだ。

——お母さん、わたしたち、ユノー冥界で幸せになれますよね？

＊

定刻になっても、約束の人質護送隊は現れなかった。

何かあったとみるのがよいだらう。

やはりこの化け物が帰還することを、歡ばない連中がいるのだ。ナガンはちらりと横目でリュフィーナを見た。

彼女はもう長いこと、そこに^{たたず}佇んでいた。要塞に到着してから、ずっとそのままである。

足の下には石が置いてある。オロイが呪を書き込んだ石である。

石には疾駆する馬が描かれている。オロイの説明によると、この馬はどこまでも駆け続けて、この女に^{ネール}死の神の指が届かぬようにするという。

事実、あの恐ろしい呪いは^{あらわ}顕れていない。ナガンはオロイの凄さを、改めて思い知った。

とはいえリュフィーナに、いつまでもここに立っているように命じたわけではない。ナガンはただ、「あの男が来るまでここで待つんだな」と云っただけである。

「ここ」とはこの要塞の意味である。だから別段、この場でずっと立ち続ける必要はないのである。

リュフィーナの姿には、開放への期待も、または見捨てられる恐怖も、何も見られなかった。

ただ静かに立っているのだ。

いったい、どういう女なのか？　と思う。

^{さら}掠ってからこの方、^{かた}それなりに観察してきたつも

りではあるが、それでもこのように、どう判断してよいか判らぬ態度を見せることがある。

単に我が儘^まであるとか、または怯懦^{きょうだ}なだけであるとかの方が、余程^{よほど}分りやすい。

恐怖で叩きのめせばよいからである。事実、富裕な商人や神官など、この手の扱いの楽な「客」には困ることはない。

または性根の据わった「客」もいる。こういう手合いは別の意味で扱いやすいので、やはり上客ではある。

いずれにしても、分りやすい相手が望ましいわけだが、その点、この女は最悪の部類と云えた。

性根は据^すわっているようではあるが、かといって何か要求をしてきたり、取り引きを持ちかけてきたりするわけではない。

ナガンの目には、リュフィーナがただ状況を受け入れて、流されるように生きているのだと観えた。

それは、信じ難いことであった。トゥライのような過酷な自然環境の中で生き抜くためには、状況をそのまま受け入れて流されるなど、あってはならぬのである。

ナガンは怒りを感じたが、それをぶつけてよい相手ではないことも、よく分っていた。

あれだけ凄^{すさま}じい呪いを身に纏^{まと}って生まれてきたの

だ。その人生は、決して喜びに満ちたものであったはずはあるまい。

故にこの女が流されるように生きてきたとしても、その責任を本人に追及するのは酷こくというものである。

アウラシールはともかく、トゥライには、持って生まれたものに対する責任という考え方はない。

だからこの女は悪くない。ただ、不幸なだけだ。

あの呪いを見れば恐れぬ者は居ない。ナガンでさえ戦慄を禁じ得なかったし、事実、ナヴィド族は恐慌に陥りかけたのだ。

いや、ひとりだけ恐れぬ者が居た。部族のカムラン、オロイである。

オロイは部族の者たちに恐れる必要は無いこと、自分が対策を探してくることを約束して、ひとりで旅立った。六日前のことである。

「新しい足を探してくるでのう……」

オロイはそう云っていた。意味は解らない。いつものことであるが。

向こうの世界を熟知したカムランの云うことは、こちらの住人には計り難い。

帰る期限とオロイが約束したのは三日後だが、残

念ながら待ってはおれぬ。こういう人質交換には、
時期というものがあるのだ。

ナガンにも、ひよっとするとあの恐るべき呪いに対して、オロイが何かの対策を持って帰るかも知れぬという期待はあった。いつまでもこの大きな呪石を、持ち運ぶわけもゆかぬからである。

だがどのみちリュフィーナは人質と交換するのだし、今更それを考えても詮無いことである。

リュフィーナは無言で立ち続けている。その姿は、アヌーレフの脇に立つ旗を連想させた。

草原の中に設え^{しつら}られるアヌーレフは、神を降す神聖なものである。場所はその時々によってカムランが決める。すなわちナヴィド族ではオロイの仕事である。

アヌーレフには祭祀の時以外、人が近づくことはない。だからいつも少し離れたところから見ることになる。

そのことに、なんだか恐いような寂しいような感じを受ける。オロイに話すと、「神聖なものとはそういうものだ」と教えてくれた。ナガンがまだ小さい頃の話である。

「ナガン」

やや慌てた様子で、ヴィシュタが要塞から出てきた。

「どうした？」

「ちょっとこっちに来てくれ」

ザーレ要塞に登り、高いところから周囲を眺めてみれば、比較的近場の上空を、鳥の群が旋回していた。

「誰か調べに行かせろ」

呟くと、ヴィシュタは大声で下にいる族人に命令を伝えた。

ナガンは報告を受けると、要塞内にいる全ての族人を引き連れて、そこに駆けつけた。

無論、リュフィーナも一緒である。馬に乗せておけば、つまり大地から離しておけば、しばらくは問題ないと聞いているし、報告が正しいとすればもう要塞に戻ることはないからである。

果たして、^{ししるいるい}死屍累累たる惨状が、そこに在った。

天幕の屋台骨と思しき、黒焦げの焼^{ほっくい}け木杭が幾つもそそり立つ中、五十を優に超える人馬の屍体が転がっていた。

黒焦げ黄ばみ、^ず擦る^む剥けた皮膚の下から、目にも鮮やかな真っ赤な肉を見せている者……切り裂かれた腹から、黒ずんだ血をこびり附かせた、ぷりぷりとした内臓をはみ出させている者……顔面を潰され、血と肉と骨と^{のうしょう}脳漿と目玉が、^{こんぜん}渾然一体となつて

いる者……

それらが纏^{まと}っている、汚濁にまみれた身^{みな}扮りは、ローゼンディア兵と山賊と思しきものであった。

すなわち、ローゼンディアの人質護送隊は山賊に襲われた——そのように見えた。

鼻を突く異臭が嘔吐^{おうと}を誘ったが、吐く者は居なかった。受けた衝撃に大きさに、皆啞然としているのだろう。

屍肉喰^{しにく}らいの獣たちによる饗宴は、すでに始まっていたのかも知れぬ。先着の族人たちに追い散らされたと思しき獣が、遠巻きにこちらを窺っていた。

鳥^{からす}たちは非難がましい声をあげながら上空で飛び回り、野犬たちは恨めしげな呻^{うな}り声をあげて辺^{うろ}りを彷徨^{うろ}いでいた。

その中を、先着の族人たちが、屍体を調べて動き回っていた。

やがてその内の一人がナガンの元に走り寄ってきた。気不味そうに何か呟くと、躊躇^{ためら}いがちに持っていた物を手渡した。

おそらく死者の誰かが身に付けていたものであろう、元は紐^{ひも}か何かを通していた首飾りのようであった。

ナガンは顫^{ふる}える手で、それを握り締めた。

「ううおおおお——っっ!!」

大地に膝をつき、慟^{どうこく}哭した。

天を仰ぎ、吼^ほえ、吐くようにして慟^ないた。

「あぐぐぐぐぐ——っっ!!」

激しい、剥^むき出しの悲しみであった。

ヴィシュタがゆっくりと歩き出し、ナガンの傍に寄っていった。

リュフィーナは、ただ茫然とするばかりであった。

了

奥付

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などとは、一切関係ありません。

※この作品を、個人的に楽しむ範囲を越えて、無断で、複製、転載、配布、改変、販売等を行うことを禁じます。

=====

=====

■作品名：死地に咲く花 第一部

■著作者：琴乃つむぎ / WordsWeaver

■初版：2005-01-14

二版：2005-02-24

三版：2005-03-09

■ 掲 載 サ イ ト : WordsWeaver

<http://wordsweaver.com/>

=====

=====